

文部科学省

多様性に応じた新時代の学び充実支援事業

令和5年度研究成果報告書

徳島県教育委員会

研究拠点校	徳島県立徳島中央高等学校
協力校	徳島県立徳島科学技術高等学校
協力校	徳島県立富岡東高等学校
協力校	徳島県立鳴門高等学校
協力校	徳島県立名西高等学校
協力校	徳島県立池田高等学校

研究成果報告書目次

【1】 調査研究課題名

【2】 事業について

1) 社会における現状、課題、社会ニーズを踏まえた研究目標	1
2) 調査研究の実施内容	2
3) 調査研究のスケジュール	3
4) 調査研究の実施体制	4
5) 調査研究の成果（評価指標及びその結果）	6
6) 次年度以降の課題及び改善点	1 1

【3】 令和5年度各学校における調査研究の成果報告

1) 徳島中央高等学校 定時制課程（昼間部）	1 3
2) 徳島中央高等学校 定時制課程（夜間部）	5 8
3) 徳島中央高等学校 通信制課程	6 8
4) 徳島科学技術高等学校 定時制課程	7 7
5) 富岡東高等学校 定時制課程	8 3
6) 鳴門高等学校 定時制課程	9 6
7) 名西高等学校 定時制課程	1 0 2
8) 池田高等学校 定時制課程	1 0 7

【1】調査研究課題名

多様な学習ニーズに対応した学習プログラム・指導方法の確立

【2】事業について

1) 社会における現状、課題、社会ニーズを踏まえた研究目標

徳島中央高等学校を研究拠点校、定時制・通信制課程を有する他の全ての高等学校を研究協力校に指定し、多様な生徒に対応できる支援・相談体制を充実させ、その上で生徒の学習ニーズに応じた学力やソーシャルスキル向上の指導方法等を確立し、「目標を持ち自ら将来を切り拓いていく力を持った生徒の育成」を目的として取組を行ってきた。その結果、各学校での指導は、アンケートやルーブリック評価などによる成果の可視化等、評価方法がより充実し、学習ニーズに応じた指導方法が確立しつつある。しかし、年度当初による本県独自調査「生徒の意識等に関わる調査」によれば、全日制と定時制の回答の割合を比較すると、定時制通信制の割合が、「自分にはよいところがある」という問いでは、13ポイント程度低く、「将来の夢や目標を持っている」という問いでは、17ポイント程度低い。そのためにも、この事業を活かして、学習プログラム等を有効に活用する方法を検証し、「自分にはよいところがある」等の自己肯定・有用感を持たせ、「将来の夢や目標」を描くための「生きる力」を育成する必要がある、学校の実態に合わせて深化・充実を図るという課題を残している。また、企業からの要望として、自分の考えをしっかりと持ち、職業観・勤労観が身に付いた社会人の育成が求められており、このような社会人を育成する指導方法の確立に取り組み就職に繋げていくことが急務である。

GIGAスクール構想により1人1台端末が整備された環境を活かし、対面とオンラインをベストミックスした取組を実施し、ニューノーマル時代に対応できる指導方法として、ICTを活用しながらさらに磨きをかけた学習プログラムへと発展させ、各学校で研究を進めているところであるが、ICT活用能力の育成については、本県独自調査「生徒の意識等に関わる調査」において、全日制と定時制の回答の割合を比較すると、定時制通信制の割合が、「コンピュータなどのICTを活用して、資料を収集したりレポートを作成したりすることができているか」という問いでは、全日制的割合より24ポイント程度低く、大きく開きがある。将来、生徒が進学・就職先でコンピュータを活用しないということは考えにくく、ICT活用能力の育成は必要不可欠である。この事業を活かして、ICT活用能力を育成する学習プログラムを構築する必要がある。

2) 調査研究の実施内容

1. 就労・ソーシャルスキル向上・学力向上の学習プログラムの構築

各研究校の特性を生かし、生徒のニーズに応じた就労、ソーシャルスキル向上、学力向上の I C T（1 人 1 台端末等）を活用した学習プログラムを研究し、その学習プログラムを試行・検証する。

a 就労指導

- ・生徒自身の社会に対する見聞を広め、就労に対する意欲向上を図るため、地域や人とかかわる活動を行っている外部講師による講演を実施。（富岡東高校）
- ・就職希望者の受験企業先の選択肢を増やすため、定時制単独求人票を確保。新規や既卒生が就職している企業や事業場を訪問。（鳴門高校）
- ・地元起業家を講師としたキャリア教育を通して、能力・可能性を伸ばし、これからの時代に求められる社会人としての力を育成。（名西高校）
- ・社会人・職業人として求められる資質・能力、社会の動向や労働者の権利等の理解を深めるため、キャリアガイダンスやビジネスマナー講座等を実施。また、実際の仕事や職場の雰囲気に直接触れ、主体的な進路選択をするため、職場見学を実施。（池田高校）
- ・学校設定科目「職業」により、社会人・職業人としての基礎を身に付けるため、I C Tスキルの向上や実務実習等の就業体験、外部講師の全体学習などを実施。（徳島中央高校）

b ソーシャルスキル向上指導

- ・協働的な活動を多く取り入れ、対人関係を円滑に運ぶためのスキルの向上を図るため、講習会や音楽に関する活動、体力増進講座等を実施。（池田高校）
- ・とくしま中央一座の取組を通して、自他を知り、自尊感情の獲得から思いやる心の育成を実施。また、I C T機器を有効的に活用したデジタル人形劇を制作。（徳島中央高校）
- ・自尊感情や自己有用感を高め、ウェルビーイングを主軸に据えたソーシャルスキル向上を目的とし、外部講師の指導の下、絵本の読み聞かせや、1 人 1 台端末を活用したデジタル創作絵本の制作を実施。（徳島中央高校）

c 学力向上指導

- ・グループワークや I C Tを積極的に活用し、作品の制作過程で思考の深化を図るため、データの解析・スライドを制作し、コンテストへ出品。（名西高校）
- ・アクティブラーニングや I C T機器、シンキングツールを活用した授業に関する校内教職員研修や授業参観週間を実施。また、漢字能力向上講座、計算能力向上講座では生徒の状況に応じてレベルを段階的に設定して実施。（池田高校）
- ・基礎学力の向上や義務教育段階の再学習（学び直し）における学習支援のため、学校設定教科「マルチ基礎」や「総合的な探究の時間」、放課後における自主学習時間において生徒一人一人の実態に応じた学力向上支援を実施。（徳島中央高校）

d 特別な支援を必要とする生徒への指導

- ・昨年度実施した特別支援教育校内教職員研修での内容を授業にて実施。(徳島科学技術高校)
- ・特別な支援を必要とする生徒への支援・指導と、多様な生徒が授業に参加しやすい環境作りを行い、自尊感情・自己肯定感について正しく理解し自尊感情の育て方について校内職員研修等を実施。(池田高校)

e 多様な学習ニーズに対応できる体制の構築

- ・従来の一斉授業では見過ごされがちな個々の能力や学習ペースを認識し、すべての生徒が自分の可能性を最大限に引き出せるよう支援するため、A I 学習ツールの活用を実施。(池田高校)
- ・I C Tを活用した学習支援の充実とI C Tを活用した多様な情報提供を実施。(中央高校)

2. 支援・相談体制の充実

a 「多様性に応じた新時代の学び充実支援事業」推進協議会

- ・本事業の計画検討及び実施評価。

b 定時制・通信制連絡会

- ・県内の各定時制通信制課程の教頭会を活用して連絡会を開催。

c 支援相談員の活用

- ・就職や進学に向けての支援を実施。また、多様な生徒への個別最適な支援を行うため、教員のI C T活用能力を向上させる研修等を実施。(徳島中央高校)

3) 調査研究のスケジュール

月	実施内容
4月	連絡会開催
5月	連絡会開催、支援相談員の配置(～1月) 就労・ソーシャルスキル向上・学力向上の学習プログラムの研究・実証(各校～2月)
6月	連絡会開催
7月	研究大会等での発表、とくしま中央一座公演
8月	推進協議会の開催、とくしま中央一座公演
9月	連絡会開催
10月	とくしま中央一座公演
11月	とくしま中央一座公演
12月	連絡会開催、とくしま中央一座公演
2月	連絡会開催、推進協議会の開催、成果発表
3月	報告書の作成

4) 調査研究の実施体制

A 徳島県教育委員会学校教育課の指導体制		
担当者氏名	職名	具体的な役割分担
藤川 美和	室長	総括
武田 浩明	統括指導主事	総括補佐
川西 和男	班長	専門教育総括担当として指導・助言
村雲 洋二	指導主事	キャリア教育担当として指導・助言
片山 文男	指導主事	定通教育担当として指導・助言
黒田 亜紀	指導主事	特別支援教育担当として指導・助言
矢野 義文	指導主事	GIGAスクール担当として指導・助言
B 研究校の実施体制		
担当者氏名	高等学校名・職名	具体的な役割分担
都築 吉則	徳島中央高等学校 校長	調査研究全般の指揮 計画・実施・評価に責任を負う
安藝 憲志	徳島中央高等学校 副校長	総括事業責任者 定時制課程昼間部 総括
安原 誠	徳島中央高等学校 教頭	定時制課程夜間部 総括
森岡 加奈子	徳島中央高等学校 教頭	通信制課程 総括
浜田 亜弓	会計年度任用職員	拠点校・周辺校における就労支援活動を行う。
川村 明日香	会計年度任用職員	拠点校における I C T 支援活動を行う。
鎌田 敏文	徳島科学技術高等学校 校長	研究協力校 責任者
植木 勇	徳島科学技術高等学校 教頭	研究協力校 事業総括責任者
中崎 誠	富岡東高等学校 校長	研究協力校 責任者
白草 淳	富岡東高等学校 教頭	研究協力校 事業総括責任者
吉岡 直彦	鳴門高等学校 校長	研究協力校 責任者
樽見 拓	鳴門高等学校 教頭	研究協力校 事業総括責任者
向井 佳子	名西高等学校 校長	研究協力校 責任者

竹田 善博	名西高等学校 教頭	研究協力校 事業総括責任者
臼井 公仁	池田高等学校 校長	研究協力校 責任者
福田 安倫	池田高等学校 教頭	研究協力校 事業総括責任者
C 定時制・通信制課程教育推進協議会		
担当者氏名	所属研究機関・職名	具体的な役割分担
小坂 浩嗣	鳴門教育大学 大学院学校教育研究科 教授	キャリア教育の専門家として事業計画・ 評価に対して助言・援助する
大林 正史	鳴門教育大学 大学院学校教育研究科 准教授	キャリア教育の専門家として事業計画・ 評価に対して助言・援助する
金西 計英	徳島大学 高等教育研究センター 教授	I C T活用の専門家として事業計画・評 価に対して助言・援助する
小田 大輔	有限会社小田商店 代表取締役社長 (中小企業家同友会理事)	企業の代表として事業計画・評価に対し て助言・援助する
北野 美加	とくしま地域若者サポート ステーション 自立サポート事業部部長	支援・相談機関の代表として事業計画・ 評価に対して助言・援助する
赤壁 省吾	社会福祉法人みらい 放課後等デイグループ リーダー	就労移行支援事業所の代表として事業計 画・評価に対して助言・援助する
竹内 由起子	徳島県立みなと高等学園 教諭	特別支援学校巡回相談員として事業計画 ・評価に対して助言・援助する
D その他		
【外部支援機関】	公演実施先	
	ウェルネス名東 NPO法人にんじんの会 他	「とくしま中央一座」 公演実施
【外部支援機関】	相談先※	※支援が必要な生徒の実態に応じて
担当者	ハローワーク徳島	就職希望者に対する就職斡旋を行う

5) 調査研究の成果（評価指標及びその結果）

1. 就労・ソーシャルスキル向上・学力向上等の学習プログラムの構築

a 就労指導

- ・外部講師による講演（富岡東高校）では、生徒へのアンケート結果から、講義内容に興味を持ち、積極的に臨めた様子がわかった。社会の厳しさに着眼した内容が多々あったものの、自分が将来社会に出た際には仕事に対して前向きに取り組んで行きたいというマインドが形成でき、就労に対する意欲向上を図ることができた。
- ・進路先開拓（鳴門高校）については、単独求人数が昨年度より多く得られた。本年度県内求人票は、35社48求人（昨年度30社37求人、一昨年度25社32求人）だった。就職希望者の企業選択肢の増加に繋がった。
- ・体験的学びや協働的学び（名西高校）については、植え付けや収穫だけでなく、畑の維持や管理についても行い、毎日消費している野菜の栽培に苦労があることを体験的に学ぶことができた。また、食品ロス問題や世界的な食糧事情についての講演、子ども食堂への参加などを通じて食の大切さについて考えることができた。
- ・職場見学、ビジネスマナー指導（池田高校）については、事業所を訪問し、実際の仕事に触れることや、「面接に役立つ、好感度アップ・マナー講座」「社会人としてのマナー講座」として実演を交えてのマナー講習を通して、就労への動機付け、働く意義等について意識させることができた。肯定的評価も生徒・保護者共に良好である。
- ・社会人・職業人としての基礎を学ぶ学校設定教科「職業」（徳島中央高校夜間部）を履修している生徒は、80%が「社会に出たらここで得た知識は役に立つ」、「マナーや一般常識を学ぶよい機会である」と捉えており、うち13%の生徒が「学習内容を様々な生活面において応用している」と答えた。また履修生徒の90%が真面目に取り組んでおり、うち33%の生徒が自分の進路に関連付けて積極的に取り組んでいる結果が得られ、年々生徒の意識が高まっている。また、「職業基礎A」を選択した生徒のうち、27%の生徒が新たにアルバイトなどの仕事を始めるようになった。企業見学や職業体験・マッチングへの参加は、全体の27%であった。

b ソーシャルスキル向上指導

- ・講習会や音楽活動、体力増進講座（池田高校）においては、電子黒板を用いてのイラスト説明や1人1台端末の活用を行うことで、生徒は集中して聴くことができ、実践的に学習することで内容を把握した。また、ロールプレイングを通して、他者との関わり方や適切な気持ちの伝え方等、グループやペアワークにより、協働的・主体的に学習を進めることができた。アンケート結果でも肯定的評価は高い。
- ・「とくしま中央一座」における人形劇（徳島中央高校昼間部）においては、自尊感情測定尺度によるアンケート結果として、事前測定時（6/9）に比べて、事後測定時（12/1）には「A自己評価・自己受容」（0.38ポイント増）、「B（他者との）関係の中での自己」（0.46ポイント増）、「C自己主張・自己決定」（0.65ポイント増）のすべ

ての観点で測定値が上昇。活動の意義と目的を学習者にメタ認知させ、人形劇の制作期から上演期に至る過程における充実感、仕上げた人形劇を公演する場面での観る側との共鳴や面白み、仲間と感動を分かち合い達成感を共有できた醍醐味を感じてきたからと考える。ある生徒は6月のアンケートでは、ほとんどの項目で「1」と「2」を選択。「とにかく今の生活や自分さえもが嫌で、高校も退学をして働きたい」と考える、自己肯定感が低い生徒が存在したが、この人形劇の取組を通して、他のメンバーと一体感を覚え、楽しい充実した時間を過ごし、自信を持って外部公演に臨み、会場の子どもたちや家族連れから歓声や拍手など、他者からの評価を受けることで、12月のアンケートでは、飛躍的にポジティブな回答を選択。人形劇という表現活動、仲間との一体感、公演での賞賛と充実感が、当該生徒の自己肯定感を劇的に高める契機となった。「絵本の読み聞かせ授業」については、自尊感情測定尺度によるアンケートから、「A自己評価・自己受容」(0.07 ポイント増)、「B 関係の中での自己」(0.08 ポイント増)とやや上昇傾向を示し、「C自己主張・自己決定」(0.13 ポイント増)では大幅に上昇し、全体的なバランスも取れている結果となった。「絵本の読み聞かせ授業」による絵本の世界探究の授業が自尊感情を高め、自己肯定感を上昇させる効果があったと考察する。「創作絵本活動」については、自尊感情測定尺度によるアンケートから、「A自己評価・自己受容」(0.27 ポイント増)、「B 関係の中での自己」(0.40 ポイント増)、「C自己主張・自己決定」(0.50 ポイント増)のすべての観点で測定値が上昇。プロのイラストレーターに描画の技術を手解きしてもらったことが、学習者たちの創作絵本作りにチャレンジする大きな力となり得た。絵を描くことに苦手意識を持っていた学習者も取り掛かるのに時間を要したが、クオリティの高い作品を仕上げた。学習者がポジティブに取り組むことで、内面に学びの意欲の発達的变化が起こり、自尊感情が上昇した。また、高揚感を持って、次の段階として、「子どもたちや読者を喜ばせたい」という貢献心や自己効力感が生まれ、自己肯定感が上昇したことが、一人一人のワークシートから読み取ることができた。

・絵本の読み聞かせと創作絵本の作成と発表の取組（徳島中央高校夜間部）においては、ループリック（5段階評価）を用いて生徒の変容（事前→事後）を確認した。評価項目は「読書について」(3.6 → 4.8)、「興味・関心について」(2.7 → 3.8)、「コミュニケーション能力について」(3.7 → 4.4)、「授業への参加・積極性」(3.2 → 4.2)の4項目で、どの項目も上昇した。どの生徒も絵本作成に積極的に取り組み、作業中は教室内の至る所で他の生徒や教員とのコミュニケーションが生まれていたことは特筆に値する点だった。生徒の感想の中にあった「あまり話したことがない他の子の心の中が少し分かった気がした」という言葉は、本取組のねらいが達成されていると考察する。「絵本の読み聞かせ」と「創作絵本の作成と発表」は、生徒のソーシャルスキル向上に大きく寄与している。取組の対象となる夜間部一年生の生徒は、年毎にまったく別の個性を持った集団だが、どの年度の生徒も取組の前後で授業への積極性や、他の生徒とのコミュニケーションに対する意欲が高まっている。

また、進級した生徒から「今年も絵本の授業をやりたい」という声を聞くことも多く、訪問した卒業生からも「絵本の授業は印象に残っている」という声を聞くことが度々あった。

c 学力向上指導

・外部講師による講演のグループワークなどを活用し、学ぶ楽しさを実感し、学習意欲の向上を図る取組（名西高校）では、自分の意見を発言することや他者とのコミュニケーションを苦手とする生徒が多く、発表やグループ協議などでは意見が出ないことも多かった。様々な機会においてなるべく生徒に発言を促し、発言内容に関しては肯定する雰囲気を作るなど、授業や調べ学習で取組を行った。2学期末の生徒アンケートにおける項目で「ICTを活用し自ら学ぶ面白さを感じる」で100%、「ICTを活用し社会で役立つ能力が身につく」が90%と、前向きに取り組む姿勢が見られた。各種コンテストへの挑戦においては、昨年度のビッグデータコンテストでの上級生の入賞が、自分たちでも頑張ればできるという生徒のやる気に繋がり、成果を上げた

優秀賞：令和5年度高校生ビッグデータ活用コンテスト

作品名：「石井町にイノベーションを」～石井町の明るい未来を目指して～

優秀賞：第3回中学生・高校生データサイエンスコンテスト

作品名：「プロジェクトX ～X駅前店のスーパー分析～」

・校内教職員研修や授業参観週間、各学力向上講座の取組（池田高校）では、他の教員の授業の見学やシンキングツールに関する研修により、授業の組み立ての幅が広がった。ICT活用授業には生徒の多くが好意的で、授業に取り組む姿勢も向上した。学力向上講座では、漢字・計算テストを年4回実施した。読書に関するアンケート結果では今年度読んだ本の冊数（10冊以上：6%、5-9冊：6%、2-4冊：34%、1冊以下：54%）で昨年度より低下したが、貸出冊数は上回った。

・学校設定教科「マルチ基礎」及び「総合的な探究の時間」で学習支援を行う取組（徳島中央高校夜間部）では、教科担任に加えて比較的年齢の近い大学院生が一緒に参加し、ほどよい距離間でコミュニケーションを取りながら授業を進めることができた。1対1に近い形で指導するため、生徒は自ら質問しやすい雰囲気の中、学習内容でわからないことを自分の言葉で教員や他の指導員に伝えつつ、基礎学力を向上させた。このことは、自分が持つ問題を、人に理解してもらうために自分の言葉で説明するという、社会人として必要な力を養う機会となった。また、個々の生徒が自分のペースで教材を進めることにより、それぞれのニーズに合わせた学び直しを円滑に効果的に実践することができた。さらに、国語や数学との授業連携により、生徒の学習意欲の向上および基礎学力の向上が実感できた。本年度の授業評価アンケートで「マルチ基礎」では「授業の内容に満足しているか」という設問は肯定的評価が100%であり、「積極的な態度で授業に参加できたか」という設問は肯定的評価が83%であった。また、100%の生徒が「授業が理解できた」と回答しており、これらのことから、真面目に授業に取り組む中で、確実に自分の基礎

学力が向上した成果を自分で感じられている様子うかがえた。年度当初は静かに個別に取り組んでいた生徒たちが、授業が進むにつれて大きな声で自分の考えを説明したり、何度も繰り返し尋ねる様子が見られたりするなど、自分の弱点も安心して出しつつ、学びを進めようという生徒の前向きな姿勢が感じられた。「総合的な探究の時間」では「授業内容に満足している」という設問に肯定的評価が100%であった。様々な分野の探究をする中で、他の生徒と話し合いをして考えを深めたり、協働して作業を進めたりすることによって、より深く物事を理解する様子が見られた。他の教科では達成することのできない学びが実践されていることがうかがえた。

d 特別な支援を必要とする生徒への指導

- ・ICTを活用して「視覚化」「パターン化」を示す授業の取組（徳島科学技術高校）においては、学習の進め方をパターン化し、毎時間同じルーティーンで授業を展開することにより、生徒が抵抗感なく取り組めるようにした。また、板書すべき内容だけでなく、教科書の本文やグラフ・写真・注意点などもスライドにまとめて表示した。アンケートの結果、「視覚化」「パターン化」により、授業の見通しが持てていると答えた生徒が96%以上、授業に取り組みやすいと答えた生徒は100%、教員がICTを使うことによって、授業がわかりやすいと答えた生徒は96%以上であった。この結果から、「視覚化」と「パターン化」は、授業の見通しを持つことに効果的な方法であり、授業の見通しを持つことは、生徒の学習意欲や理解度を高めることに繋がると考えられる。そして、教員がICTを使うことは、授業のわかりやすさや興味深さを向上させることに貢献していると考えられる。教科国語においては、「視覚化」「パターン化」、ICT活用により、生徒の授業への取組の質が向上し、わかりやすさが向上したと考えられる。

- ・校内職員研修、学習環境づくりの取組（池田高校）においては、生徒全員のカウンセリングを実施。心の不調に対する理解が深まり、生徒理解や教職員間での情報共有に繋がった。また、スクールカウンセラーや養護助教諭と連携した適宜情報交換や校内教職員研修会等の機会を設けることにより、生徒のトラブルや心の変化等への早期対応ができた。授業環境づくりに関しては、タブレット端末の活用は学校生活において有効であり、電子黒板やホワイトボードの活用との併用で生徒への指示が明確になり、より主体的な生徒の活動に繋がった。さらに、教育相談や授業に関するアンケートの結果ではすべての質問で肯定的な評価が8割を超えており、生徒と教職員との関係の良好さを実感できた。

e 多様な学習ニーズに対応できる体制の構築

- ・AI学習ツール活用の取組（池田高校）については、AI活用により学習プロセスを自動化し、即時フィードバックすることにより、仕事と学校の両立で自由時間が少ない本校の生徒にとって、学習時間の効率化に一定の示唆を与えた。また、AI活用により生徒の学習進捗と理解度を可視化することにより、教員の適切なサポートや教科授業へのフィードバックに繋がった。さらに、AI活用により生徒の

学習のつまづき箇所を可視化することで、教員が生徒の弱点分野をピンポイントで学び直しさせることができた。

・ I C Tを活用した学習支援の充実での取組（徳島中央高校通信制課程）においては、生徒1人1台端末を活用し自学自習に活用する生徒や、ポートフォリオを記入する生徒も出てきた。また、I C T通信等で呼びかけを行うことで、個別相談やI C T活用について質問に来る生徒も増加した。また、学校生活に慣れ、学習が進むにつれ、自己肯定感の向上が見られた。I C T活用についても「I C T機器を活用することができる」との回答が64%、「I C T機器の活用は学習の役に立つか」との問いに対しては、肯定的な意見が84%を超えており、生徒もI C T活用の効果を実感できていると思われる。

・ I C Tを活用した多様な情報提供への取組においては、MetaMojiClassRoom やデジタルサイネージ等、従来の情報発信に加えてI C Tを活用した複数の情報発信を行った。デジタルサイネージに関する教員アンケートから効果が実感されていた。郵送された文字情報だけでは興味関心や理解度が低かったが、画像や図、動きのある情報に対しては、生徒が積極的に受け取っていた。

2. 支援・相談体制の充実

a 定時制・通信制課程教育推進協議会

委員からは、「今後I C T活用には生成A Iが充実してくること」「多様な生徒のモチベーションを上げるためには、取組が就職に直結する、社会へ出て行くために直結するなど、目的を明確にすることで学びへの意識が高まること」、「対話すること、気付いたことを自分の言葉で相手に伝えることそして文字化すること、体験活動の一つにフィードバックの機会を取り入れること」など多面的な指導や助言をいただき、課題解決のヒントや今後の指針となった。

b 定時制・通信制連絡会

教頭による連絡会と委員による推進協議会で役割を分担し、情報共有と事例検討、事業執行に係る指導評価を行った。連絡会は教頭会を活用することで6回開催し、緊密な情報交換を図ることができた。

c 支援相談員の活用

ジョブジョブカフェの運営や夏休み中の就労支援講座の実施等を通して、早い段階（低年次）から就労や進路に対する意識を高めることに繋げることができた。また、教職員との連携がよりスムーズにとれるようになった。個別に対応が必要なケースについては、専門機関と連携することで重層的なサポートに繋げることができ、支援体制が充実した。

I C T支援相談員の活用による教員のI C T活用能力の向上については、教員の研修評価についても満足度が高い。事前に教員対象のアンケートを実施し、I C T活用に関する悩みや困りごとを把握したり、I C T支援相談員と事前打ち合わせをしたりし、I C T活用において充実させることができた。デジタルサイネージは、各種お知らせや文部科学省からのリーフレットに説明を加えたもの、アンケートの

お知らせ等、よりわかりやすく編集して情報発信されるようになった。

その他、各校の成果等については、13ページからの「【3】令和5年度各学校における調査研究の成果報告」に記載している。

6) 次年度以降の課題及び改善点

自己肯定・有用感の醸成については、本県独自調査「生徒の意識等に関わる調査」において、令和5年度本事業終了時点でのアンケート調査（定時制通信制対象）によると、肯定的評価について事前アンケート回答の割合（％）を比較すると、(1)「自分にはよいところがある」という問いでは72％→79％、(2)「将来の夢や目標を持っている」という問いでは61％→68％に上昇した。全日制の(1)85％、(2)78％とはまだまだ差があるものの、本事業の取組により生徒全体の自己肯定・有用感の醸成に一定の成果が得られた。ICT活用能力の育成についても、(3)「コンピュータなどのICTを活用して資料を収集したりレポートを作成したりすることができているか」という問いでは56％→72％に上昇し、全日制の(3)80％に近づく結果となった。しかし、全日制生徒との差には開きがあるため、全日制と定時制通信制の回答の割合が同程度となることを実現し、自分のよさや可能性を認識し、様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していく生徒の育成に繋げたい。

1. 就労・ソーシャルスキル向上・学力向上の学習プログラムの構築

a 就労指導

定時制通信制課程の生徒は、就労（アルバイト）している生徒もいる一方、就労意欲が低い生徒もいる。生徒の能力・適性に応じた就労指導のあり方について、地域や学校との実態、生徒の能力・適性も多様化する中、本事業での各校の取組を参考にしながら、委員からの助言にもあった「就職に直結する、社会へ出て行くために直結する」など目的を明確にすることを共通理解とし、各学校の実態に合わせて入学後の早い段階で進路ガイダンスや就職体験・職場見学等を積極的に実施し、早期に進路意識を芽生えさせ、自分自身で進路選択しようとする意欲や態度、継続して就労できる忍耐力を育成する取組を継続させる。

b ソーシャルスキル向上指導

体験活動での取組に、「対話すること」の機会を増やすことが必要であり、自分の言葉で相手に伝えたり文字化したりすることを通して活動等をフィードバックすることで、自己肯定感や意思決定能力のさらなる育成を目指す。

c 学力向上指導

学習意欲を向上させるためには、生徒自身のモチベーションを上げることが必要である。学習取組が就職や進学に直結するなど、資格試験や各種コンテスト等も活用しながら、目的を明確にすることへの工夫が必要である。1人1台端末の利用については、生徒・教員とも有効に活用することができるようになってきている状況であり、ICTを効果的に使うことで学力が向上することが実感できる

よう授業内容の精選を行っていく。

d 特別な支援を必要とする生徒への指導

特別支援についての知識や役割をしっかりと身に付けるためにも、教職員研修を実施する体制作りが必要である。支援相談員や関係機関と連携しながら個々に応じた支援を継続的に行う。そのためにも引き続き研修や実演指導によって、職員の資質・能力の向上が必要である。

e 多様な学習ニーズに対応できる体制の構築

1人1台端末等を利用した学習支援の充実については、「自学自習」や「学び直し」等、多様な学習ニーズに対応したICT教材について検証し、AI教材や効率的なデジタルコンテンツ作成やICT教材の活用方法を模索する。また、生徒の学習に適したものを精選し、生徒及び教員が使い易くかつ過度の負担にならないように整理する。

2. 支援・相談体制の充実

多様な生徒の支援相談の継続においては、県の事業として支援相談員を配置し、支援体制の継続を行っていく。支援相談員が生徒と関わる機会を増やすためにも、オンライン等も活用できる工夫が必要であり、支援相談員と教職員間での連携を密にし、生徒支援へと繋げたい。

【3】令和5年度各学校における調査研究の成果報告

1) 徳島県立徳島中央高等学校定時制課程（昼間部）

I 取組の内容

①就労指導

○2年次「就労支援講座」

1 目的・ねらい

本校のキャリア教育及び就労指導は「総合的な探究の時間」を核として生徒一人一人に自らの生き方を考えさせるとともに、進路希望に応じた履修科目の選択や習熟度に応じたきめ細やかな学習指導を行うことにより、基礎学力を身に付けることは基より、主体的能動的に進路を選択・実現できることを目標に、次のような取組を実施している。

- ① ホームルーム活動を通じて、自分を見つめ自分と仲間との関係に気づかせ、自らの果たすべき役割を自覚させること。
- ② 基礎学力を高めるとともに文学や芸術に接する機会をできるだけ多くし、感性を豊かにさせること。
- ③ 各種資格取得やものづくり、人形劇などの活動を通しての成功体験を積み、自己肯定感を高めることのできる様々な活動を推進すること。
- ④ 友人関係や教員との関係を調整し、進んでコミュニケーションをとる機会を設けさせること。
- ⑤ 職業に対する理解を深めるための職場見学や就業体験の機会を増やし、自分から進んで進路選択ができるように、職業観を高める経験を積ませること。
- ⑥ 発達障がい等により支援の必要な生徒に対しては、通級による指導を行い、個別の支援計画を作成して共通理解を図り、支援体制を構築すること。
- ⑦ 管理職・進路指導課・特別支援課・相談員・スクールカウンセラー・外部関係機関とも連携し、個に応じた複線型の指導体制を確立すること。
- ⑧ 進路実現を図る進路指導及び一人一人の生徒が人生の目的を把握し、社会に貢献できる就労指導を推進すること。

本校の定時制課程昼間部では、毎年 60 名ほどの卒業生を社会へ送り出している。そのうち、6 割の生徒が 4 年制大学・短期大学・専門学校等へ進学し、3 割が県内の優良企業を中心とした就職を果たし、約 1 割弱がフリーターとなっている。昨年度の取組で本校の就職状況はやや改善されたものの、例年、この進学も就職もしないままフリーターとして卒業してしまっている約 10 %前後の卒業生を何とかしたいと考え、まもなく就職活動に入る 2 年次生を対象に、昨年度に続き、本年度も本講座を実施することとした。

2 内容（本年度の取組：講演内容）

〔2年次生を対象とした Zoom 配信によるオンライン就労支援出前講座〕

講師 株式会社キッズコーポレーション四国支店

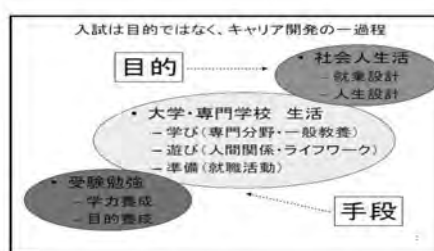
高松支社支社長 鈴木 毅 氏

- ・入試は目的ではなく、キャリア開発の一過程
- ・進学や就職の面接で必ず聞かれること
- ・進路実現に向けて今からできる大切なこと（講師の体験談も交えて）

講演のスライド内容



1



2



3

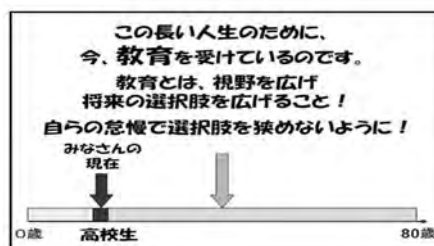
もし日本の高校生が100人の村だったなら

四年生大学に進学する人	50人
そのうちの5人は途中で退学・・・	
短期大学に進学する人	6人
2年に一度1人は退学	
専門学校に進学する人	22人
4人は退学	
就職する人	21人
4人は1年未満で離職	

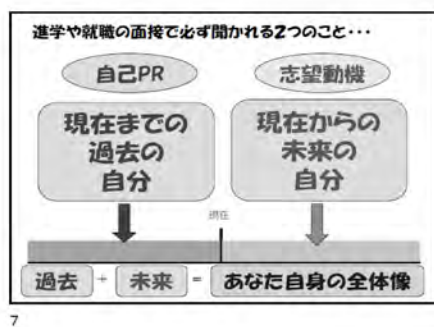
4



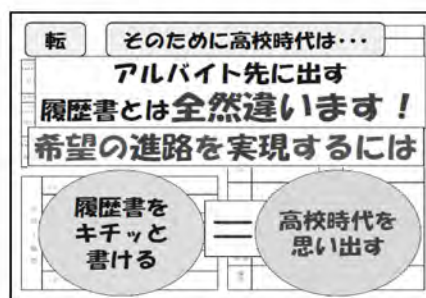
5



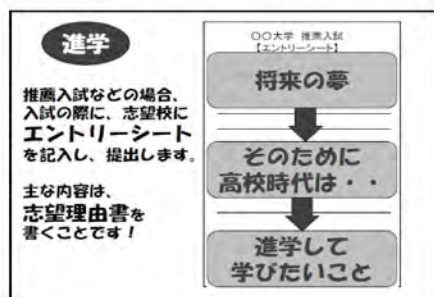
6



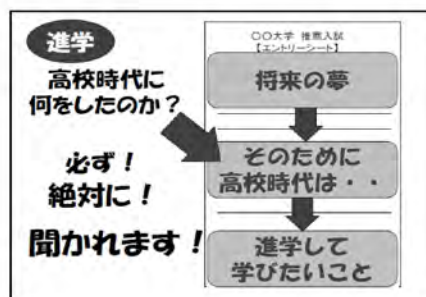
7



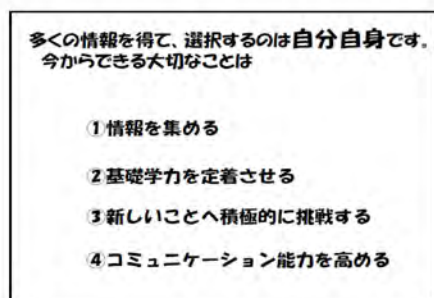
8



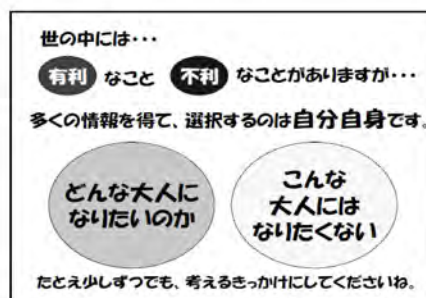
9



10



11



12

2

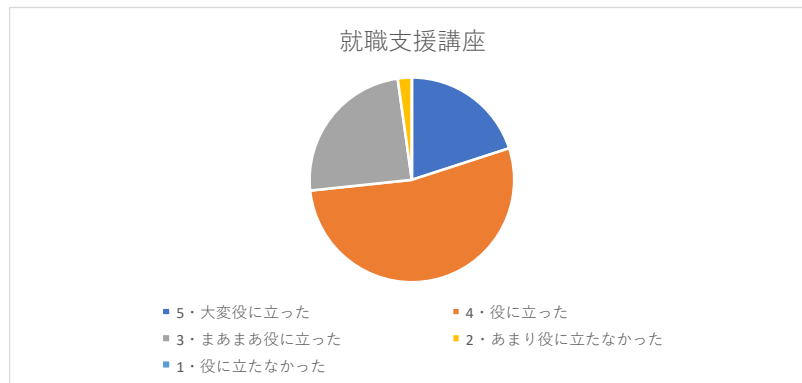
3 成果と課題(アンケート結果より)

《2年次「就職支援講座」アンケート結果 [R5.12.6実施]》

Q1 「講演内容」の5段階評価 (有効回答：45)

4・大変役に立った	3・役に立った
2・まあまあ役に立った	1・あまり役に立たなかった

5	4	3	2	1
9	24	11	1	0



Q2 受講した生徒の感想文（抜粋）

▽大人に近づくにつれ自ら学ぶことがとても大切だと知った。▽就職にはいろんな就職があると思った。▽今から少しずつ自分の進路について考えていこうと思いました。▽すこしだけ夢がはっきりした気がした。▽これからの自分に大切なことを知れてよかった。▽まだ将来の夢がないので視野が広がった。▽卒業するときに役立たいです。分かりやすく教えていただいたので理解しやすかったです。▽就職する上で大事なこと（学歴）などが分かった。▽進路を実現させるためには早めに準備することが大切だと思いました。▽資格をできるだけとろうと思った。

▽今からできることを見つけながら過ごしていこうと思った。改めて頑張ろうと思えました。▽難しいことばかりで（わからないこと）困惑した。▽就職や進学の試験面接で聞かれることについて知れて良かったです。▽高校生活の活動は進学や就職で重要だと思った。▽進路を実現するためには今からいろいろがんばらないといけないと思いました。▽かなり詳しく役に立つ情報を聞くことが出来て良かったです。▽今からでも進路実現に向けて頑張る。▽講師の方が色々なことに挑戦していて凄かったです。▽色々な経験をつむためにも思い切って挑戦することが大事だと思いました。▽夢をはっきりさせたいです。▽今まで考えたことない視点のことが聞けて視野が広がった。

4 次年度に向けた展望

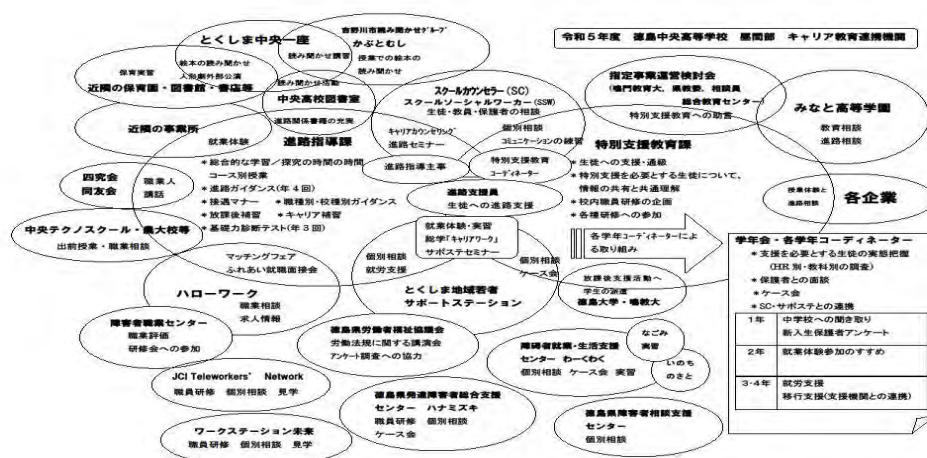
今年度も昨年度と同様、Zoom によるオンライン講座で実施した。例年の傾向として、本校に入学する生徒は小中学校において成功体験が乏しく、褒められた経験も少ないために自己肯定感に欠けており、上記の講座感想文から読み取れるように進路意識も希薄であることが多い。また、生活保護受給世帯も少なくない。そのため家庭からの経済的・文化的・心理的支援が充分ではなく、成長過程でも親の愛情をあまり受けずに子ども時代を過ごしてきた者も少なからず存在する。一方、近年、本校生徒では、就職希望を持つ生徒のほとんどが県内就職を希望しており、それに対して、本校に求人依頼のある県内企業は、毎年 30 数件しかないという厳しい現状にある。また、そのわずかな求人ですら就職内定をいただいたり、高校生のマッチングフェア等を利用して正社員で雇用され就職して行く生徒は、就職希望者の中でも少数に止まっている。

したがって本校におけるキャリア教育の使命は、本校に入学するまでの過程で保

証されてこなかった成長を取り戻す営みであり、学び直しや自己肯定感を高め、自尊感情を育成する活動を通じて、自信を持って自らの進路を選択・実現する総合的な取組とならなければならないと考える。

そこで今後も、これまで綿密な連携をしてきたハローワークやとくしま地域若者サポートステーション等(下図：キャリア教育連携機関)とさらなる連携を通じ、地域や学校の実態、生徒の能力・適性に応じた就労指導の在り方について調査研究を行い、効果的な求人開拓の方策及び就職希望を持つ生徒の豊かな職業生活を保障する取り組みが不可欠であると考えます。

令和5年度 徳島中央高等学校昼間部 キャリア教育連携機関



以上のことから、次年度も、さらに ICT 機器をツールとして有効活用しながら、本校のキャリア教育を推進したいと考える。

加えて、只今、本事業で取り組んでいる「絵本の世界探究授業」「人形劇」「創作絵本」の各事業のこれ等の取組は、相互に関連しており相乗的に効果を上げることができるものとして、一人一人の生徒にはそれぞれの異なった取組であったとしても、学校全体としてはキャリア教育の大きなうねりを作り出すことのできる取組になっていると考える。

このような観点から、次年度以降も本年度取り組んだ調査研究を継続し、各取組における横の連携を図りながら、混沌の続く不透明な時代であるからこそ、生徒たちに光を照らすキャリア教育のより一層の深化充実を期したい。

②ソーシャルスキル向上指導

○「総合的な探究の時間」における人形劇団「とくしま中央一座」の取組 ～地域とのつながりを結び直す営み～

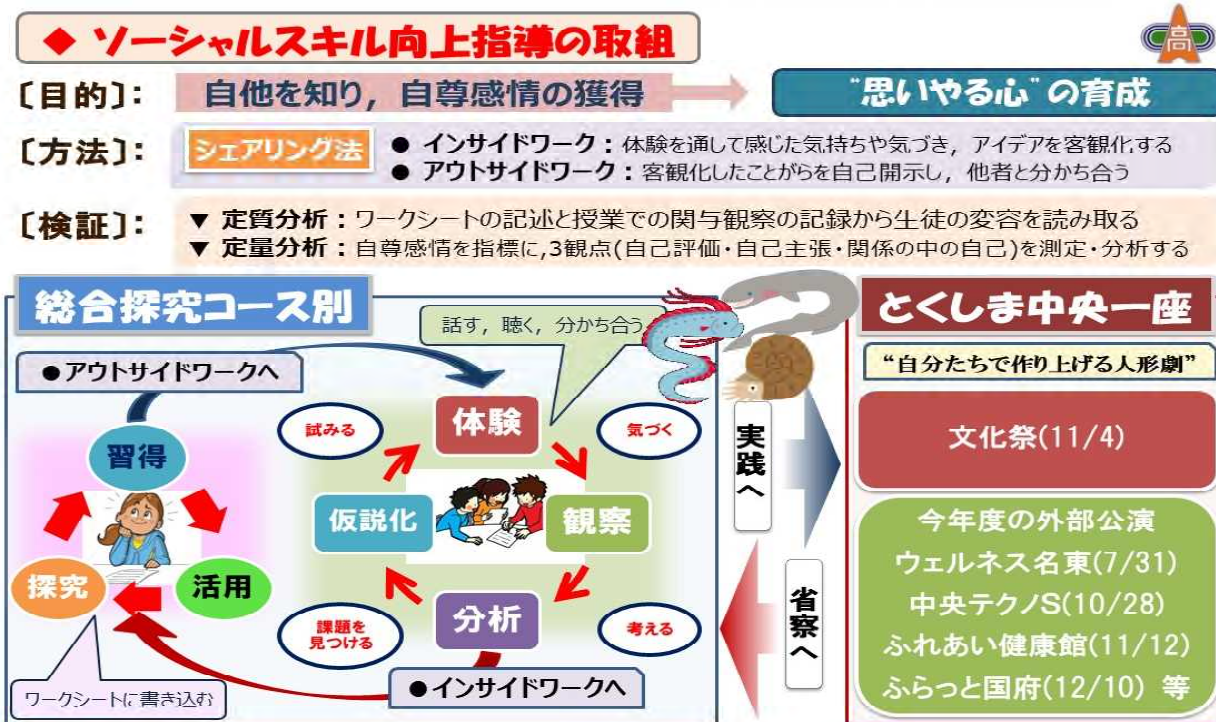
1 はじめに

人形劇団とくしま中央一座は、今年で14年目の活動を迎える。コロナ禍の数年間にはまならなかった外部公演を、本年度はその規制が解除されたことから本格的に再開させることとなった。また、本年度は上記副題にも掲げた通り、コロナ禍以前に交流のあった地域の関係機関との「つながりを結び直す」というコンセプトを中心に、リアル人形劇を稼働させた。また、県内外の遠隔地の教育関係機関との連携のための ICT 機器を使用したデジタル人形劇の制作にもあたった。活動の重点目標は、下記の通りである。

- (1) 人形劇による生産的表現活動による「個別最適な学び」と「協働的な学び」とを一体的に充実させる効果的なカリキュラムと指導体制を構築する。
- (2) コロナ感染収束後、外部公演先を確保するための外部機関との連携を再構築する。
- (3) ウェルビーイング及び NVC(=非暴力コミュニケーション)を視座とした生徒のより一層の主体的な活動の活性化を図るため、シェアリング法によるグループワークを展開する。

2 内容（目的及びねらい等）

令和5年度「総合的な探究コース別：とくしま中央一座」〔徳島県立徳島中央高等学校定時制昼間部〕



※ 年間15回の授業を実施し、他に課外活動として放課後に活動を展開している。

3 取組

本年度はコロナ禍が明けたとの認識で、年度初めから外部公演の依頼が殺到した。コロナ禍前の教育関係機関との結びつきを取り戻す労苦は、さほど無かったといっただけよい。従来から公演に出向いていたウェルネス名東（ジュニアクラブ）、中央テクノスクール、NPO 法人にんじんの会（重度障がい者を支える親の会）、阿波市吉野笠井図書館、等々から早々に上演依頼が入ったのである。公演する日時は、依頼者から要望のあった指定日時で受けることにした。殆んど施設がさまざまなイベントの催しの一環として本劇団の公演を依頼してきたからである。依頼先のうち NPO 法人にんじんの会の「クリスマス会」は、とくしま中央一座設立以来から10数年間のつながりがあり、両者がその交流の火を灯し続けたいとの熱い思いで開催されている。

また、新たな上演先として三公記念館、小松島市立図書館からの依頼があった。公共施設では、年間を通じてさまざまなイベントを行っているが、「絵本の読み聞かせ」やDVDの上映では満足できない子どもがおり、人形劇へのニーズが高いのだという。

学習者のうち、活動が2年目となる生徒を中心にキャスティングを考え、今年の深海魚ブームに肖ってラブカやリュウグウノツカイなどの深海魚が織りなすウェルビーイングをテーマにしたアニマルファンタジーのオリジナル脚本を作成した。8月の「いいだ人形劇フェスタ」（全国大会）に間に合わせるため、5月初旬から練習に取り掛かった。本年度から参加した学習者の一人は、学校不適應に陥っている傾向がみられたが、新しい学びへの意欲と自信を取り戻したいとの一念で本コースを選択した。

本年度も本指定事業の推進委員である鳴門教育大学教職大学院 小坂浩嗣教授のご指導を得て、グループワークを実施するにあたり、インサイドワーク＝（自分自身への振り返り）、アウトサイドワーク＝（他者から評価を受けての振り返り）という手法を用いてのシェアリングを行う中で、本年度の重点目標であるウェルビーイング（協調的幸福感）を主軸に据え、仲間と心をつなげて、創作の世界に浸り、それぞれ抱いた思いを語り合うという作業を繰り返し、ソーシャルスキルを磨きながら人形劇としてリアルに表現することを試みた。数年前から小坂氏との共同研究により、人形劇と読み聞かせによるソーシャルスキルの向上をねらいとした活動プログラムの高度化を図り、主体的対話的深い学びへとつなげている。その効果を、人形劇における取組前後の自尊感情を測定し、活動後の生徒自身の振り返りとともに検証を行った。

4 成果

学習者4名に自尊感情尺度を測定した結果を下記に示した。図1の測定時（2023/06/09）に比べて図2の測定時（2023/12/01）には「A自己評価・自己受容」（0.38ポイント増）、「B（他者との）関係の中での自己」（0.46ポイント増）、「C自己主張・自己決定」（0.65ポイント増）のすべての観点で測定値が上昇した。この結果が得られた要因は、活動の意義と目的を学習者にメタ認知させ、人形劇の制作期から上演期に至る過程における充実感、仕上げた人形劇を公演する場面での観る側との共鳴や面白味、仲間と感動を分かち合い達成感を共有できた醍醐味を感得できたからに他ならないと考える。更には、本取組が持続可能な社会の創り手として活躍できる人材育成を活動視野の中に入れて取り組んできたこと、文部科学省が「ESD推進の手引き」で示し

た「育成すべき資質・能力の三つの柱」の学習の方向性に基づいて「主体的・対話的で深い学び」の視点を意識し、ウェルビーイング及びNVC（Non-violent Communication＝非暴力コミュニケーション）を取組の主軸としながら、人形劇の活動に活かしてきた成果の一端と考える。

定量分析 <アンケート結果>

自尊感情尺度測定（2023/06/09 集団測定値）

自尊感情尺度測定（2023/12/01 集団測定値）

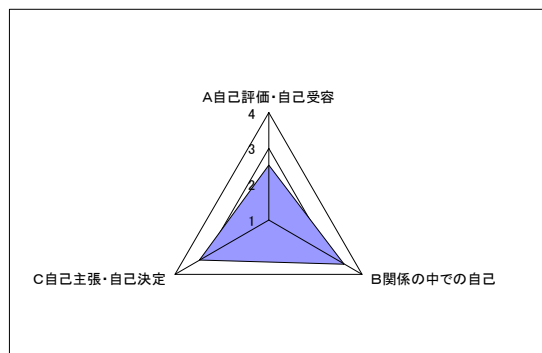


図1

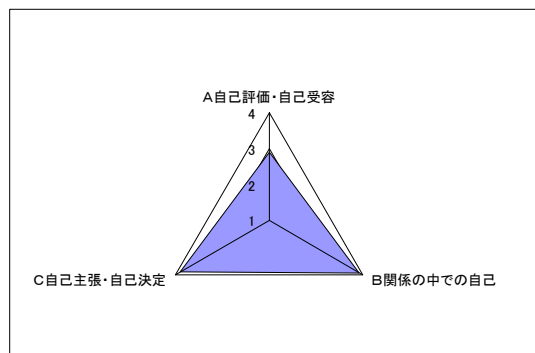


図2

因子項目	6/09	12/01
A 自己評価・自己受容	2.53	2.91
B 関係の中での自己	3.43	3.89
C 自己主張・自己決定	3.21	3.86

図3

もう一点は、顧問が従来から学習者に常々意識付けを行ってきたことは、現代社会の諸課題に対して、メンバー一人一人が自らの解決をミッションとして向き合うスタンスで活動することである。その継続的指導が自己肯定感の3観点において、総じて上昇した形で実を結んだものとする。メンバーの協働性を要する「学びあうこと」と「分かちあうこと」を目指したシェアリングの積み重ねが効果因であったと考える。メンバー個々の成長は、日常的なメンバーたちの言動や練習風景からも、確かな内発的変容として見取ることができた。

さらに本年度当初、顧問が本劇団の活動指針としてメンバーたちに改めて共通理解を図ったことが2点ある。1点目が、人形劇作品のテーマとして中軸に据えたウェルビーイングの概念で、深い学びに至るための精緻化とメタ認知への方略を実践するための意識付けを行ったことである。その具体内容は、①グループワークを進めて行く中で、シェアリングによって自分の意見や他者の考えをポジティブに理解し、比較・類推・統合という対話的思考を確立して行く過程を大切にすること、②その根幹となる自他を尊重し認め合うということを第一に活動を進めること、③自分と異なる意見が出てきたとしても、対立・矛盾を克服し払拭する粘り強さをメンバー一人一人が論理的思考を巡らせながら保ち続けること、である。

2点目が、それら学び方の知識をしっかりと持ちつつ、自らモニターし、コントロールするメタ認知を鍛えることをである。劇中の最終場面で主人公たちは古代から訪

れたキャラクターと共に現世で楽しく暮らすことを望み、古代生物たちも運命としてその事態を受け入れ、その生活の居場所となった深海で心豊かに生きて行くことを決意する。その物語を演じつつ、メンバーたちも気付いてくれたようである。人形劇という活動に明確な目的があり、自分たちが求め、協働し、分かち合えた世界が心地の良い居場所となって、その営みを自分にとっての本質的な価値があると実感され、その領域を広げて行くことが、延いては、より良い社会を構築して行く足掛かりになるということ、日頃のメンバーの所作や発言、立ち居振る舞い、演技をしている場面々々での表現の機微によって、それらを会得してくれたと感じた。

一人の生徒の事例を紹介する。6月期に採取したアンケートの中に、殆どどの項目で「1」と「2」を選択していた新入部員がいた。顧問がこの件で本人に聞き取りをしたところ、「とにかく今の生活や自分さえもが嫌で、高校も退学をして働きたい」と考えるくらい思い詰めていることを話してくれた。その生徒が他のメンバーと人形劇に取り組むことで一体感を覚え、えも言われぬ楽しい充実した時間を過ごし、自信を持って外部公演に臨んだ。その公演ではフロアの子どもたちや家族連れから歓声や拍手を向けられた。12月期採取のアンケートでは、飛躍的にポジティブな回答を選択していた。人形劇という表現活動、仲間との一体感、公演での賞賛と充実感が、当該生徒の自己肯定感を劇的に高める契機となったことは間違いないと言える。同生徒は、交友関係に悩み、学習に身が入らず、一学期間の成績が落ち込み、全てのことが嫌になるという鬱々とした生活を送っていた。したがって、人形劇の活動に本格的に入るまでは、自らの存在をネガティブに捉えていた。けれども、人形劇の劇中のキャラクターの生き方に自らの未来を重ね、希望ある将来をシミュレーションし、活動を通して日々の暮らしをポジティブに捉えられるようになった。この成長過程は、自己の理想像をキャラクターに投影することでコンプレックスを昇華させるという心理機制が作用したと考えられる。その結果、「自分は将来自動車整備士になって人の役に立ちたい」との明確な進路希望を持つに至った。

この事例生徒と同様に、自尊感情尺度の測定結果では一様に類似した上昇傾向を示した生徒がいた。彼らも自身に対して日常生活の中で存在価値が見出せない状態であったが、人形劇という生産的芸術活動と出会い、それを制作・演技する側の立場と役割を通して他のメンバーと協働し人形劇を作り上げていく過程で、共に育ち、共に支えあい、個人としてもチームとしても成長を遂げていった。この効果は、下記に示した活動を振り返ってのアンケート結果（定質分析）から読み取ることができる。

以上から、重点目標にあげた「個別最適な学び」と「協働的な学び」とを一体的に充実させるカリキュラムとして生産的表現活動である人形劇を総合的な探究活動に位置づける意義は大きいと考える。また、ウェルビーイング及び NVC を視座とした生徒のより一層の主体的な活動の活性化を図るため、シェアリング法は有効的なグループワークであることが示唆された。

定質分析

活動を振り返ってのアンケート結果(抜粋)

◎今年度のとくしま中央一座の活動を振り返って、次の質問に教えてください。

1 あなたはこの活動に満足していますか。

とても あてはまる	まあまあ あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
4	3	2	1
回答数 (12)	(0)	(0)	(0)

- 〔理由〕
- ・人前で人形劇を演じたことが、落ち込んでいた自分を変えるきっかけになった。
 - ・見ず知らずの親子を人形劇で楽しませることが、自分のやりがいになった。
 - ・色々な施設に出向き、たくさんの人に出会えて楽しかったし、人間的視野が広がった。
 - ・人見知りやコミュ障が少しましになった。

2 この活動で学んだこと勉強になったことはありましたか。

とても思う	まあまあ思う	あまり思わない	まったく思わない
4	3	2	1
回答数 (10)	(2)	(0)	(0)

- 〔理由〕
- ・グループ学習で他の人の意見を聞くことで自分の考えが深まった。
 - ・自分の意見をはっきりと言葉で伝えることは大事だと思った。
 - ・自分たちで作り上げる人形劇でメンバーと観客の気持が一つになったことがすごいと思った。
 - ・ミスカバーし合ったり、出来ていないことをフォローし合ったり、が良い経験になった。

3 この活動が今後の生活に生かせると思うことはありますか。

- 〔抱負〕
- ・顧問の先生が「ウェルビーイングの体現をめざす」と言っていたが、これからも努力したい。
 - ・自分の役割だけでなく、いつも全体の動きや流れを見ていくことを、今後もして行きたい。
 - ・何をするのにも、話し合うことや周囲と協調して行くことを大切にしたい。
 - ・対話が人をつなげるということを忘れないで生活して行きたい。

(2023/12/23 回答)

公演風景



ウェルネス名東にて(7/31)



中央テクノスクールにて(10/28)



ふれあい健康館芸術文化祭にて(11/12)

徳島県立徳島中央高等学校

徳島県徳島市にある徳島県立徳島中央高等学校から参りました。今日の日のために部員一丸となって練習を積み重ねてきました。

さて、今回上演する作品のタイトルは、とくしま中央一座顧問の辰巳敏夫が脚本、『アラバカダ〜ブラ』です。深海魚のラバカが呪文を唱えれば、数億年前の生き物たちが時を越えて勢ぞろい。どんな生き物が飛び出すのか？ 乞うご期待!!

対象:幼児〜低学年
技法:年通り

● 8/4(金)15:30 飯田市美術館市民ギャラリー



三公記念館にて(12/9)



いいだ人形劇フェスタの紹介文

<https://www.iida-puppet.com/company/2023-251/>より



NPO法人にんじんの会にて(12/10)



阿波市吉野笠井図書館にて(12/23)

5 本年度の課題と次年度への展望

本年度は、徳島市のウェルネス名東での公演を皮切りに、年間8カ所の公共施設で人形劇の外部公演を行った。コロナ禍の閉塞感に覆われた数年間から社会が一斉に解放され、多くの人々が「静」から「動」へとシフトチェンジしなければならなくなり、社会全体がその変貌に困惑した一年であっただろう。しかし、メンバーたちは必死にこの社会から取り残されまいと学校生活に食らい付き、アルバイトに精を出し、且つその上で舞台練習や外部公演に取り組んだ。自らの課題として向き合うスタンスで活動することは、彼らの未来を見据えることにつながり、生きる力を養う機会になったと考える。

そこで、「活動の重点目標」の(1)に提示した目標を踏まえ、顧問が自身に求めた指導上のコンピテンシーとして念頭においていたことは、「価値観の共有」と「NVCを遵守する」の2点であった。前者は、とくしま中央一座で取り組んでいる現代人形劇は、ジャンルの的には西日本の高校で1校しかなく、同時に、見知らぬ他者をファンタジーの世界へと誘い、ウェルビーイングを体感できる貴重な活動を自分たちは行って

いることに意義がある。後者は、前者のような価値ある活動を行っている存在であるから、自他への思いやりを保ち、対立する意見や行動が出てしまったとしても、協調する和の心で相手を慮る姿勢を忘れないことに留意した。その2点を肝に銘じて、舞台構成、演技・演出、外面及び内面、関係性等が調和された人形劇となるよう、メンバー全員の心が一つになる人形劇を体現しようと呼び掛けた。それは、コロナ禍で疲弊した人々の心を癒すための活動でもあった。上演中、小さな失敗や想定外のことも起こったが、メンバー一人一人が顧問の期待に応え、人形劇の最善の出来栄をめざし、ベストを尽くした本年度の取組であった。

彼らが学んだことは、卒業後、個々が他者と交流を深めながら協働しつつ、社会の一員として現代の諸課題に立ち向かっていく上でどのように生かされるかが個々の課題と言えよう。その解決や克服のために貢献できる人材となって活躍できるよう努力してもらいたい。

実のところ、今夏まで3年次のメンバーしかおらず、とくしま中央一座の存続も危ぶまれていたが、年の瀬も差し迫る頃になって5名の1年次生が入部してくれた。顧問は今後も新しいチームづくりに向け、メンバーたちが多様な個性を磨き、それぞれが舞台上で最高のパフォーマンスを発揮できるよう、新たなテーマや脚本への挑戦と「学ぶ力」を高める探究方法の開発に努めたいと考える。また、人形劇の公演先について、今まで関係性を築いてきた施設や新たにつながった上演先との深い絆を紡いでいくとともに、公演先の新規開拓にも取り組んで行きたい。

○2年次「現代の国語」科目における絵本の世界探究授業について

1 目的・ねらい

2年次「現代の国語」科目において、名作絵本に触れることで情操を豊かにし、自尊感情や自己有用感を高め、読書活動に親しむ態度を育成する。その中で、絵本作品について、テーマ・内容・登場人物・作者の思い等々をワークシートに記入させ、生徒の「感動」「気づき」「共鳴」を中心にフィードバックすることにより、絵本の世界を深く読み味わうとともに、物語作中に登場する主人公の生き方や考え方に思いを馳せさせ、生徒一人一人が自らの人生を豊かに生きようとする活力や優しさを養う契機となればと考え、本校とつながりのあるコミュニティを活用した取組を実施した。

2 内容（目標）

授業に入るまでに、読み聞かせボランティアグループの読み手の方々と、綿密な打ち合わせを行い、生徒たちの読書体験を積み重ねる取組を通して、「聞く」「書く」「話す」といった言語感覚を養うことや、物語や作中の登場人物の生き方に感動を覚えることで、自尊感情を高め、自己有用感を養うとともに、自発的に自らの意見が言える「思考力」「判断力」「表現力」を高めることに繋げたいと考え、計画を練ってきた。

また、絵本による「読み聞かせ授業」を実施するだけでなく、取り上げた絵本作品のストーリーやテーマ、主人公やその他の登場人物の生き方や考え方についてじっく

りと読み味わい、作品世界を探究させることを生徒たちに試みさせ、ワークシートをもとに作品理解及びテーマへの考察を課した授業を展開することにした。

以下、「3 取組」に、その授業活動で実施したインサイドワークによる振り返り学習とアウトサイドワークによるフィードバックした内容を後に記した。加えて、その読み聞かせ授業の実施前と実施後で本事業の研究の軸としている生徒の「自尊感情の高揚」が図られたかどうかの測定を、「自尊感情尺度測定アンケート」（東京都教職員研修センターが考案し、本事業の推進委員である鳴門教育大学 小坂浩嗣教授が本校生徒にそぐう形で改編したものに、本校が独自にE S Dの理念とウェルビーイングの視座を加えたもの）を用いて絵本の世界を探究することの効果を試みた。

詳細を記すと、ソーシャルスキルの更なる向上とウェルビーイングの深化〔(1)今が楽しい(個人・現在) (2)これからの将来に希望を持てる(個人・将来展望) (3)クラスや地域の人々の幸せを願う(社会・共生) (4)この街・学校・世界を良くして行きたい(利他性・公共・持続)〕を図り、多様な生徒に対する「個に応じた指導」の中身を点検・検証し、授業者の学習のねらいに落とし込もうとする思惑が授業者サイドにはあった。しかしながら、学習者たちがそのことに囚われることなく、自ら判断し、自己決定し、自立した学習者として学びを獲得し、個々の生徒が「個別最適な学び」へ到達できるよう、絵本の力を活用しながら適切な授業マネジメントを行いたいと考えた。なお、ICT 機器の活用法としては、学習者が書いたワークシートの内容を電子黒板で映写し、MetaMoji ClassRoom のアプリケーションソフトを使って、学習を深めるための授業展開を行った。

3 取組

本年度以前から親交のあった社会人の読み聞かせサークル「よしのがわ読み聞かせグループかぶとむし」から講師を招き、2年次の「現代の国語」の科目において年間9回の読み聞かせ授業を実施した。毎時間（指定された「絵本の世界探究」の時間に）、生徒は前半の時間に読み手の方からの「絵本の読み聞かせ」を聴き、後半の時間にその読み聞かせていただいた絵本作品のテーマや内容、作者の思いを個々の生徒が感じたまにワークシートに記入し、本授業の内容を振り返った。

資料1

※ 以下は、絵本の世界探究ワークシートの記録（抜粋）

	絵本のタイトル	作者・絵・訳者・読み手
第〔 1 〕回 令和5年10月5・6日	『父のかお母のかお』 〔雲母書房〕	作…………ときわ ひろみ 絵…………渡辺 享子 読み手……堀江 満子 氏
心に残るフレーズ	▽姉が「お母さん」と叫ぶところ▽お父さんとお母さんの顔見たこと ない▽洗濯をしながらお母さんの口調になっているところ▽「写真全 部戦争で焼けてしまったんだ」▽「お父さん、お母さんいただきます」 と言ったところ	

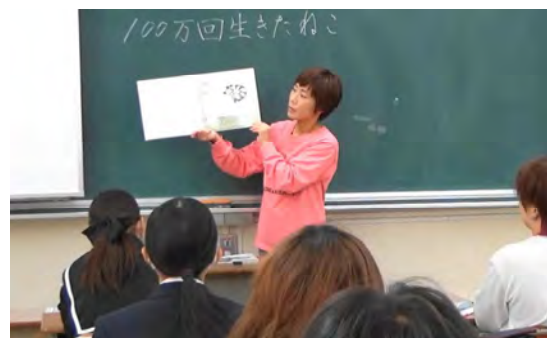
印象に残った場面	▽両親の絵に話しかける（ご飯を食べる）場面(5)▽和子の戦争の夢(3) ▽復員兵が絵と手紙を残していくところ▽父母の顔を見ながらご飯を食べるところ▽おじさんが絵を描いて置いて帰ったところ▽いつのまにか和子が母親のような口調になっているところ
姉・和子について 思うこと	▽お母さんのように面倒見が良い人▽しっかり者▽親のかおの絵をもらったことにより、親の死を受け入れていったのかなと思った▽弟思いのところがある
弟・昭一について 思うこと	▽純粹でかわいい(2)▽元気▽やさしい
復員兵 について思うこと	▽やさしい▽いい人▽姉弟が二人だけで暮らしていることにやるせな さを感じ、何もできない自分に申し訳ないと感じていると思った
色づかい	▽昭和な感じ▽暖かい色▽当時の様子を想像しやすい色使いだった
作者の思い	▽戦争のつらさと人の心の温かさ(4)▽戦争がどれだけ辛いのか▽復員 兵を通して子供たちに辛い生活をさせていること、その現状をつくっ てしまった大人たちの深い悲しみを感じている▽戦争のたいへんさ、 残酷さを知ってほしい▽戦争反対
テーマについて	▽戦争はよくないし助け合いが大切▽父母がいるのは当たり前じゃな い▽戦争の爪あと
思ったこと 感じたこと	▽姉弟の感じから、両親も凄いやさしい方なんだろうと思った▽戦争 の悲惨さ、戦争を超えて生きることの厳しさ▽登場人物全員の優し さが温かかった▽みんな強くてかっこいい▽戦争は二度としてはなら ない▽弟は両親の顔を知らなかったけれど、復員兵さんのおかげで知 ることができたところに感動しました▽姉が戦争の夢を見た時、想像し てみると、とてもつらい思いになりました



第1回絵本の世界探究授業で実演指導してくださる「絵本読み聞かせグループかぶとむし」の堀江満子氏

	絵本のタイトル	作者・絵・訳者など
第〔 2 〕回 令和5年11月13・14日	100万回生きたねこ 〔童心社〕	作 佐野 洋子 読み手 川端 美紀 氏
心に残るフレーズ	▽大きな声で泣きました▽ねこは100万回泣きました▽ねこは泣きま せんでした▽ねこは初めて自分の猫になりました▽一緒にいてもいい かい▽白いねこの「そう」▽ねこはもう決して生き返りませんでした	

印象に残った場面	▽白猫を抱えて泣いている場面(3)▽ねこはもう決して生き返らない(3) ▽白い猫ととらねこがいつまでも一緒にいるところ▽最後今まで生きた分泣いて、生き返らなくなるシーン▽今までの飼い主たちの悲しみも理解できたのかなと思った▽白猫を追うようにとらねこが死んだところ▽死ぬことなんてこわくないと言っていたとら猫が白い猫と出会い、恋をして最愛を失い泣き続けてとらねこも死んでしまったところ
それぞれの飼い主について思うこと	▽ねこをおとりに使うのは頭がいいなと思った（どろぼう）▽全員ねこを愛していたと感じた
トラねこについて思うこと	▽白い猫と出会い自分よりも好きになったことでとらねこ自身が変わったと思った▽かっこいい▽白いねこ会えて良かった▽今まで死ぬ側で、飼い主の気持ちを知らなかったが、ねこが初めて大切な存在が死んだ時の気持ちをしれたのかもしれないと思った▽白い猫に出会うまではかわいそうだと思った。最後に愛を知れてよかった▽白いねこに出会った時から素直になっていくところがよかった
白いねこについて思うこと	▽穏やかで美しい▽気高くてかっこいい▽言葉こそ少なくとも、ねこへの愛が伝わる白いねこがとても素敵だと思いました
色づかい・レイアウト・装丁	▽可愛すぎない絵で好奇心が勝って勝手に目がついていく▽猫がかわいい、色づかいが落ち着く▽絵柄や色が特徴的で印象に残る
作者の思い	▽家族に対する思いをねこに例えて描いていると思う▽失ってしまう前に身近な大切なものに気づいてほしい
テーマについて	▽命のありがたみ／命を考えさせてくれる▽大切なものは失ってから気づく▽愛されるより愛することが大事だと伝えたいのかなと思った▽テーマは愛だと思う▽100万回死んだじゃなくて、100万回生きたって書いているのがいい
感想・意見等	▽子どもの頃にお母さんに読んでもらったのを思い出した▽初めて愛した白ねこの死を悲しみ、100万回泣き、生き返らなくなったところに意味があるのかなと思った▽100回生きたなかでずっと愛されてきて、白いねこをはじめて自ら愛したとらねこは、愛することが自分の人生の意味あることだと理解し、もう生き返らなかったのかなと思った▽読み聞かせが上手で聞き取りやすかった。夢中になって聞くことができた。▽ねこ側の感情を想像できておもしろかった



第2回絵本の世界探究授業で朗読して下さる「読み聞かせグループかぶとむし」の代表 川端美紀氏

	絵本のタイトル	作者・絵・訳者など
第〔 3 〕回 令和5年11月16・17日	泥かぶら 〔瑞雲舎〕 読み手 川端 美紀 氏	原作 眞山 美穂 文 くすのき しげのり 絵 伊藤 秀男
心に残るフレーズ	▽優しい心は優しい心と呼ぶ(2)▽「それから明日、一緒に遊ぼう」▽ 「それがあたいにできることだから」▽こころについた泥をおとせば みんな美しくなる▽「さよなら、天使のように美しい人」▽いつでも 顔を上げて笑顔で▽「どんな時でもにっこり笑うこと」▽心についた 泥を落としたら優しくなれる	
印象に残った場面	▽次郎兵衛と泥かぶらが歌を歌って大笑いしたところ(4)▽きれいな顔 になると言われて、本当にきれいになったところ▽出来るのに行動に 移さない人がほとんどなのに、皆からいじめられて心に余裕がないは ずの泥かぶらができるのが心に残った▽泥かぶらが水に顔を映す場面 ▽こずえがお父さんの高い茶碗を割って、かわりに泥かぶらがぶたれ て助けたところ▽泥かぶらが次郎兵衛におみやげを渡していたところ ▽次郎兵衛が置き手紙していなくなったところ	
泥かぶらについて 思うこと	▽素直で優しい子(2)▽いつもニコニコしている▽つらいことがあつて も泣かずに笑っているのは、本当に強い人しかできないと思った▽言 われたことを理解して、自分のために頑張る姿がかっこいい▽これま でひどいことを言ってきた相手もかばって罪を受けたり、誰かの身代 わりになっていて優しすぎる▽心の強い女の子▽最初と最後で人が変 わったようになっていた	
旅の老人について 思うこと	▽人を見たく目で判断しない▽人の心のしくみをよく分かっている▽泥 かぶらにすてきなことを教えてあげて、すごくいい人▽人を見たく 目で判断しない▽人の心のしくみをよく分かっている▽泥かぶらにすて きなことを教えてあげて、すごくいい人▽泥かぶらに偏見をもたず話 してくれた聖人だと思った▽人として一番大事なことをよくわかって るなと思いました▽泥かぶらに偏見をもたず話してくれた聖人だと思 った▽人として一番大事なことをよくわかってるなと思いました	
こずえについて 思うこと	▽もっと泥かぶらに感謝したほうがいい▽泥かぶらのやさしさ、心の美 しさに思いを動かされ、あやまり、仲良くなれて良かったです▽泥かぶ らにかばってもらって、自分のだいじなクシをあげる優しさが芽生えた	
次郎兵衛について 思うこと	▽悪いこともしたけど、いいことをして生きていこうとする勇気がす ごい▽最初はひどい人だと思ったけど、泥かぶらの優しさに救われて、 泥かぶらの幸せを願って自分の仕事を放棄したのは驚いたが、本当は 優しい人なのだと思った▽泥かぶらに会って変わったのがすごい	
色づかい レイアウト	▽色がはっきりしていてきれいだと思った▽色鮮やかで場面が想像し やすい▽最後に泥かぶらがちゃんときれいになっているのですごいと 思った	

仕掛け等作品に意味を持たせているもの	▽結局、人は合わせ鏡、人に優しくすると自然と周りも優しくなるのだと思った▽泥まみれの泥かぶらと美しくなった彼女とのギャップ
作者の思い	▽優しさが優しさと呼ぶ▽どんな人でも心の泥をおとせば美しい人になる▽いつでも笑った方がいい▽こんな生き方が世界を平和にする
テーマについて	▽心を美しくすることで見た目まで美しくなり、周りの人間までをも変えることができる▽利他の心で生きることの大切さ
感想・意見等	▽笑顔、優しさ、自分の顔を恥ずかしいと思わないことが大切▽美紀先生の読みがすごくて聞き入ってしまった▽泥かぶらを見習いたい▽少しつらいと思ったけど、人にやさしくすることの大切さが知れた▽ばかにされている時に、旅の老人が泥かぶらに言った言葉がとても心に残りました▽自分がやさしくしたら周りの人も優しくなれて、いいなと思った▽人の人生は出会いをきっかけに簡単に変わることができるを知った▽泥かぶらが老人のアドバイスをきいて、最後、幸せになって感動した



第3回絵本の世界探究授業でフィードバックして下さる「絵本読み聞かせグループかぶとむし」の代表 川端美紀氏

上記の各ワークシートの記述から、生徒たちは多くの学びを得たことが分かる。第1回の『父のかお母のかお』では、戦争が生み出す悲しさを、第2回の『100万回生きたねこ』では、他者を愛することや死を通して、「生きる」ということの意味を知り、第3回の『泥かぶら』では、絵本で人の心が救われることがあるのだということを実感し、そういったことを味わいのある読み手の方々の朗読によって個々の胸中に「気づき」が生まれ、それぞれに吸収し、咀嚼し、フィードバック時にその内容を反芻しながら、絵本の世界をそれぞれに探究してくれたのではないかと考える。

その学びをデータの的にどう表れているのか。自尊感情測定尺度を用いたアンケートで確認したい。

4 成果

○「自尊感情測定尺度」を用いた自己肯定感の変容と取組の効果について

資料2

《講座受講者の自尊感情尺度測定平均値》

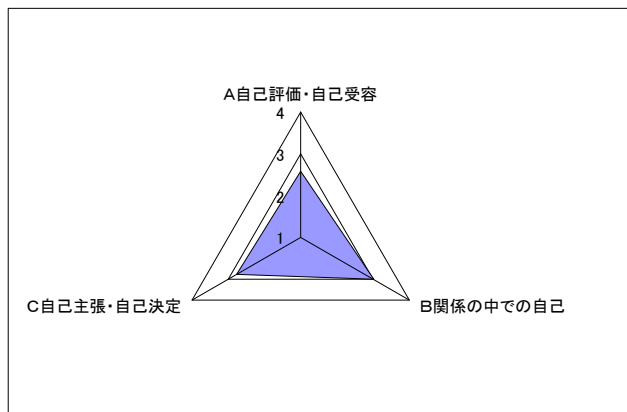


図1〔令和5年10月1日採取〕

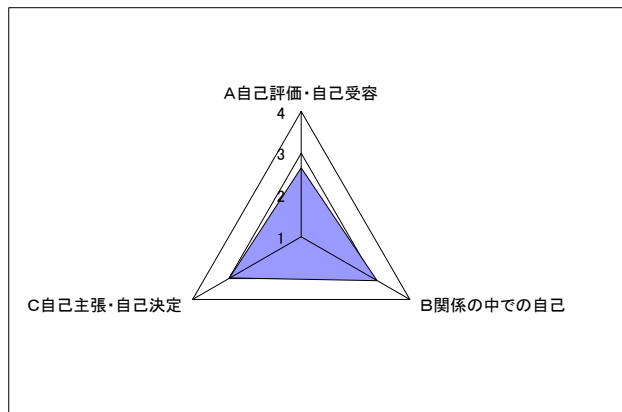


図2〔令和5年12月6日採取〕

項 目	全体平均 9月	全体平均 12月
A 自己評価・自己受容	2.57	2.64
B 関係の中での自己	3.02	3.10
C 自己主張・自己決定	2.77	2.90

図3 《自尊感情測定尺度＋ESDアンケート結果》

上記に挙げた3観点のうち、まず、「A 自己評価・自己受容」「B 関係の中での自己」との観点では、全体平均が「A」0.07「B」0.08とやや上昇傾向を示し、「C 自己主張・自己決定」では0.13と大幅に伸び全体的なバランスも取れている結果となった。また、個別に数値を観ても、授業実施前よりも実施後の方が概ね上昇に転じており、ABCの項目全てで著しく下降傾向を示した生徒は殆どいなかった。したがって、この「絵本の読み聞かせ」による絵本の世界探究の授業が自尊感情を高め、自己効力感を持たせて行く取組になったことは、効果が多分にあったと考察する。

例年、本校で絵本の読み聞かせ授業を導入して18年になるが、本年度も2年次において、名作と呼ばれる絵本に触れ、主人公や登場人物の生き方を追体験したり、心情に共鳴したりすることで自らの心の琴線を掻き鳴らし、感性を揺さぶるひとときとなったようである。この読み聞かせの時間は、生徒が幼少期に満たされていなかった母性へのフラストレーションを補うための授乳的時間ともなり、深く精神世界に入り込む作品鑑賞の時間ともなっていると考ええる。そして、その作品鑑賞をワークシートを用いて個々の生徒に絵本の世界を探究させることで、ある生徒は過去と向き合い、ある生徒は現在と向き合い、殆どどの生徒が、今、自分の置かれている日常における立ち位置を認識し、ネガティブに捉えていた自己の内面を癒し、自らがポジティブな精神を持ってこれからの未来を切り拓いて行こうとする姿勢を育んでくれたのではないかと考える。

5 課題

生徒の中には、発達障害、情緒障害、低学力ということが理由で、小中学校と置き去りにされ、見捨てられ、学習の機会が奪われてきた過程がある。「3 取組」に記したワークシートは、その生徒たちが、本校へ入学して絵本の世界へ導かれ、魂の叫びや浄化される瞬間の言葉が紡がれた内容となっている。また、この授業を通して思い至ったそれぞれの「感動」「気づき」「共鳴」により、さらに自身の人生探求に心のベクトルが向いて行ったことであろう。この探究授業の取組が、正に個に応じた学習を可能にし、協働的学びにつながった授業体験であるとも考える。

今、社会を見渡せば、コロナ禍はようやく落ち着いてきたようであるが、ウクライナや中東情勢はまだまだ戦火が収まらない殺伐とした社会である。しかし、そのような時節であるからこそ、本事業を通して若い生徒たちに「絵本の世界探究」を学んでもらった意義は深かったと考える。

本校には、未だ基本的生活習慣が身に付かず、長期欠席者や体調不良等により欠席遅刻早退が後を絶たない状況の生徒がいる。折角、このような貴重な事業を実施しても、あるクラスでは半数近い生徒が欠席し、学びの機会を逸してしまっている生徒が多数存在するのである。したがって、「深い学び」に至らせる以前の課題が本校にはあるが、家庭と連携しつつ、本事業のような魅力ある授業や魅力あふれる学校づくりをめざし、地道な努力を重ねて行きたいと考える。

○「現代文B」科目における創作絵本活動の取組について

1 目的・ねらい

「現代文B」科目において、外部講師の指導の下、1人1台端末を活用したデジタル創作絵本を制作する。その創作活動を通して、活動の中にウェルビーイング(協調的幸福感)を視座に据えたポジティブな思考を基盤とした自己理解や自己管理能力を高めるとともに、意思決定能力の育成を図ることを目的とした。

ねらいとしては、数年前から取り組んでいる「世界で一冊の自分にしか表現できないオリジナル絵本をつくろう」をコンセプトに創作絵本を試みた。

本年度は、「現代文B」を選択科目として履修した生徒たちは、思い思いのテーマで本校図書館の絵本コーナーでそれぞれにモチーフとなる材料を閲覧し、キャラクターやストーリーを考え、創作絵本づくりにチャレンジした。描画に関する指導と創作の手解きは、本校の卒業生でイラストレーターの鍛冶貴裕氏に依頼した。

活動の重点目標は、次の通りである。

- (1) ICT 機器を活用したデジタル創作絵本の更なる可能性を探る。
- (2) クリエイティブな活動を通して自己肯定感や意思決定能力及び豊かな人間性の更なる育成をめざす。
- (3) 創作絵本を通して、ESD 及びウェルビーイングを視座とした一層の学習者主体の教育活動の実現を図る。

以下に、その実践内容を報告する。

2 内容

絵本の創作に向けた絵画技能の向上と質の高い構成をめざし、世界に一つしかないオリジナル絵本を完成させ、ICT 機器を活用したプレゼンテーションを行い、創作絵本が完成した喜びを分かち合うとともに、各々の世界観を発表し合うことでそれぞれが新しい価値観と出会う学び合いの契機にしたいと考えた。また、一昨年度から導入された生徒一人一台端末を活用したデジタル絵本の作成を試み、クリエイティブな活動を通してウェルビーイング（協調的幸福感）な価値観の導入を試み、ポジティブな思考を基盤とした自己理解・自己管理能力及び意思決定能力と、延いては豊かな人間性の育成を図ろうとした。

3 取組

(1) 調査研究の対象及び研究方法

- ・ 定時制昼間部現代文B選択者

国語科「現代文B」科目における「創作絵本」授業とその完成作品を活用した読み聞かせ実習（上演会）を行う。

- ・ 調査研究の方法

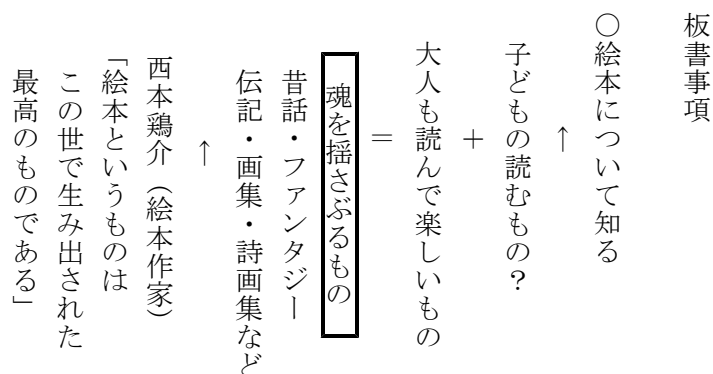
ア 創作絵本授業の前後に、「自己肯定感尺度」を測定するアンケートを実施。

イ モチーフとなる題材の提示及び探求したいテーマの設定。

ウ イラストレーター講師による専門的な絵画指導と個々の生徒における描画方法の探究。

エ 「自尊感情測定尺度」測定値からみえた生徒の変容と創作絵本に顕れた生徒の「気づき」等を国語科担当者（授業者）が分析を行い、「多様性に応じた新時代の学び」に関する成果と課題について明らかにする。

まず、授業者が創作絵本授業の第1時限目として、「絵本について知る」と題しての講義を行った。



ここで取り上げたのは、絵本作家の西本鶏介氏が絵本について論説した言葉で

ある。西本氏は、こうも述べられた。「童話や児童書は、哲学や宗教よりも崇高なもの」とであると。生徒たちには、今から自分たちが取り掛かろうとしている作業は、「世界でたった一つしかない絵本」とであると同時に、その作品を編む作業は尊くも崇高な営みであるという価値を認識した上で、創作に取り掛かってほしいとの授業者の願いを伝え、価値観を持たせようと考えた。

さて、本年度実際に制作したプログラムは、次の通りである。

(2) 鍛冶貴裕氏指導による創作絵本プロジェクト授業の日程〔全8回〕

学習者の中には、元来、絵が不得意な学習者もいた。「自分たちに満足が得られるような創作絵本ができるのだろうか」と不安を募らせて、プロットを考える工程で立ち止まってしまった生徒もいたが、各自の創作に賭けた熱意と「表現すること はとても楽しい」との思いが作業が進むにつれ、次第々々と形に表れてきたようである。

回	月日/教室	指導者	授業内容
1 ・ 2	10月24日 4・5限目 306教室	鍛冶 貴裕 氏	絵本づくりについて ・テーマを決める・キャラクターを決める ・構成・あらすじを書く
3 ・ 4	11月14日 4・5限目 306教室	鍛冶 貴裕 氏	絵本づくりについて ・プロット（骨組み・構成）を考える ・ラフ画を描く・画材を選ぶ
5 ・ 6	11月28日 4・5限目 306教室	鍛冶 貴裕 氏	絵本づくりについて ・下書きを描く・本描きを描く ・仕上げを行う
7 ・ 8	12月1日 4・5限目 306教室	鍛冶 貴裕 氏	完成したオリジナル絵本で発表会 ・タブレット端末を使ったプレゼンテーションを行う ・指導者からの講評を聞く

次に、実際の生徒たちによる創作絵本の優良な作品5点を掲載する。

生徒作品No.1 題名『おめめちゃんがくよ』





【生徒制作譚】

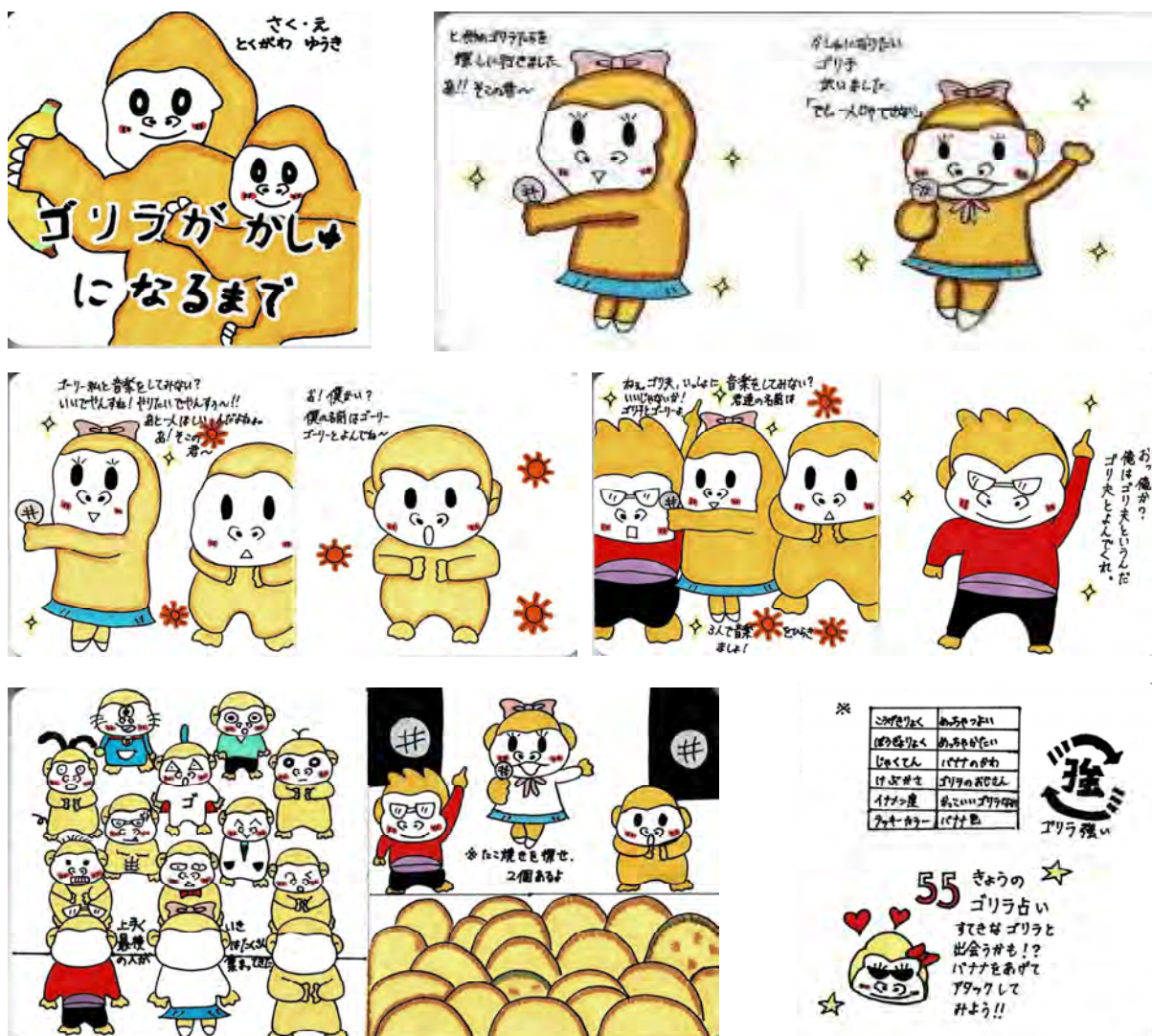
私は創作絵本をつくる授業で、「おめめちゃんがくるよ」という作品を作りました。工夫した点は、最後に迫力のあるおめめちゃんを登場させるために、ページ枚数を工夫し、計算をして描いたことです。上手く行った点は、グラデーションを綺麗に出せたことで、上手く行かなかった点は、少し雑に描いてしまったことです。私は、この作品が出来上がった時、すごく達成感があって、可愛く仕上がったと思いました。

※ 講師講評：絵がとても上手で、グレーを基調とした背景の着彩が、この物語の不穏な空気感を表現できていると感じました。また、1ページ1ページに無駄がなく、キャラクターの心情をしっかりと伝え趣旨に向かっているまとまった作品だと思います。それに加えて字まで達筆です。

アドバイス：ないです。ほんとに強いて言うなら、ゆみちゃんとお母さんの容姿が似ているの

で、もう少し違いをつけると、よりそれぞれのキャラクターだとわかりやすいかなと思いました。

生徒作品No.2 題名『ゴリラがかしゅになるまで』



【生徒制作譚】

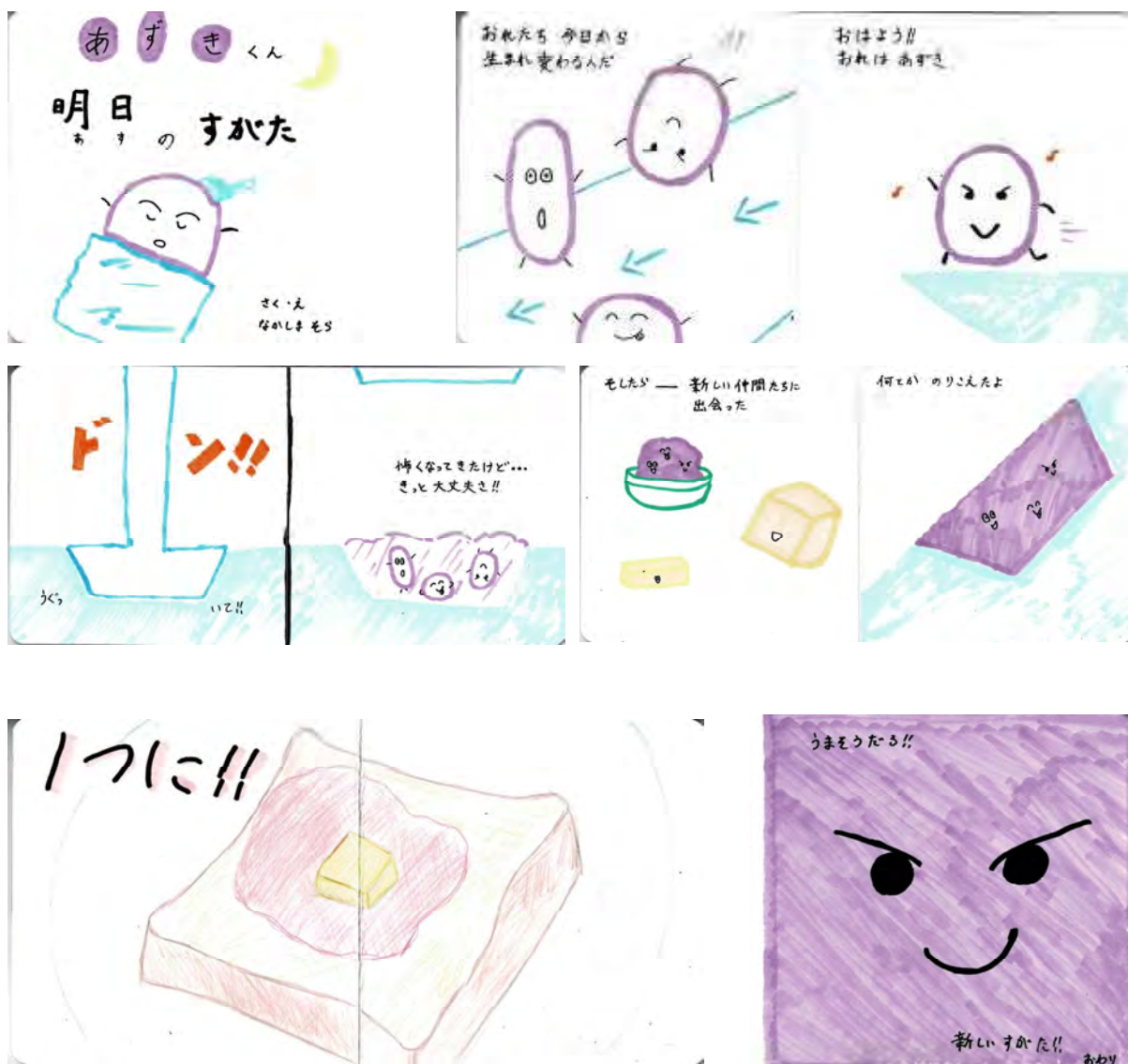
ゴリラの作品を描き、色の特徴など一体ずつの個性豊かなゴリラたちを描けたのが、自分の中で上手く行ったと思いました。一体ずつの顔や体のラインも工夫して描きました。作ってみての感想は、最初は上手く描けるか自信が無かったけれど、初めての絵本づくりに挑戦してみて、とても楽しかったし、鍛冶先生が分からないところはアドバイスをくれて有り難かったです。教え方も、非常に分かりやすかったです。

※ 講師講評：キャッチーなデザインのキャラクターが気味よく紙面いっぱいに描かれていて、すごく楽しい作品に仕上がっています。余計な加筆を避け、それでいて賑わいのあるページが多いのが好感を抱きます。

アドバイス：字が上手なのですが、ところどころ読みにくいページもあるため、文字が小さく

なる場合は、漢字を使わずひらがなでまとめてあげると窮屈さを紛らわせます。

生徒作品No.3 題名『あずきくん明日のすがた』



【生徒制作譚】

創作絵本を描くにあたって、登場する三体のあずきをどう区別させるかということを考えました。そして、顔のパーツや表情に個性を出すことを工夫して、一体一体、違いが出せたと思います。文においては、「天の声」を使おうとしたのですが、失敗に終わりました。ですが、実は「音」に関する部分はオレンジ色で描いており、上手くいった点です。描き始めた頃は、完成形が全く見えていなかったのですが、無事、完成して良かったです。

※ 講師講評：小豆をかわいく描き、それが一つの方向へ話が進んでいくまとまったお話だと思います。暗い色を使わないことで、ポップで楽しい絵に仕上がっています。

アドバイス：一貫して淡白な色合いなので、あずきくんや物体の中の空白を薄い色でも着彩してあげると、より生き生きした存在感のあるキャラクターや物体になると思います。

す。最後のあんバタートーストのページや、その一つ前のページにあるバターへ「あんバタートーストに！」や、「新しい仲間、バターくんたちに出会った」などの説明書きを付け加えると、絵だけではなく、セリフと相まった説得力が生まれ、読み手をより納得させることが出来ると感じました。

生徒作品No.4 題名『深愛』



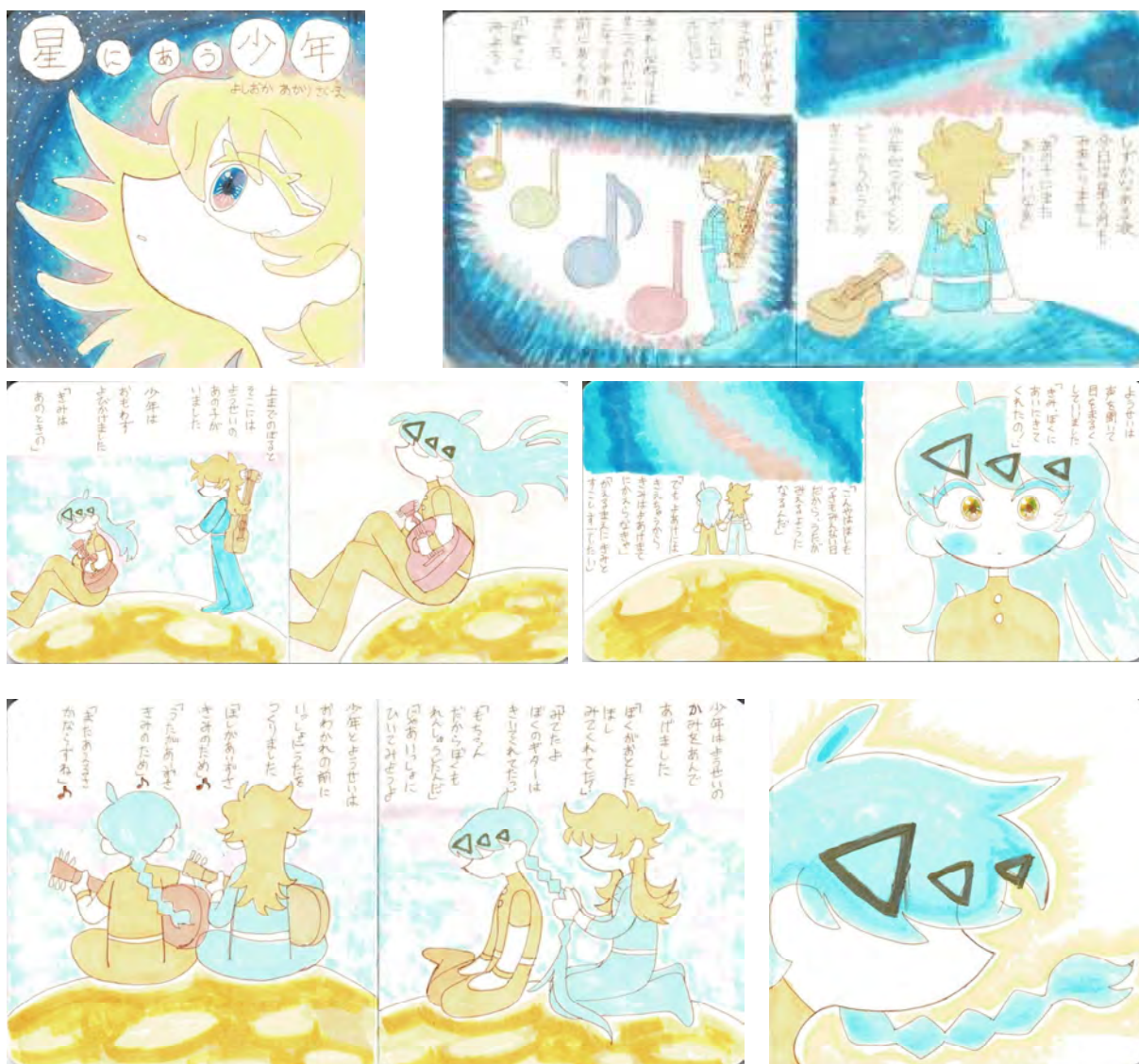
【生徒制作譚】

擬人化のデザインを工夫しました。髪型や服装などを一から考えました。上手く行った点は、顔の表情の描写が思い通りに描けたと思います。上手く行かなかった点は、手や体のデッサンが満足できない描写になってしまいました。あと、セリフを省いてしまったので、読み手に上手く伝わるかどうか心配なところです。作り上げた感想は、一から絵本を作り上げることは、こんなにも大変なんだなと思いました。絵をしっかりと描いても、読む人に内容が伝わらなかったら、意味がないことを知りました。

※ 講師講評：人間の顔を描くのがとても上手です。また、画材の特性を理解していて、色彩の足し算と引き算が上手くできていると思いました。

アドバイス：好きなもの、興味のあるものに対する拘りと、それへの知識や技術を高めていく好奇心を、この絵本を拝見して受けました。これから、人間の顔、服のシワ、物体の透け感などを描く上手さに留まらず、更に色んなものを描く力が身についていくんだろうなと感じました。それは、何かを発見する着眼力、目で見つける力です。それを持っているので、これからもどんどん絵を描き続けてください。応援しています。

生徒作品No.5 題名『星にあう少年』



【生徒制作譚】

工夫した点は、前作からの続きを制作したので、絵のタッチを前作とあまり変えないようにしたところです。上手く行った点は、絵を丁寧に仕上げる事が出来た点です。上手く行かなかった点は、時間内に制作が終わらなかった点です。作り上げた感想は、鍛冶先生や生徒の皆と一緒に協力して制作出来たがとても楽しかったです。世界に一つしかない

自分の絵本を作ることが出来て、とても嬉しかったです。

- ※ 講師講評：たった8ページの絵本とは思えない満足感を得られました。お見事な絵本です。
2人のキャラクターの想いと会話で物語に繋がっていく自然さが、限られたページの中でも、登場人物2人だけの世界のより崇高な演出に結びついているのかと、大変勉強になりました。また、カラーリングの淡い彩度はしっかり計算されていて、背景の色選びまで飽くなき拘りを感じます。更に続編はないものかと、心を掴まれる一作に仕上がっています。

アドバイス：特にありません。

上記創作絵本作品を仕上げた後、発表の日に合わせて、それぞれの作品をPCソフト(PowerPoint等)を用いてデジタル絵本としてデジタル加工し、その後、スピーカーフォンで音声を吹き込み。動画変換(Mpeg4)を行い、デジタル創作絵本として完成させた。画材については、本年度も作画の段階で色鉛筆や水彩絵の具・コピックといった従来からの絵筆を用いた作画スタイルを取った。本年度、この授業を履修した生徒にとってその方が自分たちに相応しいイメージの画風に仕上げることができると思ったからである。また、ストレスの多い日常の中で、リアルな画材を使った描画は「箱庭療法」に取り組むようなひと時になっていたと授業者は考える。実は取組の初めに、授業者は学習者たちに作画からデジタルで作製するか、ホワイトブックに画材を使って作製するかを選択を提示した。すると、全員がデジタルではなく、コピックや色鉛筆、水彩絵具やパステル等の画材で描くことを選んだ。尋ねると数名の学習者が、フォトショップなどのデジタルソフトで作画できるスキルを持っていたが、「世界で一冊の絵本」なので手に取ることのできる紙の絵本を選んだのである。紙の質感や画材の匂い、そういった要素も創作の意欲を描きたてたのではないかと思われる。



作画の具体的なアドバイスを講師から聴く学習者ら
奥は講師の鍛冶貴裕氏



絵本構成を考える学習者（左）と作画のポイントを講師から聴く学習者（右）

《資料１ 自尊感情測定尺度＋E S D理念を踏まえたアンケート》

学年_____年_____組_____番 名前 _____

皆さんの気持ちについて、学校での様子を中心におたずねします。質問に対して、自分の気持ちに近い数字に○をつけてください。

＜記入例＞

例) 夏よりも冬が好きである

あて どちらかといえば どちらかといえば あて
 はまる あてはまる あてはまらない はまらない
 4 ——— 3 ——— 2 ——— 1

No	項 目	
1	私は今の自分に満足している	4 ——— 3 ——— 2 ——— 1
2	人の意見を素直に聞くことができる	4 ——— 3 ——— 2 ——— 1
3	人と違っていても自分が正しいと思うことは主張できる	4 ——— 3 ——— 2 ——— 1
4	私は自分のことが好きである	4 ——— 3 ——— 2 ——— 1
5	私は人のために力を尽くしたい	4 ——— 3 ——— 2 ——— 1
6	自分の中には様々な可能性がある	4 ——— 3 ——— 2 ——— 1
7	自分はダメな人間だとは思わない	4 ——— 3 ——— 2 ——— 1
8	私はほかの人の気持ちになることができる	4 ——— 3 ——— 2 ——— 1
9	私は自分の判断や行動を信じることができる	4 ——— 3 ——— 2 ——— 1
10	私は自分という存在を大切に思える	4 ——— 3 ——— 2 ——— 1
11	私には自分のことを理解してくれる人がいる	4 ——— 3 ——— 2 ——— 1
12	私は自分の長所も短所もよく分かっている	4 ——— 3 ——— 2 ——— 1
13	私は今の自分を好きに思う	4 ——— 3 ——— 2 ——— 1
14	いったん決めたことには責任を持って取り組む	4 ——— 3 ——— 2 ——— 1
15	私には誰にも負けないもの（こと）がある	4 ——— 3 ——— 2 ——— 1
16	自分には良いところがある	4 ——— 3 ——— 2 ——— 1
17	自分のことを見守ってくれている周りの人々に感謝している	4 ——— 3 ——— 2 ——— 1

18	私は自分のことは自分で決めたいと思う	4——3——2——1
19	自分は誰かの役に立っていると思う	4——3——2——1
20	私には自分のことを必要としてくれる人がいる	4——3——2——1
21	私は自分の個性を大事にしたい	4——3——2——1
22	私は人と同じくらい価値のある人間である	4——3——2——1
23	様々なことを自分で感じ、考えていると思う	4——3——2——1
24	自分の気持ちや考えを表現していると思う	4——3——2——1
25	他者と協力してものごとを進めていると思う	4——3——2——1
26	多様な価値観を認め、尊重していると思う	4——3——2——1
27	様々なことに自ら進んで取り組んでいると思う	4——3——2——1
28	私たちは将来の世代に対する責任をもっていると思う	4——3——2——1

《講座受講者の自尊感情測定平均値》

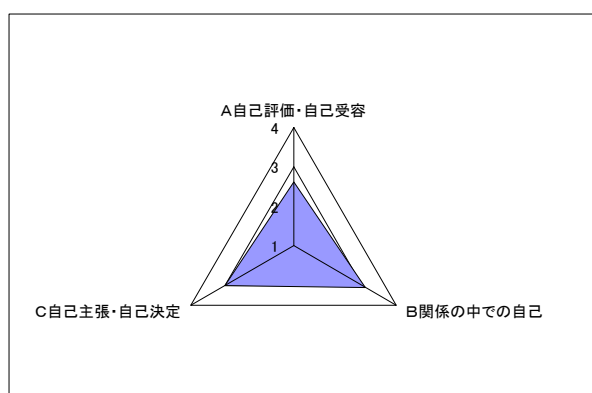


図 1〔令和 5 年 9 月 19 日実施〕

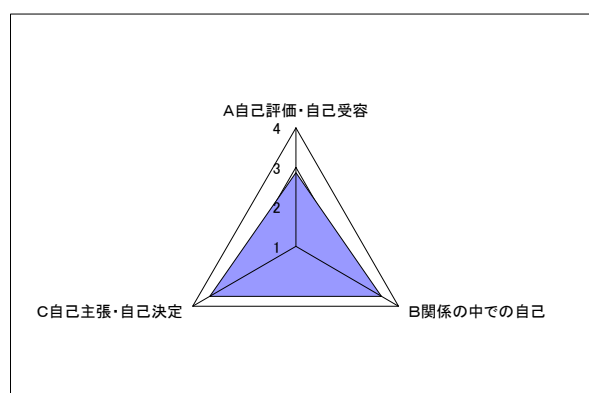


図 2〔令和 5 年 11 月 29 日実施〕

項 目	講座平均 9 月	講座平均 12 月
A 自己評価・自己受容	2.61	2.88
B 関係の中での自己	3.10	3.50
C 自己主張・自己決定	3.01	3.51

図 3 《自尊感情測定尺度＋ESDに関するアンケート結果》

4 成果

上記、資料 1 のような 28 項目 (23 項目以下の質問は ESD の理念を踏まえた項目となる) の自尊感情に関する測定について、本講座でアンケートを取ったところ、「A 自己評価・自己受容」「B 関係の中での自己」「C 自己主張・自己決定」の 3 項目において共に上昇した。

詳細を挙げるならば、「B」の項目で 2 回目の採取が下降した学習者が若干名いたもののいずれの項目でも本年度の履修者の中には、大きくポイントを伸ばした学習者がおり、3 観点のトータルのポイントが大幅に上昇した学習者に理由を尋ねると、「描く前は上手く仕上がるか不安があったけど、背景の処理や色遣い、文字のデザインも鍛冶先生に指導していただいたので思ったより上手く仕上げることができました。自分らしさも出せて、ちょっと不思議な絵本になり、大変気に入りました」と回答した。

プロのイラストレーターの鍛冶貴裕氏に、8回にわたる描画の技術を手解きしてもらった学習者たちが、創作絵本作りにチャレンジする大きな力となり得たようである。

一方、絵を描くことに苦手意識を持っていた学習者も取り掛かるのに時間を要し心配したが、いざ取り掛かると、完成させるまで熱中して、クオリティの高い作品に仕上げていた。学習者がポジティブに取り組むと、内面に学びの意欲の発達的变化が起こり、アンケート結果にもその高揚した数値となって顕れており、学習者全員と言って良いほどの確率で自尊感情が上昇した。また、この高揚感を持って、次の段階として、「子どもたちや読者を喜ばせたい」という貢献心や自己効力感が生まれる。創作絵本の授業を始めて例年のことではあるが、自己効力感が育つと自己肯定感が高揚するとい現象が顕れる。そのような変容が一人一人のワークシートからも読み取ることができた。

前述のことから、結果としてキャッチフレーズ通り、学習者たちにとっての「世界で一冊のオリジナル絵本」が完成した。仕上がったこの小さな絵本は、掛け替えのない一冊となり、これから出会う人々との熱情ある人間関係を築いて行くウェルビーイングな世界を提供する使者として、卒業後も、それぞれの進路先で今回の創作絵本授業で育成され培われた内面が、分かち合いの一助となることを祈りたい。

5 課題

本事業の3年目を終えて「創作絵本」という取組が、いかに有意義かつ学習者の資質・能力の成長に効果をもたらすかということを実感した。本年度の重点目標として掲げた(2)及び(3)は、実施アンケートやワークシートに記された学習者の記録からも大いにその効果が読み取れた。3観点のうちの「A 自己評価・自己受容」は、やや伸び止まりの感があるが、この度の受講者が、全員3年次生（卒業予定者）であり、卒業を間近に控え、それぞれの進路が決定するも、未来への経験のない世界へと足を踏み入れる心配や日常に横たわる家庭的経済的な危惧が、不安材料となった表れであろうと考察する。誰しも不透明な未来に対して先行きへの不安を抱くのは当然のことであり、巣立ち行こうとするヒナが一瞬尻ごみをしてしまうのに似ている。だが、本校や本事業で学び得たことを糧に、逞しく歩みを進めて行くことを期待したい。

⑥支援相談員の活用

1 目的・ねらい

家庭環境に恵まれない、不登校を経験している、特別な支援を必要とする等々、多様な生徒に応じた学習支援、就労支援等を充実させ、社会人基礎力の向上をはかる。また、卒業年次より前の低年次の段階で、就労に対する意識や知識を高め、生徒の社会的・職業的自立を促す。

さらに、生徒や教員に対する専門的な視点に立った助言や支援を行ってもらい、生徒に対する支援の充実と指導体制の深化を図る。

2 内容及び取組

昨年度から引き続き、社会福祉士・公認心理士・キャリアコンサルティング技能士等の資格を有し、ハローワークに勤務されている支援相談員が配置されている。

①ジョブジョブカフェの活動

定時制課程昼間部では、前年度までの「働く」をテーマに活動する「ジョブジョブクラブ」を引き継ぎ、「ジョブジョブカフェ」を実施した。生徒が自由に話せる雰囲気大切に、本人が語りたいことを語ってもらうように心がけて活動した。その対話の中で、生徒自身が考え行動することをサポートしたり、必要に応じて情報提供も行った。学校生活や進路についての相談や、在学中のアルバイト就労についての相談に対応し、履歴書作成援助や面接対策指導も実施した。早い段階から就労意欲を高め、オープンキャンパスへの参加等、将来に向けてのキャリアプランを考える機会を持つこともできた。

今年度は1人1人個別での活動であったが、複数での活動が実施できれば、他者との関わりの中でさらにコミュニケーション能力、ソーシャルスキルの向上にもつながるのではないかと考えている。



②就職、進学支援の補助

定時制課程昼間部・夜間部では、就職や進学に際しての履歴書指導、面接指導の補助を行った。また、生徒の多様性に応じた働き方について、制度利用の案内や専門機関への橋渡しを行った。制度活用の中で、職業評価等を受けることにより、本人の適性に合った就職先の選定にもつながった。

③就労支援講座「ハッピータイム」の実施

夏季休業中、夜間部の希望生徒を対象に、①仕事は何のためにするの？②仕事（アルバイト）の探し方③履歴書の書き方④面接練習⑤労働法の基礎⑥仕事を続けるため

に必要なことは？ のシリーズで就労支援講座を実施した。興味がある講座に個別に参加できるようにし、複数の生徒が参加したときには、生徒同士の経験、意見交流も行い、働くことに興味関心を持つ機会を提供できた。

④専門機関と連携した取組

多様な支援を必要とする生徒の実情に応じて、徳島地域若者サポートステーション等の関係機関と協力しながら、就労支援に向けた連携体制作りに取り組んだ。

また、個別支援の必要なケースについて、個人面談やケース会議への参加、必要に応じて関係機関とも連携を行い、重層的なサポートが行えるように努めた。

3 成果

ジョブジョブカフェの運営や夏休み中の就労支援講座の実施等を通して、早い段階（低年次）から就労や進路に対する意識を高めることにつなげることができた。また、教職員との連携がよりスムーズにとれるようになった。個別に対応が必要なケースについては、専門機関と連携することで重層的なサポートにつなげることができ、支援体制が充実した。

4 課題

支援相談員が生徒と関わる場面や機会を増やし、より積極的に生徒や教職員と関わって支援していただくことが必要であると同時に、より多面的・重層的な生徒支援へと繋げたい。「ジョブジョブカフェ」の運営についても、周知方法を工夫するなどして参加者を増やし、生徒同士の関わりによるコミュニケーション能力やソーシャルスキルの向上も図っていきたい。

Ⅱ 卒業生追跡調査について

①就労指導

○2年次「就労支援講座」の取組の追跡

- ・マスク必須や自粛生活といったコロナ禍で、インターンシップや会社見学さえままならない状況でした。そんな時に鈴木先生の「進路決定をどうするか」というお話は、とても有意義な時間でした。希望の進路に向けて、勇気がもらえた講座だったと思います。学生時代は、コロナ禍だし、人とできるだけ関わるのを避けてきた私ですが、鈴木先生が社会人として最も大切だとおっしゃったコミュニケーション力を胸に、今日も全力で働いています。【R3年度卒業生】
- ・先生がおっしゃっていた「好きな仕事」と「向いている仕事」は違うという言葉が記憶に残っています。就職して間も無くは、「この仕事は自分に向いていないのかも」と思っていました。でも、簡単に止めてしまうのは良くないと思ったし、一つ一つの経験を自信に変えて、今は、自分の好きな仕事がやれて、満足しています。母校に胸を張って訪ねられるように頑張ります。【R3年度卒業生】

- ・2年次の終わり頃、進学か就職かでまだ迷っていた時、鈴木先生の就労支援講座で「安易な気持ちで進路選択をしてはいけない」という言葉で目が覚め、後悔のない進路選びをしなければと思いました。コロナ禍だったので割と家にこもってのほほんと3年間を過ごし、高校卒業の時点で何も特技のない自分だったので、資格を取るために大学進学を選びました。自分から動かなければ何も変わらない、鈴木先生の就労講座はそのような呼び掛けの内容だったと思います。早や大学の1年が終わろうとしています、散々迷って選んだ大学なので、勉強は嫌いですが、将来のために歯を食いしばって授業にも付いて行き、納得の行く就職をしたいと思います。【R4年度卒業生】

②ソーシャルスキル向上指導

○人形劇団「とくしま中央一座」の取組の追跡

- ・何に対しても引っ込み思案で人見知りだった性格が、とくしま中央一座の活動を通して自分からどんどん何にでもチャレンジして取り組んで行こうとするタイプの人間に変わったと思う。【R3年度卒業生】
- ・中学時代までは、自分の居場所がつかれなくて、高校でやって行けるのか不安だったけど、一座が心の拠り所となってデジタル人形劇を制作できたことは良い思い出になった。【R3年度卒業生】
- ・コロナ禍で外部公演には数カ所しか行けなかったけど、障がい者の方や保育園児と触れ合えたことが、今の私のものの見方や考え方の視野を広げてくれたと思っている。【R4年度卒業生】
- ・自分は他の子と比べて、家庭的に恵まれてないと思ってて、友だちが「人形劇楽しいよ」と誘ってくれたのがきっかけで入部しました。初めの頃は、「こんなことやるのなら、バイトに1時間でも入った方がマシ」と思っていたのですが、やっているうちに楽しくなり、自分という存在が、誰かの役に立つのだということが分かり、身を入れて練習をするようになりました。その成果が公演で拍手となって評価された時、本当に嬉しい気持ちになりました。その感動を胸に、仕事をしている時も日常でも、誰かのお役に立てて、困っている人の助けになれるような自分でありたいという気持ちで生活しています。コロナ禍で外部公演には数カ所しか行けなかったけど、障がい者の方や保育園児と触れ合えたことが、今の私のものの見方や考え方の視野を広げてくれたと思っている。【R4年度卒業生】

○「絵本の世界探究」の取組の追跡

- ・『どろかぶら』『父のかお母のかお』『100万回生きたねこ』、三冊とも強く印象に残っている。人との出会いを良くするのも悪くするのも、自分次第だということがストーリーから読み取れたと記憶している。中学時代まで、自分は結構荒れていて、上手くいかない時は、いつも人のせいにしていた。決してそうではなく、中央に来て、良い先生や信頼できる友だちに出会えて、自分の生き方が変わった。裏切られても、まず人を信じるところから始めようと思った。【R3年度卒業生】

- ・読み手の方たちの体験談や絵本に対するそれぞれの思いを聞いて、心が揺さぶられ、温かい気持ちになった。また、この読み手の方たちが地元の児童館で読み聞かせをしながら、「子ども食堂」もやっていることを新聞記事を読み、感動したし、なかなかできないことだと思った。せめて自分も、絵本を通して、また生き方を通して、感動を伝えられる人になりたいと思った。【R 4 年度卒業生】

○「創作絵本」の取組の追跡

- ・2年前思いがけず、創作絵本を作らせてもらった。予想以上の出来栄で、自分の子どもが生まれた時、読み聞かせをしてあげたいと思って、今も大切にとってある。高校の時、絵本づくりをやって、絵を描くことや形あるものを残すことの楽しさを味わった。そのことが、まさか塗装職人になろうとは、本当にびっくりである。人生何がきっかけになるか分からない。絵本づくりがきっかけで進路も決まったし、そのことが自信につながって、性格も明るくなった気がする。兼好法師ではないが、「あやうこそものぐるほしけれ」である。【R 3 年度卒業生】
- ・表現することの楽しみや出来上がった絵本を持ち寄って品評会や発表会を行ったことが、とても思い出として残っている。今まで話しをしたこともなかった人と絵本作品のことで共感し合ったり、意外性を指摘し合ったり、今までにない授業を体験することが出来た。今は自分の勤め先で販売の仕事をしているけど、ちょっとしたチラシやポップを作るのにも、絵本づくりの経験が役立っていると思うことが多々ある。筆遣いや画材選び、色の選択などアドバイスしてもらったことが大いに役立っている。【R 4 年度卒業生】
- ・こんな授業がしたかったという授業だった。時間を忘れてのめり込んでしまった。あの子が、あんなに絵が上手かったのかという驚きや、あの子が、あんなことを考えていたのかということも面白かったし勉強になった。人は見かけで判断してはいけないと思ったし、自分もそう思われたかも知れない。【R 4 年度卒業生】

考察

4つの取組に対する追跡調査の結果から、人形劇団「とくしま中央一座」の取組についてテキストマイニング（ユーザーローカルAIテキストマイニングによる分析；<https://textmining.userlocal.jp/>）により分析した。その結果を右図の共起キーワードに示す。キーワードのネットワーク（つながり）からは、本取組によって「広げる」ことには、「考え方」「触れあい」が結び付いており、その要因には、「保育園児」「外部」が関連していたことが確認できた。

この分析結果からは、いろいろな施設で人形劇を公演した体験が影響したものと言える。特に、「コロナ禍」とネットワークがあるのは、調査対象になった卒業生の在学年度はコロナ禍にあったことから、数少ない外部公演での体験が強く影響したと考える。

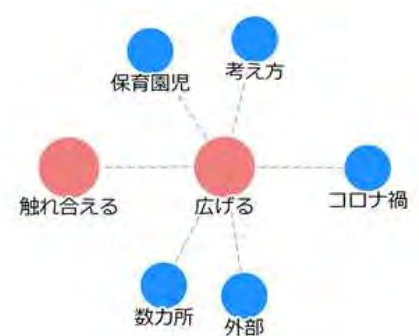


図 共起キーワード

Ⅲ 本事業（３年間）のまとめ

② ソーシャルスキル向上指導

○ 人形劇団「とくしま中央一座」の３年間の取組を振り返って

各年度の目標は、以下の通りであった。

〔令和３年度〕

「総合的な探究／総合的な探究の時間」での人形劇団とくしま中央一座の活動において、ウィズコロナ時代に対応したリモート公演を実施するための ICT 機器を効果的に活用したデジタル人形劇の制作を行い、主体的・対話的で深い学びの体现をめざす。

〔令和４年度〕

「総合的な探究／総合的な探究の時間」及び部活動としての人形劇団とくしま中央一座の活動において、従来の外部公演を再開するとともに、ウィズコロナ時代に対応したリモート公演を実施するための ICT 機器を効果的に活用したデジタル人形劇の制作を行い、主体的・対話的で深い学びの体现をめざす。

〔令和５年度〕

- (1) 人形劇による生産的表現活動による「個別最適な学び」と「協働的な学び」とを一体的に充実させる効果的なカリキュラムと指導体制を構築する。
- (2) コロナ禍収束後、外部公演先を確保するための外部機関との連携を再構築する。
- (3) ウェルビーイング及び NVC (Nonviolent Communication = 非暴力コミュニケーション) を視座とした生徒のより一層の主体的な活動の活性化を図ろうと、シェアリング法によるグループワークを展開する。

各年度の取組内容は、以下の通りであった。

〔令和３年度〕

この年度は、コロナ禍真っ只中であったため、外部公演がままならず、練習も感染状況の様子見で活動日が制限されたこともあり、上演は本校の文化祭でのビデオ上演会のみであった。一方、デジタル人形劇の作品づくりは、制作時間が確保できたこともあり、三本の質の高いオリジナル作品を完成させることができた。「コロナ禍でもできることをしていく」

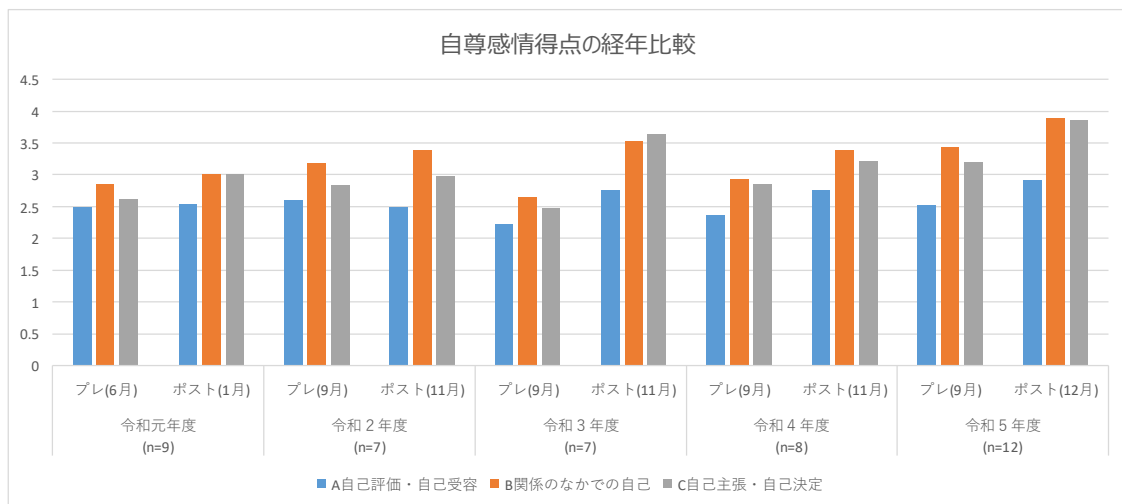
という共通認識を持ち、メンバーたちは果敢なまでに動画制作に挑戦し、打ち込んでいく姿は、確かに青春の 1 ページを刻み、混沌とした課題が渦巻く現代のデジタル社会に対して、ICT 機器を利活用するスキルを磨き、既に到来している A I 時代に活躍できる能力をも培ってくれた。

〔令和 4 年度〕

この年度は、コロナ禍の規制もやや緩和されたことから、外部公演が小規模で再開され、リアルとバーチャルの両面での活動を行った。しかし、公演依頼は少なく、とらまるパペットランドの研修や芸術的アトラクションの体験に出向くなど、研修活動を充実させた。

〔令和 5 年度〕

本年度は、コロナ禍の規制が解除され、外部公演の依頼が殺到し、「いいだ人形劇フェスタ」（長野県飯田市）を含む 8 カ所で公演を実施した。その合間に、デジタル人形劇の制作にも取り組んだ。取組内容は、別稿の通りである。

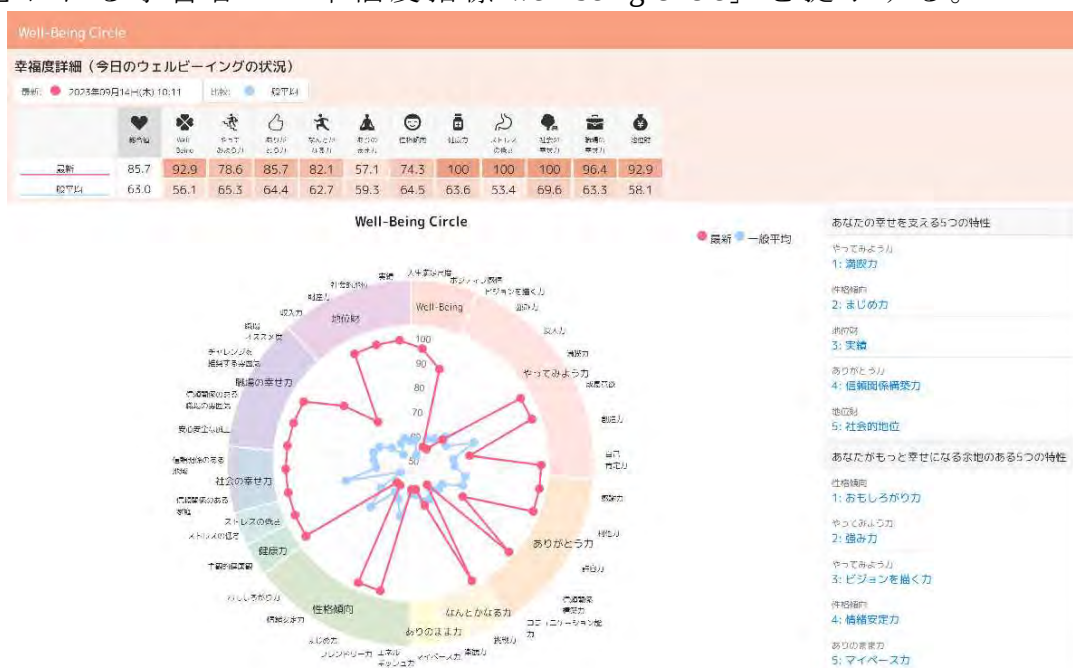


上記は、令和時代に入って以降の各年度の「自己肯定感」「自己有用性」の数値を棒グラフに表したものである。

本事業の 3 年間はコロナ禍の情勢となり、令和 3・4 年度は、命を守ること、感染拡大を防ぐことが最優先とされる社会状況下で、3 密を回避し、出来得る形態で活動を継続させることに躍起になった 2 年間であった。生徒たちは、知恵を絞り、リアルな舞台からバーチャルな世界へと舞台を移し、通常の舞台では表現しえないファンタジックな作品を、仲間と共に完成させて行った。この 2 年間は、メンバーの入れ替わりが殆どなく、意思の疎通が図れ、顧問との間では、1 を知れば 10 を知るという関係にあったのが、何よりの利点であった。また、学習者の多くが

コロナ禍により暮らしそのものが困窮し、家計の担い手としてアルバイトに追われるという日常が横たわっていたが、寸暇を見つけてはデジタル人形劇の制作や舞台練習に励み、人形劇の活動そのものを生活の糧とした。その充実感や達成感が取組前と取組後の数値に表れたと考える。本年度は、「B 関係性のなかでの自己」及び「C 自己主張・自己決定」の数値が飛躍的に上昇したのは、さまざまな場所へ出向き、いろいろな立場の初めて出会う人々と、自分たちが演じる人形劇を通して楽しい時間を共有できたことが、回数を重ねるごとにウェルビーイングなひとときの体感につながったのであろう。

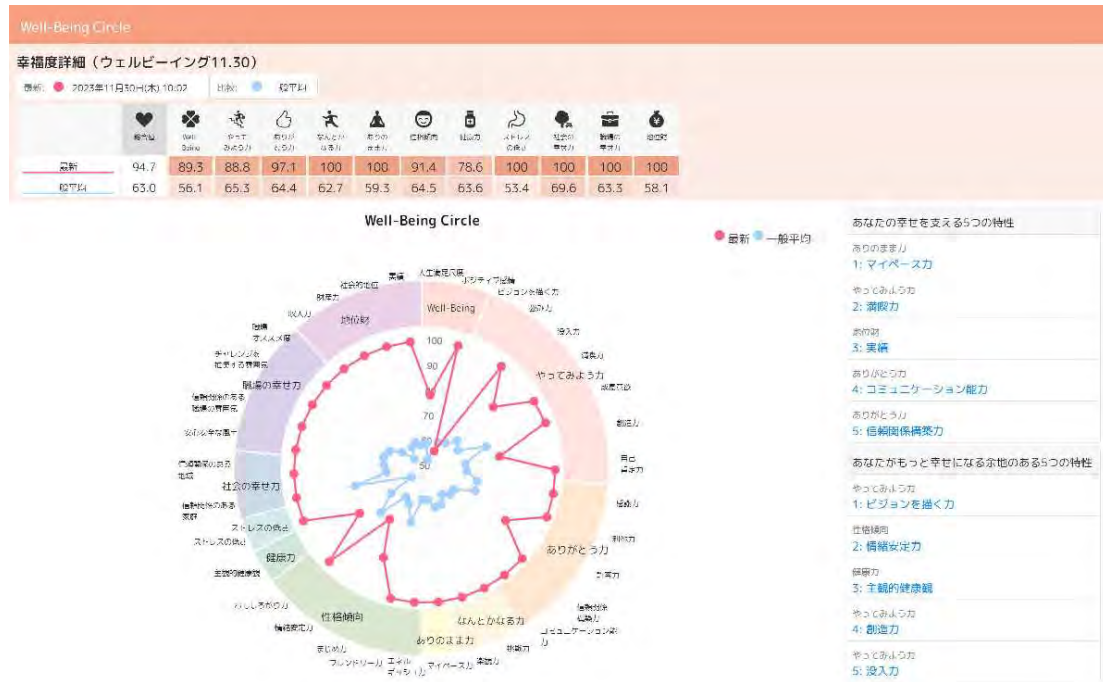
下記は本年度、顧問から見てメンバーの中で一番成長が著しかったと思われる学習者の「幸福度指標 well-being-circle」を提示する。



9月19日採取の時点では、かなり凸凹感のあるグラフとなっていた。3年次生で受験を控え、自信の無さや将来への不安となって表れたように見える。けれども、成長意欲は旺盛であったし、何よりも他者との信頼関係面や健康面が最高数値に達し、日常生活が学校生活を中心に充実していたことが分かる。家計を助けるためにアルバイトを週6連勤したり、その狭間で人形劇の公演に出向いたり、学習者なりに忙しい毎日を過ごしていたはずであるが、胸中はウェルビーイングで満たされていたことが窺える。

一方、下記、11月30日採取の時点では、未だ進路が未定であったため、「ビジョンを描く力」「情緒安定力」が低値ではあるが、全体的には凸凹感が解消されており、「主観的健康観」が下がったのは、インフルエンザ

に罹患したためである。



このように、もともと学習者は2回の採取とも総合的に高値となっているが、文化祭以後、外部公演がシーズン入りして後の学習者の意欲や態度の良さは目を見張るものがあった。常にメンバーのことを気遣い、有益な提案をしてくれ、全体を見渡して「今、自分は何をすべきか」を考えられる、ムードメーカーであり、良きチェック役でもあった。一度に何役もこなす抜群の器用さ、機転の利く発想力、謙虚さ、他者への思いやり、ふれあう人々に対する感謝の念、それらが身に染みて顧問の目頭が熱くなることもあった。

このような学習者の出会いこそ、教師冥利に尽きると感ずる。教育とは、互いに教え教えられ、育って行くものだ、と、本事業を取り組んで悟ることができた。

○「絵本の世界探究」授業の2年間の取組を振り返って

各年度の目標は、以下の通りであった。

[令和4・5年度]

昨年度は2年次「国語総合」科目で、本年度は、2年次「現代の国語」科目において名作絵本に触れることで情操を豊かにし、自尊感情や自己有用感を高め、読書活動に親しむ態度を育成する。その中で、絵本作品

について、テーマ・内容・登場人物・作者の思い等々をワークシートに記入させ、生徒の「感動」「気づき」「共鳴」を中心にフィードバックすることにより、絵本の世界を深く読み味わうとともに、物語作中に登場する主人公の生き方や考え方に思いを馳せさせ、生徒一人一人が自らの人生を豊かに生きようとする活力や優しさを養う契機となればと考え、本校とつながりのあるコミュニティを活用した取組を実施した。

各年度の取組内容は、以下の通りであった。

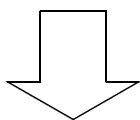
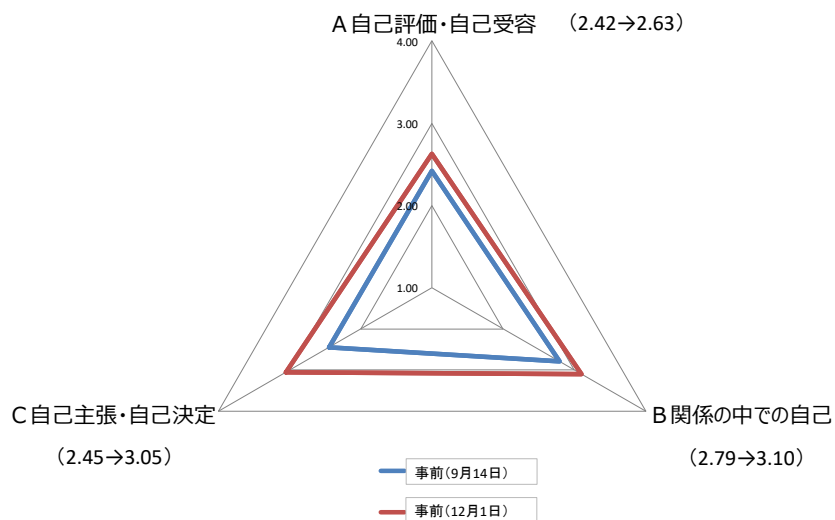
前年度及び本年度とも計画の段階で、読み聞かせボランティアグループの読み手の代表と、綿密な打ち合わせを行い、生徒たちの読書体験を積み重ねる取組を通して、「聞く」「書く」「話す」といった言語感覚を養うことや、物語や作中の登場人物の生き方に感動を覚えることで、自尊感情を高め、自己有用感を養うとともに、自発的に自らの意見が言える「思考力」「判断力」「表現力」を高めることに繋がりたいと考え、計画を練ってきた。

また、絵本による「読み聞かせ授業」を実施するだけでなく、取り上げた絵本作品のストーリーやテーマ、主人公やその他の登場人物の生き方や考え方についてじっくりと読み味わい、作品世界を探究させることを生徒たちに試みさせ、ワークシートをもとに作品理解及びテーマへの考察を課した授業を展開することにした。取組の詳細については、別稿の通りである。

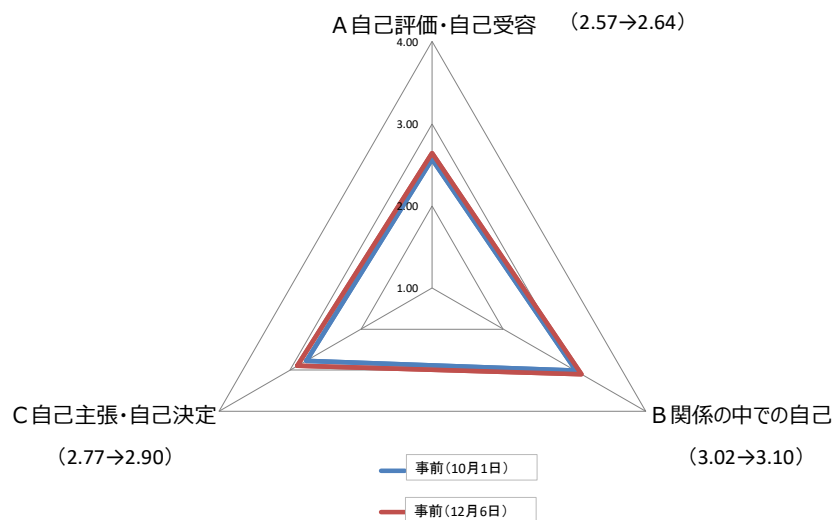
更に本年度、授業の高度化を図ろうと工夫をした点は、別稿でも記してはいるが、昨今の殺伐とした時代に必要な楽観性や社会的幸福感、将来への展望、社会をよくして行きたいという利他性を図る中で、各々が「どう生きるべきか」を考えさせること。そして、「自分はこう生きたい」という個に応じた次世代のニーズを明確に持たせて行くこと。学習者自らがそのことをとても重要であると考え、絵本の力と読み手の力を借りながら、「個別最適な学び」へと一人一人の学習者が到達できるようにと、読み聞かせの実技指導や読み手からのアプローチを含めたフィードバック等、興味、感情、知的好奇心を誘発し、授業者も読み手も学習者も、三位一体の深い学びが体感できるような活動となることを試みが、その際、あくまでも生徒が主体となる時間になることを第一に考え授業展開に細心の配慮を尽くした。

《自尊感情測定アンケートの２年間の比較》

自尊感情尺度測定（2022/09/14 → 2022/12/01 集団測定値）



自己肯定感尺度測定（2023/10/01 → 2023/12/06 集団測定値）



上記は、前年度（R4）と本年度（R5）との比較グラフとなるが、3 観点とも上昇幅は本年度より昨年度の方が高くなっている。いずれの観点も、前年度より本年度の方が、事前アンケートは初期数値が高かったものの、事後アンケートの伸びが小さく、前年度の方が飛躍的に数値を伸ばした。

その要因を考察するに、ワークシートを比較すると、書き込みの文字数が本年度より前年度の方が圧倒的に多く書き込まれており、その文章の内容も読みの深さに歴然とした差異があった。本年度のワークシートの文面は、前年度のそれより語彙力の乏しさや表現力の稚拙さが読み取れなくもない。

では、より授業の高度化を図った本年度の取組は無意味であったのだろうか。従来のシンプルな絵本の読み聞かせ授業の方が、学習者の感性に絵本の言葉やテーマが浸透し、深い学びに達することができるのであろうか。否、前年度の絵本の世界探究授業はワークシートの記述時間を 10 分から 15 分程度確保できていたが、本年度は絵本の読み方指導や読み手の講師からのフィードバックや交流の時間を設けていたため、ワークシートへの記述時間が 5 分程度と、極端に「書く」という作業に当たる時間が少なかったともいえる。

文部科学省の学習指導要領「現代の国語」科目における目標は、『(1)実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。(2)論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。(3)言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。』とある。

本事業の取組で言えば、特に(2)及び(3)の資質・能力の育成を目指すということである。したがって、このような力を育成して、生徒が自分の思いや考えを広げたり深めたりすることを目指しているという点で、その趣旨に沿った確かな取組であったと言えるであろう。次年度以降、試行錯誤、創意工夫を重ねながら、本事業で培い学び得た探究活動を続けて参りたい。

○「創作絵本」授業の３年間の取組を振り返って

〔令和３年度から令和５年度〕

絵本の創作に向けた絵画技能の向上と質の高い構成をめざし、世界に一つしかないオリジナル絵本を完成させ、ICT機器を活用したプレゼンテーションを行い、創作絵本が完成した喜びを分かち合うとともに、各々の世界観を発表し合うことでそれぞれが新しい価値観と出会う学び合いの契機にしたいと考えた。５年前から創作絵本づくりは実施しているが、従来の創作絵本と違うところは、一昨年度から導入された生徒一人一台端末を活用したデジタル絵本の作成を試み、クリエイティブな活動を通してウェルビーイング（協調的幸福感）な価値観の導入を試み、ポジティブな思考を基盤とした自己理解・自己管理能力及び意思決定能力と、延いては豊かな人間性の育成を図ろうと授業の高度化を図ってきた点である。

(1) 調査研究の対象及び研究方法

・定時制昼間部現代文Ｂ選択者

国語科「現代文Ｂ」科目における「創作絵本」授業とその完成作品を活用した読み聞かせ実習（上演会）を行う。

・調査研究の方法

ア 創作絵本授業の前後に、「自尊感情尺度」を測定するアンケートを実施する。

イ モチーフとなる題材の探索及び探求したいテーマの設定。

ウ イラストレーター講師による専門的な絵画指導と個々の生徒における描画方法の探究。

エ 「自尊感情尺度」測定値から見えた生徒の変容と創作絵本に顕れた生徒の「気づき」等を国語科担当者（授業者）が分析を行い、「多様性に応じた新時代の学び」に関する成果と課題について明らかにする。

(2) 創作絵本の行程

① テーマ・キャラクターを決めて後、構成・あらすじを考えて書く。

② プロット（骨組み・構成）を考える。

③ ラフ画を描いた後、画材を選ぶ。

④ 下書きを描いて、本描きに移る。

⑤ 仕上げを行う。

⑥ 仕上がった作品をスキャンニングし、音声入力を行い、動画にする。

⑦タブレット端末を使ったプレゼンテーションを行う。

⑧指導者・講師からの講評を聞く。

(3) 自己理解・自己管理能力はどう育成されたか

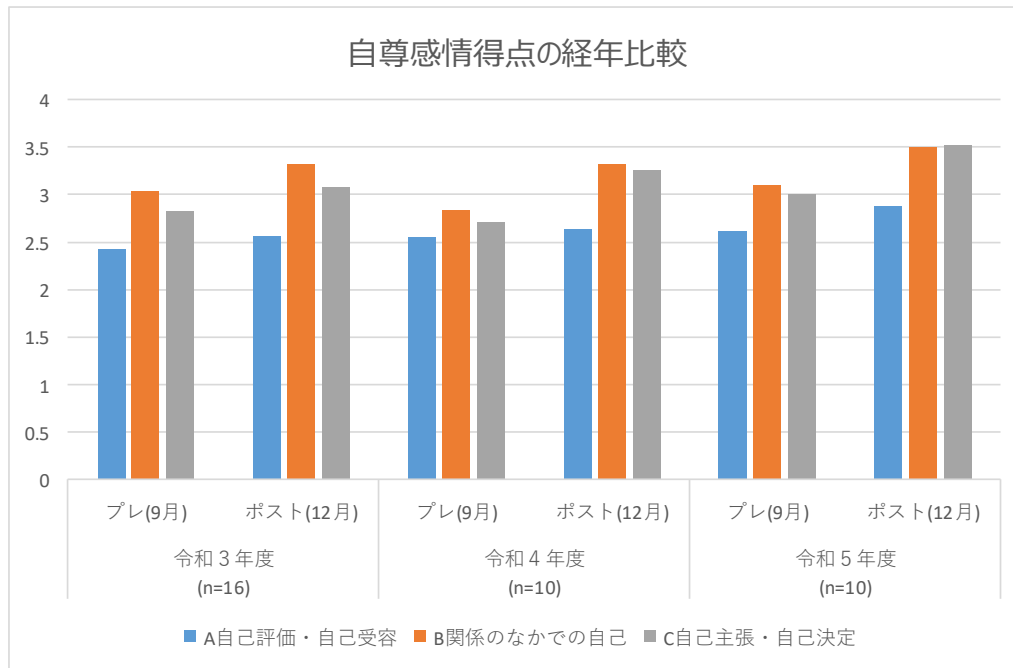
①完成度の高い創作絵本作品の完成

学習者たちは、試行錯誤、創意工夫の末、それぞれが良質の創作絵本を仕上げた。限られた時間で構想を練り、テーマ・画材・構図・ストーリー構成を経ての作画や言葉（セリフ）の描き入れまで、スムーズに熟していた。自身の感情の高まりとストーリーの展開がうねりとなって抑揚を創り、ポジティブな可笑し味やロマンチックな感動に誘う作品群が生まれた。その一冊一冊は、正に「世界で一冊の自分にしか表現できないオリジナル絵本」として学習者にとって価値のあるものに仕上がったのではないかと考える。

②創作のプロセス及び完成作品にみる潜在的な能力と心理状態

3年間を通じた学習者たちの作風は、いずれの作品も外連味のない高校生ならではの表現内容であったと考える。詳細については、年度毎の報告資料(別稿)で記載した通りであるが、上述の(2)の手順を忠実に守り、制作作業を進めて行き、学習者たちが日頃から興味関心のある、明るく他愛のない日常や身近なトピックが描かれており、中でも、『おさんぽびより』『こころのしゅうりやさん』『深愛』『星にあう少年』は、印象深い作品として記憶に残るものである。学習者たちはそれぞれの創作が仕上がった瞬間、自らのクリエイティブな活動を通して、達成感やウェルビーイングを感じ得たことは、察して余りあるものがあつた。その過程で、ポジティブな思考を育て、自身の能力を認知し、意思決定を探究した延長線上に、穏やかな心持ちで実り豊かな作品の完成と人間性や個性の伸長を遂げることを可能にして行つたと考える。

《自尊感情尺度測定アンケートの3年間の比較》



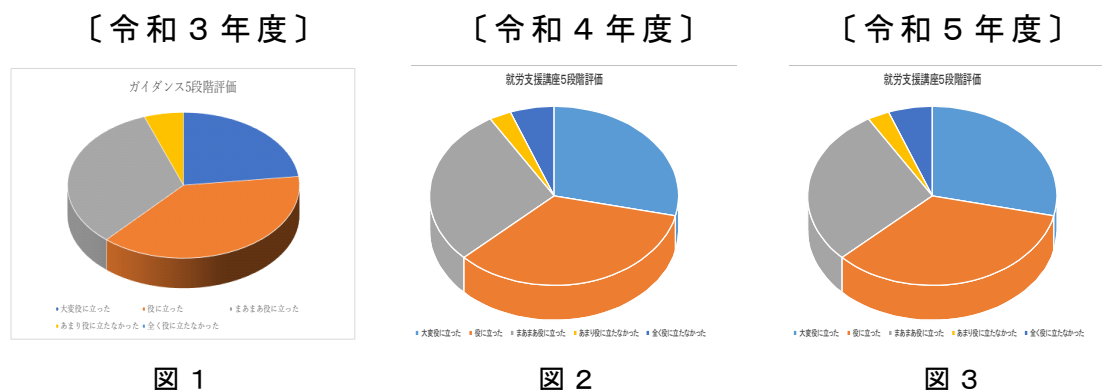
また、上記は本指定事業3年間の自尊感情尺度を比較したグラフである。年度々々で一様に実施前の測定値より、実施後の測定値の方が「A 自己評価・自己受容」「B 関係のなかでの自己」「C 自己主張・自己決定」の3観点とも集団測定値として高値となった。殊に、本年度は実施後の数値が最も高くなり、その理由を考察すると、とくしま中央一座の人形劇に取り組んだメンバーが10名中4名いた影響も少なからずあったと思われる。別稿、「とくしま中央一座の取組」で記述した通り、上記の自尊感情尺度が人形劇に取り組んだ4名の学習者が平均値を押し上げる結果を生んでいる。特に本年度の取組実施後では、「B 関係のなかでの自己」の観点が3.89、「C 自己主張・自己決定」の観点が3.86と高値となっており、その数値がそのまま創作絵本授業でもほぼ同数値で記録されたためである。

いずれにしても、表現活動が自尊感情を高め、殊にその表現活動の中で他者と関わり、そのことが、より良いコミュニケーションをとるための訓練となり、自己を表現することが喜びや癒しをもたらし、メタ認知が促され、総じては人間力としてのソーシャルスキルを培うこととなる。そのことが表現活動によって実証されたといえる。

○「就労指導」による就労支援講座の3年間の取組を振り返って

一昨年度より、キッズコーポレーションの鈴木毅講師に依頼をした「就労支援講座」は、2年次の生徒に対して、卒業年度を迎える直前に進路実現を果たして行くための方略や対策を指南いただく契機と成り得たと考える。

受講した生徒の経年の「満足度」は以下の通りである。



講座内容は、別稿の通り少しずつ違うが、鈴木講師は丹念にわかりやすく、進路選択、進路決定、進路実現に至るプロセスを2年次の生徒たちに伝えてくれた。学歴による生涯賃金の差異、上級学校の校種別の特色やカリキュラムや学習内容の違い、「長い人生のために、今、教育を受けている」ということ等々、生徒たちにとって有益な情報を得ることができ、それぞれの進路へと向かう重要な意識付けが行えたと考える。

2) 徳島県立徳島中央高等学校定時制課程（夜間部）

I 取組の内容

①就労指導

1 目的・ねらい

職業に従事することを目標とし、ICTを活用して各職種に必要とされる基礎的、基本的な知識と技術について理解させ、正しい勤労観、職業観を育成する。また、すでに就業している生徒も、他職種の体験を通して、より深い自己理解や能力開発を図る機会とする。さらに、企業と学校との連携を強化し、生徒の就業の実現を図る。

2 内容

学校設定科目「職業」は、各ホームルームに複数名の教員が関わり、1年次に「職業基礎 A」（1単位）、2年次に「職業基礎 B」（1単位）を学習している。2年間にわたる学習によって 社会人・職業人としての基礎を連続的に身に付けられるよう指導している。「職業」を履修する生徒全員が「夜間部カフェ」（学校購買部）で商品の販売や管理を輪番制とし担当することで、コミュニケーションを図ったり、実務実習となる場を提供している。また、ICTを活用して、様々な職業研究をしたり、ハローワークの情報を検索して就労体験先を探し、実習につなげる。

「職業基礎 B」は、「職業基礎 A」で学習した内容の定着を図るため、実践的な学習を中心に構成される。ICTを活用した実習的な学習や、ロールプレイを含む実技指導及びプレゼンテーション、外部講師を招いての全体学習、就業体験を通して実際の職場で求められるスキルやマナーを身につけさせる。また、「職業基礎 B」の実践から「職業基礎 A」の内容を見直し、修正を加え、より一層実践的な授業へ改善する。

3 取組

①就業体験に関する内容

企業研究・企業訪問の心得・勤務中の態度・就業体験・お礼状作成
・体験発表

②職場で求められる ICT スキルに関する内容

ビジネス文書作成の基礎（エクセル・ワード・パワーポイント）・グーグル等の検索エンジンを用いた検索・ズーム等を用いた遠隔コミュニケーション

③就職活動に関する内容

デジタル進路ガイドブックの活用（就職活動の概要・自己分析・履歴書作成・面接練習）

④外部講師招聘

毎年、中小企業家同友会から5～8名の社長（建設業、小売業、サービス業など）の講師を迎え、毎回違ったテーマで班別グループ討論やディスカッションを実施した。テーマとしては、「仕事を通して大切にしていること」や「働く喜びや意義」、「求められる人材」といった題材を取り上げ、生徒のやる気やチャレンジしたい気持ちを応援できるよう工夫した。講演会のアンケート結果は、毎回参加生徒の90%以上から、「満足のいく内容であった」という回答があった。しかし中には、いろいろな人と意見交換をしたり、全体の前で発表をすることに対する懸念から、参加自身を回避する生徒もいた。参加した生徒は、様々な業種の社長の方々と意見交換できたことで、自己肯定感が上がり、働くことや新しい仕事に対して前向きになれた様子が見られた。3～4年間で夜間部に通った後、就職を目指す生徒たちにとって、このように企業の方々から直接体験談や意見を伺い、自分の意見を述べる機会はとても貴重であり、充実した研修の機会となった。



⑤評価

社会人・職業人としての基礎を学ぶ学校設定教科「職業」を履修している生徒は、令和5年度ではその80%が「社会に出たらここで得た知識は役に立つ」、「マナーや一般常識を学ぶよい機会である」と捉えており、うち13%の生徒が「学習内容を様々な生活面において応用している」と答えた。また履修生徒の90%が真面目に取り組んでおり、うち33%の生徒が自分の進路に関連付けて積極的に取り組んでいると答え、年々生徒の意識が高まっていることが裏付けられた。

4 成果

今年度「職業基礎 A」を選択した生徒のうち、27%の生徒が新たにアルバイトなどの仕事を始めるようになった。3年間にわたって続いた新型コロナウイルスの影響も収まる中で、企業見学や職業体験・マッチングに参加するよう積極的に生徒へ働きかけたものの、実際に足を運んだ生徒は、全体の27%にとどまった。令和5年度の卒業予定者は9名であるが、就職した生徒は、就労継続支援A型が1名のみという状況で、B型を希望する生徒が1名、進学は0名、3名がアルバイト継続、残りの4名はどこにも行く予定なしという現状である。人的交流の機会やICTを活用した職業探求の機会を持っても、働くことに対する興味・関心を広げることことの難しさを感じさせる結果となった。中小企業家同友会との討論会に触発されて、新しい職場で働いてみたいと意欲が高まった生徒が、討論会后に担当者と連絡先交換をする場面も見られたが、実際の就労には至っていない。就職への道は険しいが、生徒がさまざまな就労に関する情報を得たり、新しい人や仕事と出会う機会を絶えず提供することは、大切な学校の役割であると考えている。

5 今後の課題

今年度は、新型コロナウイルス感染の影響がようやく収まりつつあったが、入学時以降ずっとコロナの影響下にある高校生活を過ごしてきたせいか、実際に企業見学や職業体験に参加した生徒数は伸びなかった。そもそも外に出にくい性分の生徒が、さらに引きこもった感を否めない状況になったため、今後は生徒が外の人と交流する機会をこれまで以上に増やし、実際の職場を見学したり、担当者と話をさせて頂くことが、重要であると思われる。生徒に自分が働くイメージを与える良い機会を確保し、これからもできるだけそのような機会を提供していく必要があると考えられる。次年度以降も、生徒の特性やニーズを理解した上で、このような機会を継続的に生徒に与え、生徒の就業意欲を高めるきっかけとしたい。

② ソーシャルスキル向上指導

1 目的・ねらい

本校の生徒には人間関係をうまく構築することが苦手な生徒が少なからずおり、その背景には、自己肯定感が低く自己を認識することや他者の心情を適切に推測することができないという特徴がある。本校ではこ

れまで「絵本の読み聞かせ」の体験を通して生徒の自己肯定感を高める取組を行い、一定の成果を得てきた。読み聞かせの体験をすることは子どもの感受性を豊かにしたり、想像力を高めたりする効果があり、読み手から聞き手に対して好感情を伝達する良い手段であるともされている。

今年度も昨年度、一昨年度と同じく「絵本の読み聞かせ」に加えて「創作絵本の作成と発表」を行うこととした。「絵本の読み聞かせ」授業を受ける中で、他者の心情を適切に推測する能力を身につけ、穏やかな気持ちで自分自身を見つめる機会とすることによって自己肯定感を高め、さらに「創作絵本の作成と発表」授業によって、自己の内面を見つめ、自己表現することの楽しさを知り、他者との肯定的な意見交換の中でさらに自己肯定感を醸成することをねらいとする。また、生徒が持つタブレット端末を活用して絵本をデジタルデータ化することで、互いに作品を共有したり、遠方の読者にも作品を届けたりすることができないか話し合わせることで、自己表現の幅が広がっていく可能性も感じさせたい。

2 内容

本年度は夜間部一年生の「現代の国語」の授業内で「絵本の読み聞かせ」を実施した。読み聞かせの講師は「とくしまお話を語る会」の三木鈴江氏と宇田智子氏に依頼した。また「創作絵本の作成と発表」については、上記の「現代の国語」履修者を対象に、国語科の取組として実施した。絵本作成の講師は本校定時制昼間部卒業生であるイラストレーターの鍛冶貴裕氏に依頼した。絵本のデジタルデータ化には生徒が持つ個人用タブレット端末のカメラを利用した。

3 取組

【日程】

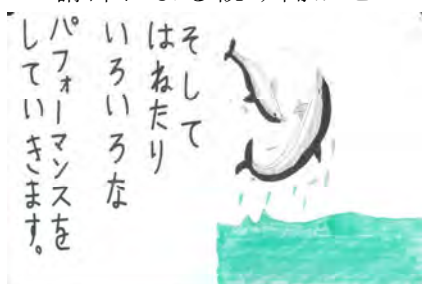
回	月日	指導者	内容
1	10月23日	「とくしまお話を語る会」 三木 鈴江 氏 宇田 智子 氏	絵本の読み聞かせ 傾聴と実践
2	10月25日	「とくしまお話を語る会」 三木 鈴江 氏 宇田 智子 氏	絵本の読み聞かせ 傾聴と実践
3	10月30日	鍛冶 貴裕 氏	絵本作成（1） テーマ決定 キャラクター作成
4	11月1日	鍛冶 貴裕 氏	絵本作成（2） ラフ画作成・下描き

5	11月8日	鍛冶 貴裕 氏	絵本作成（3） ラフ画作成・下描き
6	11月13日	鍛冶 貴裕 氏	絵本作成（4） 本描き・仕上げ
7	11月15日	鍛冶 貴裕 氏	絵本のデジタル化 タブレットのカメラで絵本を 撮影しデジタルデータ化
8	11月22日	多田 晋太郎	絵本発表会 絵本を読んで感想を述べあう

【授業風景】



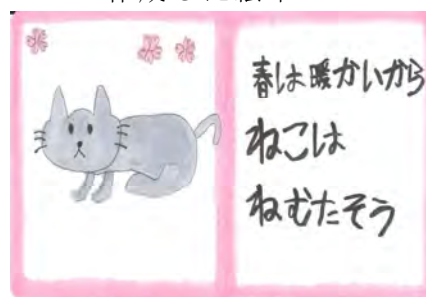
講師による読み聞かせ



作成した絵本 2



作成した絵本 1



作成した絵本 3



作成した絵本の読み聞かせ 1



作成した絵本の読み聞かせ 2

第1回、第2回の「絵本の読み聞かせ」授業では、講師の先生方の指導もあり、生徒一人一人が積極的に絵本の読み聞かせに挑戦することができていた。最初は緊張していた生徒も、教室内に流れる穏やかな空気の中で、リラックスして自分らしい表現をしていた。

第3回から第6回は「創作絵本の作成」の授業を行った。例年より絵が得意な生徒が少ない学年ではあったが、読み聞かせの授業で読んだ絵

本や、上級生が作った絵本をお手本にしながら、少しずつ自分の絵本を仕上げていった。愛らしいキャラクターが多く生み出され、生徒それぞれの気持ちや人生観を代弁しているかのようなだった。

第7回の授業では、それぞれが作成した絵本を生徒個人用タブレット端末のカメラで撮影し、デジタルデータ化した。各絵本は最終的に生徒個人が持ち帰るので、データの形で絵本をアーカイブ化し、次年度の生徒のために残すことを目的とした。

第8回の授業は「絵本の発表」を行った。前年までは、本校生徒の性質を考慮し、絵本を回し読みして感想を付箋で伝え合う形式で行っていたが、今年度は生徒一人一人が教壇に立ち、自ら作成した絵本を朗読した。どの生徒も緊張していたが、他の生徒からの応援を受けて朗読した。感想を付箋で伝え合う形式は前年度を踏襲したが、今年度も付箋には「絵が上手い」「おもしろい」など肯定的な感想が並んだ。

4 成果

本年度も昨年度に引き続き、ループリック(最終ページ)を用いて生徒の変容を確認した。評価項目は「読書について」「興味・関心について」「コミュニケーション能力について」「授業への参加・積極性」の4項目である。それぞれの項目を5段階で自己評価して数値で表し、生徒の変容を定量的に読み取ることが目的だった。

どの項目も1ポイントほど有意な変容が見られた。「読書について」は1.2ポイント、「興味・関心について」は1.1ポイント上昇した。普段あまり本に親しんでいない生徒も、今回の授業を通して親しみを持ったようだった。また、どの生徒も絵本作成に積極的に関わり、作業中は教室の至る所で他の生徒や教員とのコミュニケーションが生まれていたことは特筆に値する点だった。生徒の感想の中にあった「あまり話したことがない他の子の心の中が少し分かった気がした」という言葉は、本取組のねらいが達成されているという証明になるのではないかと感じた。

この三年間の取組を通して、「絵本の読み聞かせ」と「創作絵本の作成と発表」は、生徒のソーシャルスキル向上に大きく寄与していると感じた。取組の対象となる夜間部一年生の生徒は、年毎にまったく別の個性を持った集団だが、どの年度の生徒も取組の前後で授業への積極性や、他の生徒とのコミュニケーションに対する意欲が高まっている印象を受けた。また、進級した生徒から「今年も絵本の授業をやりたい」という声を聞くことも多く、訪問した卒業生からも「絵本の授業は印象に残っている」という声を聞くことが度々あった。

5 課題

課題は二点ある。一つはICTの活用方法である。「絵本の読み聞かせ」と「創作絵本の作成と発表」はどちらもアナログな取組であり、同時にアナログであることが取組の大きな特徴となっている。読み聞かせを通じた人と人との触れ合いや、実際に色鉛筆やクレヨンを手にして絵本を作り上げることは、生徒の感情を揺さぶる非常に重要な要素となっている。現在は絵本をデジタル化することにICTを活用しているが、今後それ以上にICTを活用するにはどうすればよいかを考える必要がある。もう一つは指導者の問題である。本年度は授業時間の関係から、本校で教鞭を執る美術教員から指導を受けることが叶わなかった。昼間部卒業生のイラストレーターである鍛冶貴裕氏を講師として招聘することができたが、今後も取組を続けるならば、講師の問題は考慮すべき問題であると感じた。もっとよいものを作りたいという生徒の思いに応えられるような指導をしていかなければならない。

読み聞かせ・絵本作りの授業 アンケート（令和5年度）

それぞれの質問について、1～5の中から自分に当てはまるものを選び、回答らん に数字で答えてください。
※読み聞かせの授業を受ける前と、受けた後の二つ回答らんがあるので、両方とも答えてください。

回答らん

	5	4	3	2	1	読み聞かせの授業を受ける前	読み聞かせの授業を受けた後
読書について	授業を通して本への興味が広がり、好きなジャンルだけでなくいろいろな本を読んでいる。 (様々なジャンルの本を読む)	読み聞かせ・絵本作りの授業を受け、マンガや絵本以外の本も読んでみたいと思った。 (マンガや絵本以外の本も読む)	読み聞かせ・絵本作りの授業を受け、絵本に興味をわいてきた。 (絵本への興味がある)	機会があれば、絵本やマンガを読みたいと思う。	小説やエッセイ、絵本以外にマンガも読むことがない。	3.6	4.8
興味・関心について	授業を楽しく受けることができ、登場人物の気持ちに共感したり、自分の生活と結びつけて考えたりすることができた。 (本を読んで自分の生活に生かすことができる)	読み聞かせ・絵本作りの授業を楽しく受けることができ、好きな場面など自分なりの感想をもつことができた。 (本を読んで自分の感想をもつことができる)	読み聞かせ・絵本作りの授業を楽しく受けることができた。 (読み聞かせ・絵本作りに興味がある)	読み聞かせ・絵本作りの授業をまあまあ楽しく受けることができた。 (読み聞かせ・絵本作りに少し興味がある)	読み聞かせ・絵本作りの授業は退屈であった。 (読み聞かせ・絵本作りに興味がない)	2.7	3.8
コミュニケーション能力について	聞いた話から感じたことを誰かに伝えたり、作業中に困ったことを周囲に伝えたりすることができる。	授業の聞きかたや話を聞き、自分が楽しんでいることを態度で伝えたり、求められれば感想を述べたりできる。(拍手を送る、質問に答える)	授業の間、顔を上げて講師や先生の話を楽しんだり聞くことができた。	先生に起こされたり注意をされたりすれば、授業の間講師や先生の話聞くことができた。	授業の邪魔をしたり、または講師または先生の話聞いていなかったり寝てしまったりした。	3.7	4.4
授業への参加・積極性	自分から行動し積極的に活動(授業)に参加することができ、周りの生徒とも協力することができた。	自分から行動し、積極的に活動(授業)に参加することができた。	積極的にではないが、活動(授業)に参加することができた。	先生から促されたり話しかけられたりすれば活動(授業)に参加することができた。	ほとんど活動(授業)に参加をしなかった。	3.2	4.2

③学力向上指導

1 目的・ねらい

本校夜間部に在籍している生徒の多くは、小学校・中学校時代に不登校や引きこもりを経験している。そのため、学び直しによる基礎学力定着やコミュニケーション能力の向上を目指す教育を実践している。

夜間部の学力向上支援のねらいとして、一つ目は基礎学力の向上を目指すことである。高等学校の学習内容を理解するために必要な学力を定着させるとともに、一般常識や人間関係を築く力等の社会生活をしていくために必要な力を養い、自ら学ぶ態度を育てることを目標とする。二つ目は義務教育段階の学習内容の再学習（学び直し）を行うことである。様々な原因により小学校・中学校での学習内容を身に付けることができていない生徒に対し、高等学校の学習内容の理解に必要な基礎学力の定着と並行して行う。三つ目は教員以外の大人と学習する機会を設けることである。多様な人との交流やコミュニケーションを通して人間関係を広げ、将来の進路実現につなげていく。また自分の将来像を考える契機にもなり、学習意欲や勉強に向かう意識向上を図ることに結びつける。

2 内容

小学校・中学校で学習する国語、数学の内容を学び直しする学校設定教科「マルチ基礎」や「総合的な探究の時間」、放課後における自主学習時間において生徒一人一人の実態に応じた学力向上支援を行った。特に「マルチ基礎」及び「総合的な探究の時間」の授業では、教科担任と一緒に鳴門教育大学臨床心理士養成コースの大学院生が一人一人の生徒に寄り添いながら学習支援を行った。また、支援相談員には放課後や夏季休業中に面談や進路指導をお願いし、学力向上と進路実現のトータルサポートを行った。

3 取組

学校設定教科「マルチ基礎」は、木曜日3限目（1単位）に科目「マルチ基礎Ⅰ」「マルチ基礎Ⅱ」「マルチ基礎Ⅲ」として1年次から3年次の生徒を対象にホームルーム主体での授業となっている。各ホームルームに複数名の担当教師と将来臨床心理士を目指している鳴門教育大学大学院生複数名が教室に入り学習支援を行った。各ホームルームの生徒は学習の習得状況が様々であり、1対1で学習支援を行う場合もあれば、1名の指導者が複数名の生徒の学習支援を行う場合もある。実践している学習支援で気をつけていることは、できないことの再確認するのではなく、「自分の力でできること」の実感と「教えてもらってできるようになること」の達成感や成就感を生徒に経験してもらうことである。さらに、小学校・中学校で理解できなかった内容については、分かりやすく寄り添った学習支援をしながら理解を深めるよう工夫した。

また令和3年度はオンラインでの実施だったが、令和4年度・5年度は3月に鳴門教育大学臨床心理士養成コースの大学院生と対面でパワーポイント

トを使ってクイズをするなど、生徒参加型の交流会を実施した。



4 成果

学校設定教科「マルチ基礎」及び「総合的な探究の時間」で学習支援を行うことで、教科担任に加えて比較的年齢の近い大学院生と一緒に参加し、ほどよい距離でコミュニケーションを取りながら授業を進めることができた。1対1に近い形で指導するため、生徒は自ら質問しやすい雰囲気の中で、学習内容でわからないことを自分の言葉で教員や他の指導員に伝えつつ、基礎学力を向上させた。このことは、自分が持つ問題を、人に理解してもらうために自分の言葉で説明するという、社会人として必要な力を養う機会となった。また、個々の生徒が自分のペースで教材を進めることにより、それぞれのニーズに合わせた学び直しを円滑に効果的に実践することができた。さらに、国語や数学との授業連携により、生徒の学習意欲の向上および基礎学力の向上が実感できた。本年度の授業評価アンケートで「マルチ基礎」では「授業の内容に満足しているか」という設問に「そう思う」「大体そう思う」と回答した生徒は100%であり、「積極的な態度で授業に参加できたか」という設問に「そう思う」「大体そう思う」と回答した生徒は83%であった。しかし同じ質問に残りの生徒すべてが「どちらかというと思う」と回答していた。また、100%の生徒が「授業が理解できた」と回答しており、これらのことから、真面目に授業に取り組む中で、確実に自分の基礎学力が向上した成果を自分で感じられている様子がうかがえた。また、年度当初は静かに個別に取り組んでいた生徒たちが、授業が進むにつれて大きな声で自分の考えを説明したり、何度も繰り返し尋ねる様子が見られるようになり、自分の弱点も安心して出しつつ、学びを進めようという生徒の前向きな姿勢が感じられた。「総合的な探究の時間」では「授業内容に満足している」という設問に「そう思う」「だいたいそう思う」と回答した生徒は100%であった。様々な分野の探求をする中で、他の生徒と話し合いをして考えを深めたり、協働して作業を進めることによって、より深く物事を理解する様子が見られた。他の教科では達成するこ

とのできない学びが実践されていることがうかがえた。

5 今後の課題

現在在籍している本校の夜間部の生徒にとって、卒業した後に「求められる学力」とは何かについて、職員間で考えをすりあわせ、全員で共有することを年度当初に行い、更なる学力向上支援に繋げていきたい。また「マルチ基礎」や「総合的な探究の時間」とその他の教科との横断的連携を一層進めることで、確実に定着させたい。

Ⅱ 卒業生追跡調査について

本年度卒業予定者の中に、「創作絵本づくり」を通して、もの作りの楽しさを感じ、現在オーダーメイドで小物を作って販売している生徒がいる。文化祭での注文をきっかけに少しずつ活動範囲を広げ、徳島市主催のバザーに出展するまでになっている。

また複数名の卒業生に連絡をとり、現在の進路（仕事や進学など）に対して本事業がどの程度役立っているかを調査した。その結果、現進路の役立ち度と本事業との有意な相関は見られなかったが、我々の働きかけは、生徒が意識するしないに関わらず、役立っていると確信している。

Ⅲ 本事業（３年間）のまとめ

本校夜間部の卒業生は令和３年度が３名。令和４年度が６名。本年度の卒業予定者は９名。３年間で計１８名である。そのうち大学進学者が１名、一般就職が３名、障がい者雇用が４名、バイトが４名、他６名は進路を模索中である。

定時制課程において、卒業生の６割が社会の構成者として何らかの仕事をしている、もしくは働く意思を示すことは、素晴らしい成果だと考える。

入学時からの成長がめざましい生徒も少なくない。本事業、及び学校生活を通して就労意識を高め、基礎学力を高め、ソーシャルスキルを高めてきた結果だと考えている。

3) 徳島県立徳島中央高等学校通信制課程

I 取組の内容

⑤多様な学習ニーズに対応できる体制の構築

○生徒の多様な学び支援について

1 目的・ねらい

本校通信制課程に在籍する生徒は、15歳から80歳代と年齢層も幅広く、県内各地に居住している。また、仕事に従事していたり子育て中であったりする生徒もいる。近年、増加傾向にあるのが、病気を抱えていたりいじめや不登校等の経験があったり、発達障がいや特別な支援を要していたりする生徒である。そのため、基礎学力や通信教育の基本である「自学自習」の学習習慣が身についていない生徒が増加している。

一方で、大学進学をめざしスクーリング日以外にも学習支援日に登校し個別指導を受ける生徒や、レポート作成のために登校し自習室で積極的に取り組む生徒もいる。また、昨年度は学校に掲示している案内文書から興味・関心のあるコンテストを見つけ、自らエントリーして勝ち抜き県代表になった生徒もいる。

このように通信制生徒の状況や背景・抱える課題等は実に多様である。そのため、多様な生徒に対する個別最適な学び支援が必要となっている。

2 内容

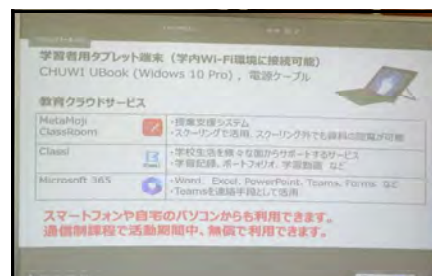
- 1) ICT を活用した学習支援の充実に向けて
- 2) ICT を活用した多様な情報提供の検討

3 取組

1) ICT を活用した学習支援の充実に向けて

生徒1人1台端末は、スクーリングやレポート作成時の調べ学習等に利用されているが、全ての生徒が積極的に活用しているわけではない。自宅への持ち帰りについても申請すれば可能であるが、「荷物になり重い。破損した時の自己負担が怖い。」等の理由で持ち帰り頻度は低い。

ICT の積極的な利用に向け、年度当初に「1人1台端末設定説明会」を実施し、教育クラウドサービスや通信制での活用等について説明した後、設定作業を行った。しかし、大人数が一斉にアクセスしたことで Wi-Fi に接続できず、1時間では終了できなかった。そのため、別日に個別対応して設定を行った。



また、GIGA 推進担当者が中心となり、説明会に参加できなかった生徒や活用に困っている生徒対象の個別 ICT 相談会を複数回開催したり、「ICT 通信」を定期的に発行したりして生徒の ICT 活用促進に努めている。

学習支援には主に MetamojiClassRoom を活用している。MetamojiClassRoom は令和 3 年度から複数回、教員 ICT 研修を実施し最も活用されている。教科担任は自作のコンテンツやワークシート等を科目フォルダに配布し、生徒は端末で教材を開いたり電子黒板に投影された教材を見ながらスクーリングを受講する。文字情報だけでなく画像や動画等の視覚に訴えることのできる ICT 教材は、生徒の興味・関心を高め、理解を深める効果がある。また、通信制課程の限られた時間でのスクーリングにおいては板書の時間を短くし効率よく説明ができるというメリットもある。数学では、生徒の画面をモニタリングして個々の進捗や理解度を教員が確認しながら進めることで、複数の教員によるスクーリング内での個別指導が可能となった。

生徒は、自分の端末だけでなくスマートフォンからも教材を見ることができ、レポート作成や復習等にも利用できる。

2) ICT を活用した多様な情報提供の検討

学校生活や行事案内、進路情報、教育相談、校外イベント等の生徒に有用な情報を、掲示板、毎月発行する「徳島中央通信」

(郵送)、「今日のお知らせ」(プリント、HP) と併用して ICT による発信を試み、生徒がより充実した生活を送ることができるように取り組んだ。MetamojiClassRoom の「生徒共通」ボックスでの情報提供や、デジタルサイネージによる情報発信により、視覚に訴えるわかりやすい情報提示が可能となった。



4 成果

1) ICT を活用した学習支援の充実に向けて



3 年間の ICT 活用支援の結果、生徒 1 人 1 台端末を活用し自学自習に活用する生徒や、ポートフォリオを記入する生徒も出てきた。また、ICT 通信等で呼びかけを行うことで、個別相談や ICT 活用について質問に来る生徒も増加した。

＜県教委による意識調査等に関わるアンケートから＞

通信制では、本アンケートを実施した時期が前期・後期スクーリング後で、郵送や Web を利用して実施した。その結果、回答数が非常に少なく、また 2 回のアンケートでは同一生徒の回答ではないと思われるため、単純な比較はできないが、学校生活に慣れ学習が進むにつれ、自己肯定感の向上がみられる。

自分には良いところがある。

	8月	12月
当てはまる	11%	21%
どちらかといえば当てはまる	46%	64%
どちらかといえば当てはまらない	21%	7%
当てはまらない	21%	7%

将来の夢や目標を持っている。

	8月	12月
当てはまる	21%	21%
どちらかといえば当てはまる	43%	36%
どちらかといえば当てはまらない	18%	36%
当てはまらない	18%	7%

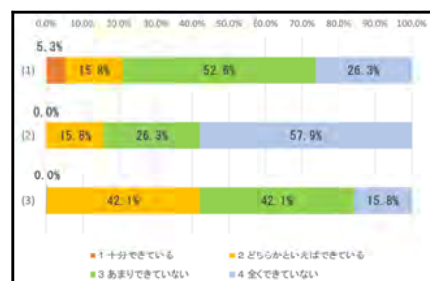
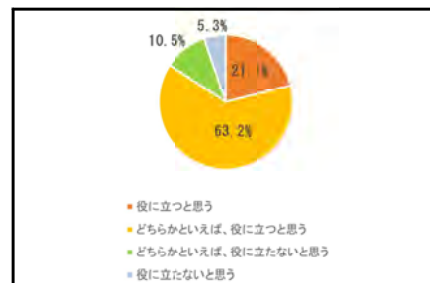
また、ICT 活用についても「ICT 機器を活用することができる」との回答が 64%、「ICT

ICT機器を活用することができる。

	12月
当てはまる	7%
どちらかといえば当てはまる	57%
どちらかといえば当てはまらない	36%
当てはまらない	0%

機器の活用は学習の役に立つか」との問いに対しては、肯定的な意見が 84%を超えており、生徒も ICT 活用の効果を実感できていると思われる。

ICTを活用して【(1) 教師に指示された課題を作成・提出する。(2) 教師が提示した課題をグループで話し合っ意見をもとめる。(3) 学力の定着のために振り返りを行い、学習の改善につなげる。】の3つのことがどの程度できるかの問いについては、右のような結果となり、通信制におけるスクーリング（面接指導）の特性が現れた。通信制ではリポート作成支援を行っており、グループ活動や発表などの(2)の活動は殆ど実施していない。また、グループ活動を苦手としている生徒が殆どである。



<通信制課程内の ICT 活用状況調査から>

本年度の1人1台端末の活用状況は端末の不具合もあり、「年に数回程度」や「本年度は未使用」という回答が多かった。活用した目的は「スクーリングに必要」、「空き時間の自主学習」であり、活用した教育クラウドは、「MetamojiClassRoom」と「Classi」であった。スクーリング中での活用についてはやや消極的であるが、自学自習に役立つ教材を MetamojiClassRoom に増やしてほしいとの意見が多かった。また、オンライン環境を使って実現を希望する取組として、「オンライン学習支援」や「オンライン出張スクーリング」、「オンライン特別活動」の回答数が多く、ネットワーク活用への期待があることがわかった。

2) ICT を活用した多様な情報提供の検討

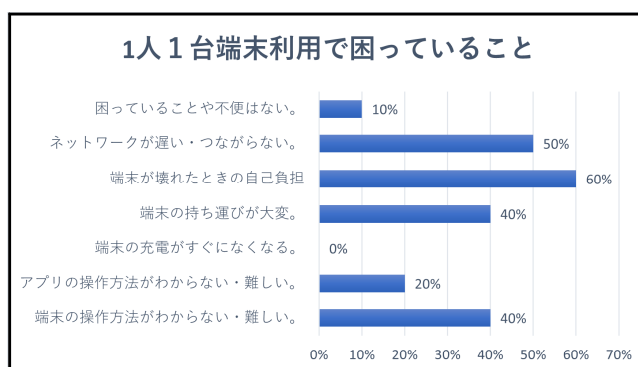
MetamojiClassRoom やデジタルサイネージ等、従来の情報発信に加えて ICT を活用した複数の情報発信を行った。デジタルサイネージに関する教員アンケートからは右のような効果が実感されていた。郵送された文字情報だけでは興味関心や理解度が低かったが、画像や図、動きのある情報に対しては、生徒が積極的に受け取っていた。次年度以降、課題の解決に向けて継続して取り組んでいきたい。

効果	生徒など若い人は紙媒体よりも注目してくれると思う。
	生徒が学校行事や取組を知る良い機会となっている。
	一定数の生徒はデジタルサイネージを立ち止まって見ている。
	画面も大きく見やすいので、伝達事項が目に入る。
	絵や写真でわかりやすく、情報発信の新しい手段として有効である。
	視覚的に効率よく情報を取得できるので、文字情報よりも理解しやすい。
課題	「今日のお知らせ」など他の情報と併用して、連絡徹底に役立っている。
	情報が多すぎると、見逃される可能性があり、精選が必要
	切り替えが早くて見逃しが多い。
	読み終わらないうちに画面が変わったという声があった。
	休み時間の長さに合った情報量を考える必要がある。
	全ての教員が情報発信に関わってほしい（各課連絡、情報提供）。
	動画や音声の活用を検討したい。
	職員室前を通らない生徒は見ない可能性がある。
	登校しない生徒への伝達方法の検討が必要

5 課題

通信制において生徒が一斉に登校する機会は殆どない。そのため年度当初に時間を設けて説明会を実施したが、エラーが発生し設定できなかった。

全体説明の機会に加えて、教科別にスクーリング初回時に短時間で効率よく説明するための共通した資料と、個別相談会等を併用して生徒の ICT 活用を支援するとともに、右の「生徒の困りごと」の解決に取り組みたい。



⑥支援相談員（ICT支援相談員）の活用

○教員のICT活用能力の向上に向けて

1 目的・ねらい

徳島県では生徒一人一台端末や電子黒板等の ICT 機器や Wi-Fi 環境の整備が行われ、通信制課程においても生徒一人一台端末や電子黒板が活用できる環境が整っている。これらを活用して通信制教育の根幹である「自学自習」を支える学習支援や、多様な生徒への個別最適な支援を行うため、生徒の学びを支える教員の意識や、ICT 活用能力を向上させる研修を ICT 支援相談員等と協働して実施し、生徒の学習支援等につなげていくことを目的とする。本校に配置された ICT 支援相談員は、定時制・通信制の 1 人 1 台端末等の設定・管理や ICT 研修等を行い、ICT 活用促進の一役を担っている。

2 内容

令和3年度から継続して実施している教員 ICT 研修の評価結果から、1 時間程度でワークショップや操作を伴った研修を計画した。下の表の塗り潰した研修が、本事業に係る研修である。3 年間継続した会社に依頼したことで、通信制の現状や課題を理解して対応してくれ、教員側も信頼感や親しみを持って研修に臨むことができ、評価も年々高くなっている。

令和3年度から5年度の主なICT研修一覧（通信制）

年度	月	テーマ	内容	講師	人数 (人)	時間 (分)	講義	ワーク ショップ	グループ ワーク	形態	10段階 評価
R3	4月	Classi	概要	Classi	1	30	○			Zoom	7.34
	7月	MetamajiClassRoom	概要、基本操作	総合教育センター	2	60	○	○		対面	8.14
	9月	電子黒板	基本操作	総合教育センター	2	60	○			対面	6.94
	1月	動画撮影	撮影の基本、模擬授業撮影	外部講師(TIDE)	3	60	○	○		対面	8.94
	1月	動画編集	基本操作、教材用動画作成	外部講師(TIDE)	4	120	○	○		対面	9.34
R4	6月	MetamajiClassRoom	活用方法、体験	総合教育センター	1	60	○	○		Zoom	8.00
	7月	Microsoft 365	機能概要、活用事例紹介	GIGA推進員(TIDE)	1	60	○			対面	7.50
	10月	Microsoft 365	活用方法(Teams, Forms)	総合教育センター	1	60	○	○		Zoom	8.21
	1月	MetamajiClassRoom	活用事例、教材作成演習	外部講師(TIDE)	3	120	○	○		対面	9.00
R5	8月	画像処理、ファイル形式	デジタルサイネージ用画像	ICT支援員(TIDE)	1	60	○	○		対面	9.14
	1月	情報セキュリティ	情報資産の分類・取り扱い	教員	1	30	○			対面	9.21
	1月	情報セキュリティ	リスク、ウイルス対策、著作権	外部講師(TIDE)	2	60	○		○	対面	7.29

※ワークショップは1人1台の端末を用いた演習、グループワークは3〜4名で1台の端末を用いた演習である。

3 取組

1) デジタルサイネージの有効な活用に向けての研修（ICT支援相談員）

デジタルサイネージは、本年度4月からスクーリング日に通信制職員室前に設置している。画面が数十秒ごとに変化し、大きな文字や図・画像で情報提供しているため生徒も足を止めて見ており、効果が高いことがわかる。しかし、データを作成して情報発信する教員が数名であったため、全ての教員が生徒に必要な情報をわかりやすく発信できることを目的とした。画像処理については、デジタルサイネージの情報作成以外に、教材作成においても役立つ内容である。

教員 ICT 研修に対して、ICT 支援相談員（株 TIDE）と事前打ち合わせを行い、研修の目的とワークショップの内容を検討した。研修資料は前もって提出され、双方で内容の再確認を行った。

8月16日に実施した研修の内容や様子は次のとおりである。実際に操作することで理解が深まるため、サンプル PDF やポスターの必要な部分をトリミングし、説明文を加えて加工し JPEG 形式で保存して、デジタルサイネージ用データ作成の流れを研修した。

- ・画像作成と処理
- ・画像の切り取り方（トリミング）
- ・保存形式の変更
（文書、PDF 等→ JPEG）
- ・著作権について



2) 安心・安全なICT活用に向けての情報セキュリティ研修（外部講師）

教員が教材を準備する場合、教科書や学習書、レポートを元に作成するが、わかりやすくするために画像や図、グラフ、動画等を利用する。その際、インターネット上のデータを活用したり、資料等をダウンロードすることが多い。教員 ICT 活用能力アンケートにおいて、ICT 機器の基本的操作や授業での活用はできるが、情報セキュリティについての理解についての自己評価が低いという結果もある。

本研修では、ネットワーク活用のリスクについて理解し、日々の管理やウイルスへの対応ができるようになること、著作権や個人情報の取り扱いについて正しく行動できることを目的に研修を実施した。また、全ての教員が生徒に対して情報モラルや情報リテラシーの指導、1人1台端末のセキュリティ対策ができることも重要である。

研修に対して外部講師（株 TIDE）と事前打ち合わせを行い、研修の目的と内容について協議した。リスクの具体例やセキュリティ対応について理解するために、グループワークを実施し、実際に操作するとともに Teams を使った意見交換を計画した。

1月24日に実施した研修の内容や様子は次のとおりである。2名の講師により説明と演習サポートをしていただいた。

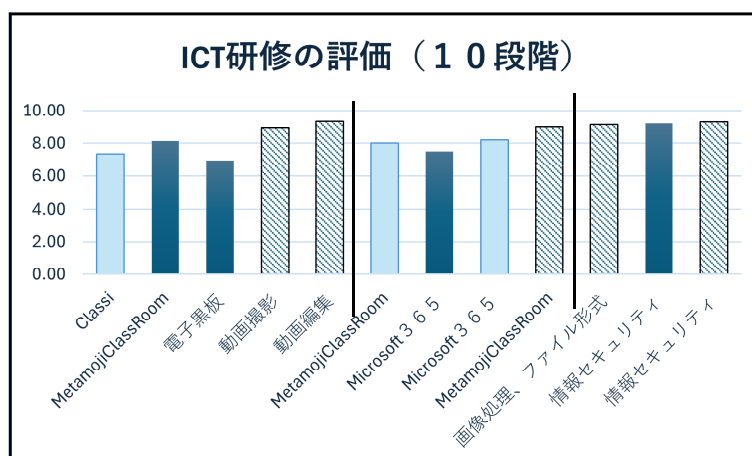
- ・情報セキュリティ強化の具体例
- ・危険なファイル
- ・ウイルスに感染した場合（リスクを防ぐ、感染チェック、感染対応の方法）
- ・著作権について
- ・個人情報の取り扱いについて
- ・Teams を使って意見交換



4 成果

ICT 支援相談員の活用による教員の ICT 活用能力の向上については、毎回成果が感じられる。教員の研修評価についても満足度が高い。

右は3年間の ICT 研修の評価である。薄い色で示したものは Zoom による研修、濃い色が対面で講義形式、斜線で示したものが、本事業を活用した研修であり、複数の講師によるワークショップ等の実践を併用した研修である。また、事前に教員対象のアンケートを実施し、ICT 活用に関する悩みや困りごとを把握したり、ICT 支援相談員や外部講師と事前打ち合わせをしたりした成果であると感じる。



デジタルサイネージは、各種お知らせや文部科学省からのリーフレットに説明を加えたもの、アンケートのお知らせ等、よりわかりやすく編集して情報発信されるようになった。

<デジタルサイネージの例>



<セキュリティ研修後の意見>

情報セキュリティは、研修後すぐに資料を見ながら自分のパソコンやタブレットでウイルスチェックやアップデートを実施するなど、すぐに実践する姿が見られた。

	受講者数	14	(%)
情報セキュリティの重要性・必要性について理解できた		14	100%
情報セキュリティについての基本は理解できた（知識・理解）		11	79%
基本的な操作について自分でもやってみようと思う		11	79%
インターネット接続時の危険性について理解できた		11	79%
不確かなサイト等へのアクセス（クリック）はしないように気をつける		12	86%
具体的な対処方法について理解できた		13	93%
情報セキュリティについて生徒への啓発を積極的に行う		7	50%
あまり変化はない		0	0%
ICTに対する苦手意識が高まった		0	0%

5 課題

ICT 研修後は教員に Forms を用いたアンケートを実施して、効果と課題を検証してきた。

研修の回数と時間については、右の結果となった。令和4年度は4回（1～2時間）、令和5年度は3回（1時間）研修を実施した。3～4回の回数や1時間程度の研修は適切であるという評価である。その理由を記述により回答してもらったが、次のような意見があった。

(%)		
研修の時間	R4	R5
長い	7.1	6.6
ちょうど良い	92.9	86.8
短い	0	0
どちらともいえない	0	6.6

(%)		
研修の回数	R4	R5
多い	7.1	0
ちょうど良い	85.8	93.4
少ない	7.1	0
どちらともいえない	0	6.6

	内容	数
時間・回数	助事よく研修が受けられた。	1
	集中力の継続からもちょうどよい。	3
	他の校務分掌や担任業務に支障がなく、回数・時間的に適当だと思う。	4
	特に重要なことをまとめて教えてくださり、ちょうどよい時間ではないかと思います。	1
	ICTが不得手なので1時間が限界です。	1
	ちょうどよい時間と頻度で、それ以上あると少し煩わしいと感じるかもしれない。	1
内容	定期的な研修により、知識のアップデートや確認ができてとてもよいと思います。	3
	研修テーマが必要なものばかりで、良かった。	1
	同じ会社の講師先生が継続的な研修をしてくださり有意義です。	
	資料を工夫して作成され提供してくださるので、大変ありがたいと思っています。	1
	困った時に見返したり、調べたりできるので、大切に保管し今後も活用させていただきたいと思います。	
	その都度、程よい時間で学習や講義を受けれたので良かったです。	1
意見	内容によっては、1時間にこだわらずに長い時間でもよいが、そのときは回数を減らして欲しい。	1
	ICTが苦手な人のために、研修後に質問時間（30分程度？）を設けてほしい。	1
	研修が多すぎると研修に依存してしまうと思います。	
	ある程度自分で使いながらできていないことや新しいことを研修で学ぶ方が主体的にスキルを習得できると思います。	1

また、3～4人のグループワークを取り入れたが、「コンピュータが得意な人、そうでない人が協力して受講でき、互いに教え合えるのでよい」「グループのメンバーの考えや得手不得手がわかり、相互理解につながる」との回答が多かったが、一方では「ひとりずつ、講義やワークショップを受講するほうが、内容をより理解できる」、「コンピュータが得意な人にまかせきりになるのでよくない」という意見もあった。

今後も通信制生徒や教員の現状を把握し、必要な内容を研修方法や時間を工夫しながら実施したい。

Ⅱ 本事業（３年間）のまとめ

研修後のアンケートで「３年間の研修の効果」としてできるようになったことを記述してもらった結果は次のとおりである。知識や技術の習得はもちろんだが、ICT 活用に対する意識の変容（苦手意識の払拭、積極性）が効果として重視したい。

３年間の研修の成果（自分ができるようになったこと）（記述）

教員の変容	先生方の取組状況が前向きになった。
意識の変容	苦手意識の払拭
	やり方がわかると使う場面を考えることができ、今では楽しくICTを活用できていると思う。
	ICTをしっかりと使おうと思うようになった。
	ICT活用のメリットを感じるようになった。
	MetaMojiなどの新しいツールを身近に感じられるようになった。
知識の習得	情報モラルについての意識が高まり、生徒の原稿や写真の掲載などはその都度確認を取ったり、意識して個人情報に気を付けている。
	基本的な知識の習得
	ICTについて理解を深めることができた。
	複数回の研修でMetaMojClassRoomの知識がアップデートされた。
	teamsやmetamojiの効果的な使用方法を知ることができました。
技術の習得	できることが増えた。
	スクーリングでICTが活用できるようになった。
	電子黒板にタブレットを接続し、スクーリングに活用することが当たり前になった。
	MetaMojClassRoomで教材や資料が作成できるようになった。
	MetaMojClassRoomを活用してすぐに生徒に提示でき、効率的に学習内容を伝えられるようになった。
	MetaMojClassRoomやTeamsを様々で活用できるようになった。
	PDFファイルの作り方
その他	研修のスピードについていけなかった。
	忘れてしまったこともある。

次年度の研修についても、「いろいろなアプリの新機能を知りたい」、「生徒用タブレットの活用方法について生徒として授業を受けた体験がしたい」等、様々な意見が出されている。通信制での生徒1人1台端末の活用はトラブル対応や生徒の技術向上などまだまだ解決すべき課題が多いが、全ての教員が効果的な活用についての意識を持って取り組みたい。

本事業を定時制のようにスクーリングや行事に組み込み生徒に還元することは難しいが、学びを支える教員の研修を通して指導力を向上させ、生徒にフィードバックできるようにすることが重要である。

4) 徳島県立徳島科学技術高等学校定時制課程

I 取組の内容

④特別な支援を必要とする生徒への指導

○「うどん打ち体験」出張教室について

1 目的・ねらい

自己肯定感の低い生徒が多く在籍する中で、「うどん打ち体験」を通して、ものづくりの達成感とクラスの連帯感を養い、自己肯定感と自尊心の醸成を図る。

2 内容

うどん職人の方から本格手打ちうどんの作り方を丁寧に教えていただく。自ら打ったうどんを食べるという体験により、達成感を味わい、自信をつけることで、今後、希望を持って学校生活を送ることができるようになると思う。

3 取組

11月21日 ICTを活用して、生徒に事前アンケート実施

11月30日 「うどん打ち体験」を実施

株式会社 AARUU

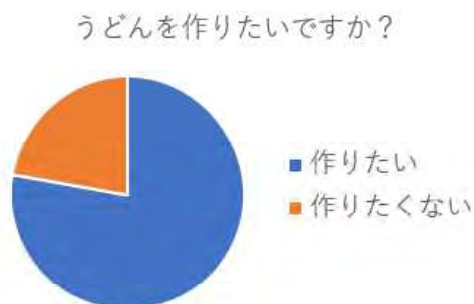
代表取締役 阿地 義治 先生

11月30日 ICTを活用して、生徒に事後アンケート実施

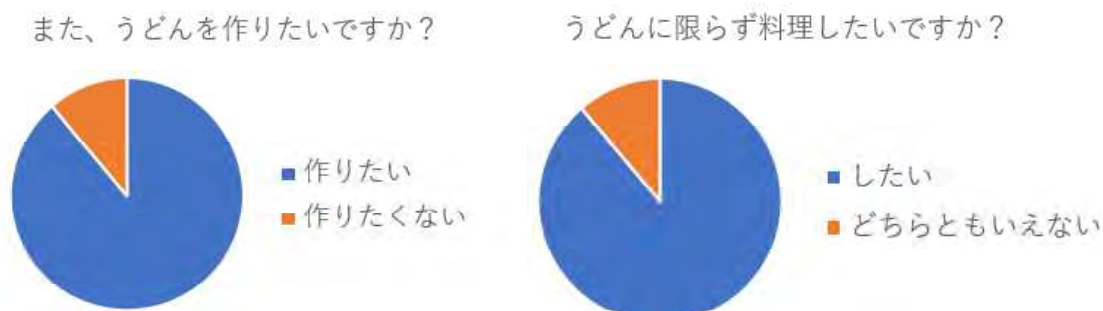


4 成果

事前アンケート結果（抜粋）



事後アンケート結果（抜粋）



事前・事後アンケートは、アプリケーションソフトClassiのアンケート機能を使い実施した。事前アンケートの中にはうどんに関するクイズも散りばめ、知識的側面においても、うどん打ち体験を楽しめるように工夫した。

その結果、うどん打ち体験の際も、クラスの仲間と共にわきあいあいと楽しく取り組んでいた。そして、できあがったうどんを見て、達成感を味わうとともに、うどんを茹でる時や後片付けの時には連帯感を持って協働的に取り組んでいた。

アンケート結果からもわかるように「うどんを作りたいですか」という質問において、「作りたい」と答えた生徒の割合が増え、「俺もやればできるでえ」、「自分でうどんを作ったのは初めてだったけどうまい」など、うどん打ち体験が自己肯定感の向上に寄与するような発言も多数聞かれた。

担当講師が昨年度から変わったが、講師の方は丁寧にうどんの伸ばし方、切り方等ご教示くださった。時折、「端までよく伸ばしている」、「均等に切れている」など、講師の方からお褒めの言葉をいただいた。生徒たちは職人から認めてもらえたことに喜びを感じ、想像以上に楽しみながら、うどん打ち体験ができていた。

また、閉会行事の時に、講師の方から若い頃の話や仕事に臨む心構え、職業観について、取締役としての生の声を聞くことができ、今回のうどん打ち体験は大変有意義なものとなった。

特に、講師の方からの「自分は打ち込みたいことを見つけて人生が変わった。君たちも何でもいいので、打ち込めることを探してください。」とのお言葉には、生徒も聞き入っていた。

5 今後の課題

本年度は昨年度までの講師の方が高齢を理由に突然辞退されることとなった。このことから来年度は本年度実施予定であったICTを活用した事前指導を実施し、ものづくりを通して生徒たちが達成感やクラスの連帯感を実感することで、自己肯定感と自尊心の醸成をより一層図りたい。

○教科国語における生徒の特性に応じた指導方法について

1 目的・ねらい

令和4年度実施特別支援教育校内教職員研修でご指導いただいた内容を実施し、授業に対する見通しや取り組みやすさ、わかりやすさの向上を目的とした。

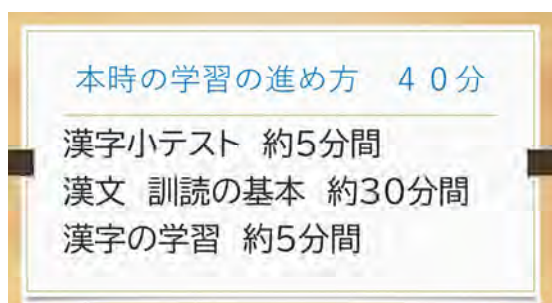
2 内容

授業で見通しが持てるように、ICTを活用して「視覚化」「パターン化」を示すことで生徒の授業に対しての取組の質が向上すると考える。

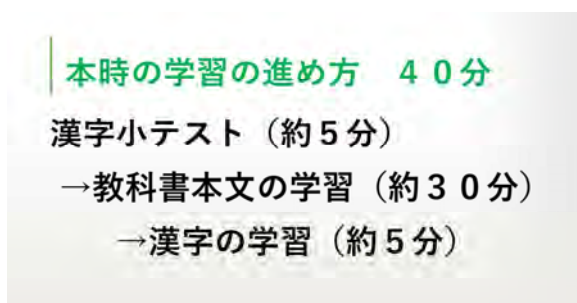
3 取組

1年次は「言語文化」、2年次は「現代の国語」、4年次は「国語表現」において、毎時間実施した。教員がICTを活用して「学習の進め方」「単元の目標」「本時の目標」「学習内容」などを電子黒板に提示（視覚化）し、生徒が見通しを持てるようにした。学習の進め方をパターン化し、毎時間同じルーティーンで授業を展開することにより、抵抗感なく取り組めるようにした。また、板書すべき内容だけでなく、教科書の本文やグラフ・写真・注意点などもスライドにまとめて表示した。

<「言語文化」の例>



<「現代の国語」の例>



4 成果

生徒に「視覚化」「パターン化」、ICTを活用した授業についてアンケートを実施した。

アンケートの結果、「視覚化」「パターン化」により、授業の見通しが持てていると答えた生徒が96%以上、授業に取り組むやすいと答えた生徒は100%、教員がICTを使うことによって、授業がわかりやすいと答えた生徒は96%以上であった。

この結果から、「視覚化」と「パターン化」は、授業の見通しを持つことに効果的

な方法であり、授業の見通しを持つことは、生徒の学習意欲や理解度を高めることにつながると考えられる。

そして、教員がICTを使うことは、授業のわかりやすさや興味深さを向上させることに貢献していると考えられる。

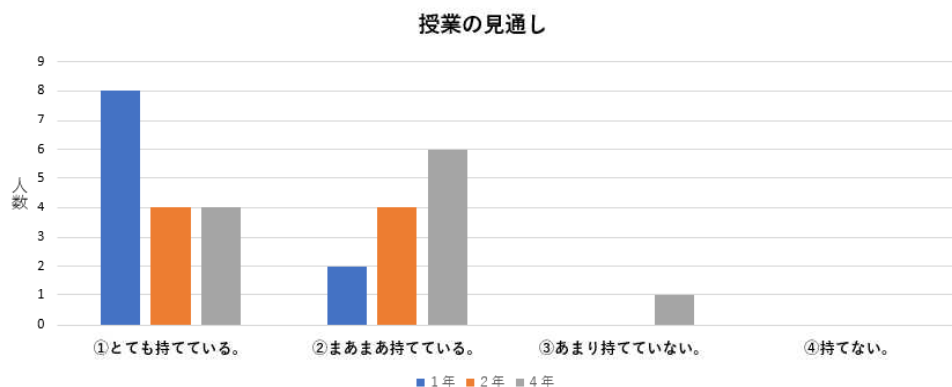
つまり、教科国語においては、「視覚化」「パターン化」、ICT活用により、生徒の授業への取組の質が向上し、わかりやすさが向上したと考えられる。

＜アンケート内容＞

Q1 国語の授業では、「学習の進め方」「単元の目標（学習内容）」など、スライドにしたものを電子黒板に映し出しています。（視覚化）こうすることで、授業の見通しが持てていますか？

次の①～④のうち、最も近いものを選択してください。

- ①とても持てている。
- ②まあまあ持てている。
- ③あまり持てていない。
- ④持てない。



Q2 国語の授業では、学習の進め方をパターン化し、毎時間、同じルーティーンで進めています。こうすることで、授業に取り組みやすいですか？

次の①～④のうち、最も近いものを選択してください。

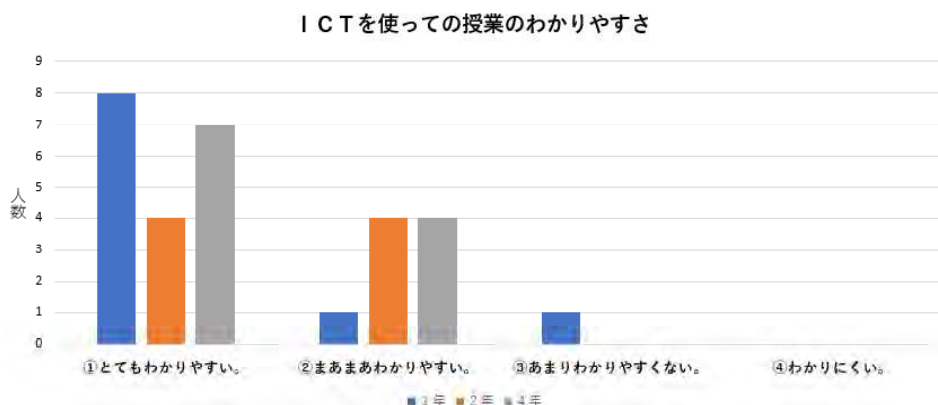
- ①とても取り組みやすい。
- ②まあまあ取り組みやすい。
- ③あまり取り組みやすすくない。
- ④取り組みにくい。



Q3 ICTを使って授業をしています、国語の授業はわかりやすいですか？

次の①～④のうち、最も近いものを選択してください。

- ①とてもわかりやすい。
- ②まあまあわかりやすい。
- ③あまりわかりやすすくない。
- ④わかりにくい。



5 今後の課題

来年度はこの結果を全教員で情報共有し、他の教科でも「視覚化」「パターン化」を
実践し、生徒の授業への取組の質を向上させることを目指す。そのためにもICTを
活用できるように、教員のICT活用指導力の向上や情報モラルの指導も必要である。

Ⅱ 卒業生等追跡調査について

卒業生等に聞き取り調査を行い、資格試験に挑戦したことが、どのように役立ったの
か追跡調査を行った。

- ・資格試験に合格し、自分もやればできると思った。
- ・資格取得が進路に直結して、就職することができた。
- ・資格取得により進学先で科目免除になった。
- ・資格取得により奨励金をもらうことができた。
- ・資格試験を通して、勉強の仕方やコツがわかった。
- ・教員が熱心に補習等を実施してくれたおかげで、合格もできたし、自分もあきらめず
に挑戦し続けることができた。
- ・勉強って楽しいですね。（多くの資格試験に挑戦し、合格している在校生の生の声）

Ⅲ 本事業（３年間）のまとめ

初年度は資格試験に必要な書籍を活用した。本校は専門高校であり、様々な資格試験に１年次から挑戦している。スモールステップで、初歩の資格から挑戦していき、「自分もやればできる」ということを実感することで、自己肯定感を高め、より上級の資格に挑戦している。

書籍を活用することで、経済的に困窮する生徒も、国家試験などの資格試験に挑戦でき、前述の卒業生等追跡調査にも示されるように、進路が決まったり、勉強のコツがわかったりと、非常に有益であった。

他方で、資格試験は毎年実施されるため、新たなテスト問題と解説・解答の掲載された問題集等を購入することが、生徒の資格試験の学習にとって有効なことは明白である。

二年度は令和４年度実施特別支援教育校内教職員研修で、担当講師からご指導いただいた内容を教科国語で試行した。授業では、見通しが持てるようにＩＣＴを活用し、「視覚化」「パターン化」を示すことで、生徒が計画的に考える習慣が身に付きつつあった。また、授業中にあてられることへの不安や拒否感のある生徒が多いため、重要項目に関する問いを提示し、まずは自ら考えてワークシートに答えを記入するようにした。正解を書いている生徒に前ふりをした上で、指名して発表してもらおう。こうした配慮により、生徒は自信を持って答えることができ、自己肯定感を得られることができていた。

また、研修会でも触れられていた、「自己理解を育てる」ために、一部の生徒であるが、支援相談員の先生の協力を得て、就労支援機関である若者サポートステーション（以後サポステ）と連携をとることができた。加えて、卒業年次の生徒にサポステのことを周知でき、このことにより就職後、進学後も学校だけでなく、サポステともつながりを持ち、悩み等の相談ができる選択肢を増やすことができた。

本年度は前述のとおり、次のことを実施した。

①「うどん打ち体験」出張教室

②教科国語における生徒の特性に応じた指導方法

ここまで記したように、３年間の本事業が本校生徒の自己肯定感や自己有用感を高める要因の一つであり、中学校時代までの不登校経験や様々な悩みを持った、多様な生徒が自信と希望を持って高校生活を送るための支援となっていると考えられる。

5) 徳島県立富岡東高等学校定時制課程

I 取組の内容

①就労指導

○社会貢献・就労に対する意識の向上について

1 目的・ねらい

地域や人とのかかわる活動を行っている外部講師による講演を実施し、生徒自身の社会に対する見聞を広め、就労に対する意欲向上を図る。また、生徒にとって、将来の自分を考えさせるきっかけを作ることとする。

2 内容（本年度は2名の講師をお願いした）

1) 講師 株式会社 泊洋商事 専務 門田 隆 先生

演題「自分の可能性は無限大・人とは有り難いもの」



門田先生は、5年前に本校定時制を卒業し地元で株式会社の専務として活躍されており生徒にとっては先輩にあたる。出身は大阪府であるが、様々な仕事を経て現在に至っている。

講演の内容としては、ご自分の体験に基づき、これから生徒達が社会に出たときに、どのような心構えが必要なのかということを中心にお話をいただいた。

「幸福人生・成功への道」を達成するために必要なこととして、「まずは、自分で自分を認める。自分はダイヤだ。石ころではない。」「日々穏やかに健やかに生きる。」「人を好きになって、世間も好きになる。今の周りの状況（環境）に感謝する。」「よく大人たちは、若いから何でもできる、可能性は無限大と言うが、本当に？本当なのでゆっくり時間をかけてその身で感じ取ってください。」という熱いメッセージをいただいた。

2) 講師 株式会社ウイステリア 代表 澤田 愛 先生

演題 「神対応の作り方」



澤田先生は、料理教室、また洋菓子店の経営者であると同時に、チャンネル登録者数13万人以上を数えるユーチューバーでもある。本校の全日制課程を卒業してから現在に至るまでの、様々な体験をお話いただいた。

高校卒業時の進路選択では、大学に進学できる学力は十分にあったが、お菓子作りを早く学びたいとの一心で専門学校に進学した。最初に就職した企業はかなり労働条件が厳しかったが耐え抜き、その後いくつかの企業に誘われ転職。そこでも多くの経験を積み、独立を果たした。また、一見華やかに見えるユーチューバーとしての活躍についても、目に見えない部分での苦労や大変な事が多くあるとのことで

あった。

生徒達には「好きなことで生きていくのではなく、嫌いなことで死なない。」という深いメッセージをいただいた。

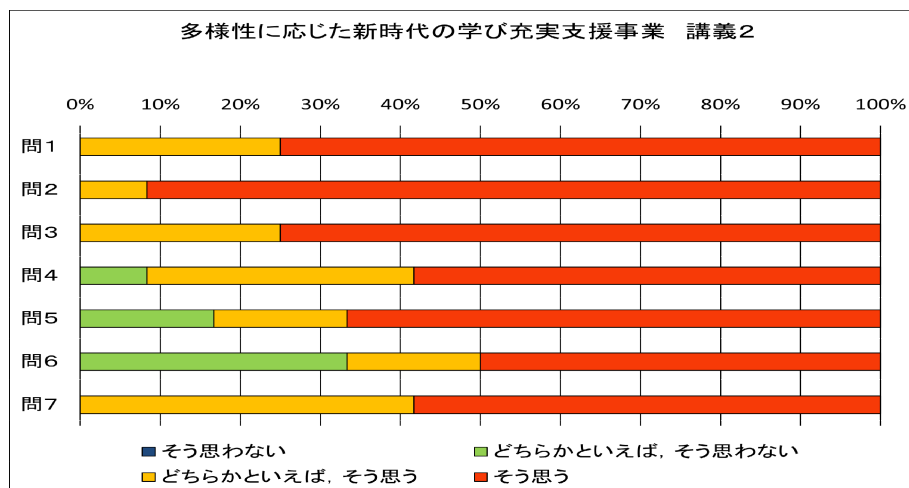
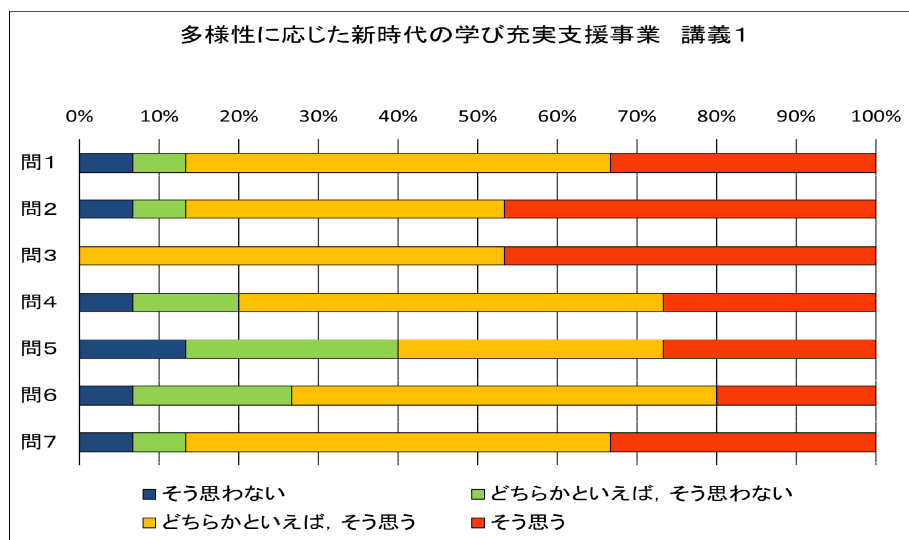
3 取組

- 1) 県内外においての地域貢献に係わる仕事内容や体験を紹介していただくことで、生徒自身の社会に対する見聞を広め、就労に対する意欲向上を図る。

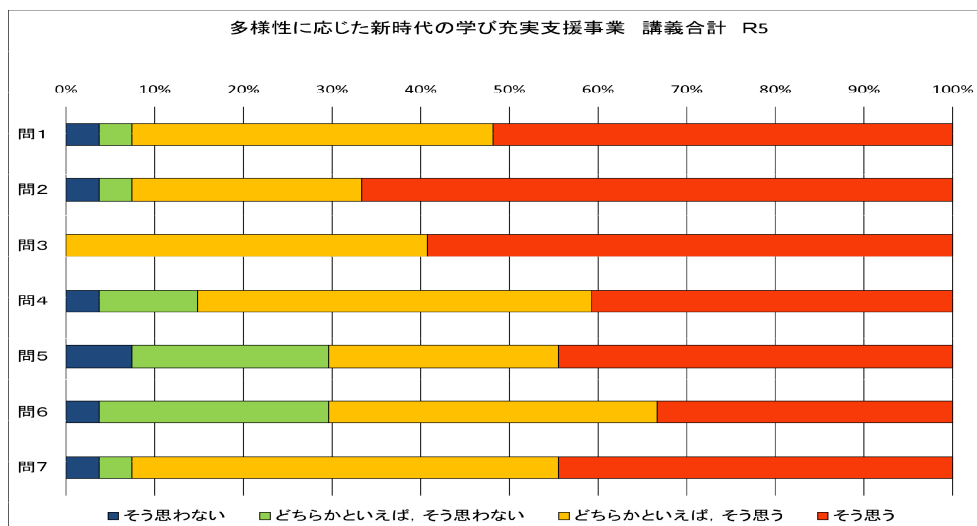
4 成果

生徒への講演の効果を図り、また評価するために、アンケートを実施した。

質問項目	講義1(門田先生)				講義2(澤田先生)			
	そう思わない	どちらかといえば、そう思わない	どちらかといえば、そう思う	そう思う	そう思わない	どちらかといえば、そう思わない	どちらかといえば、そう思う	そう思う
1. 今回の講義の内容に興味は持てましたか。	1	1	8	5	0	0	3	9
2. 今回の講義の内容はわかりやすかったですか。	1	1	6	7	0	0	1	11
3. 今回の講義の内容は理解できましたか。	0	0	8	7	0	0	3	9
4. 今回の講義全体を通じて、積極的に取り組みましたか。	1	2	8	4	0	1	4	7
5. 今回の講義の結果、仕事や就職についての興味関心は大きくなりましたか。	2	4	5	4	0	2	2	8
6. 地域貢献に役立つ活動(仕事)を行いたいという気持ちは大きくなりましたか。	1	3	8	3	0	4	2	6
7. 今回の学び充実支援事業に対する満足度は高いですか。	1	1	8	5	0	0	5	7



合 計					平均点
質問項目	そう思わない	どちらかといえば、そう思わない	どちらかといえば、そう思う	そう思う	
1. 今回の講義の内容に興味は持てましたか。	1	1	11	14	3.41
2. 今回の講義の内容はわかりやすかったですか。	1	1	7	18	3.56
3. 今回の講義の内容は理解できましたか。	0	0	11	16	3.59
4. 今回の講義全体を通じて、積極的に取り組みましたか。	1	3	12	11	3.22
5. 今回の講義の結果、仕事や就職についての興味関心は大きくなりましたか。	2	6	7	12	3.07
6. 地域貢献に役立つ活動(仕事)を行いたいという気持ちは大きくなりましたか。	1	7	10	9	3.00
7. 今回の学び充実支援事業に対する満足度は高いですか。	1	1	13	12	3.33



なお、解答は①そう思わない ②どちらかといえば、そう思わない ③どちらかといえば、そう思う ④そう思う の4選択とし、4段階評価で点数が高いほど高評価とした。

質問	質問項目
1	今回の講義の内容に興味は持てましたか。
2	今回の講義の内容はわかりやすかったですか。
3	今回の講義の内容は理解できましたか。
4	今回の講義全体を通じて、積極的に取り組みましたか。
5	今回の講義の結果、仕事や就職についての興味関心は大きくなりましたか。
6	地域貢献に役立つ活動(仕事)を行いたいという気持ちは大きくなりましたか。
7	今回の学び充実支援事業に対する満足度は高いですか。

生徒へのアンケート結果から、まず質問1から質問4ではそれぞれの講義内容に興味を持ち、積極的に臨めた様子がうかがえる。質問5質問6では、今回は社会の厳しさに着眼した内容が多々あったものの、自分が将来社会に出た際には仕事に対して前向きに取り組んで行きたいというマインドが形成できたと分析できる。問7からは今回の講演は、就労に対する意欲向上を図ることに成功していると考えられる。

5 課題

講演を依頼する前にその内容を教員側も知ることができないので、内容について講演依頼段階で本事業の趣旨や目的をはっきりと伝えておくことが重要である。万一、講演内容が適切でない場合、どう対応するかも考えておく必要がある。

また、せっかくの講演も学校行事ということで、生徒は休みがちになるので、その点どう出席率を高めるのかについても、今後の課題である。

○ハローワークとの連携について

1 目的・ねらい

本校定時制課程の生徒は、19名が在籍しており、その内11名が昼間にアルバイトもしくは、就職に近い形で仕事に従事している。昨年までの就職に関する傾向としては、最終学年での就職活動に消極的になりがちで、今勤めている会社（現場）にそのまま就職を考える生徒が非常に多かった。しかし、今年度の特徴は、今勤めているアルバイト先で正社員になることをためらったり、今の業種とは違った業種を希望したりするなど、昨年までと傾向が真逆になっている。そのため、早い段階で、ハローワークに求人票を出している会社のなかから希望する企業見つけ、ミスマッチが起きないように会社見学に事前に行くなど、意欲的に就職活動を行い、安心して働ける就職先決定へと繋ぎたいと考えている。

2 内容

ハローワークでICTを利用した求人情報検索やハローワークインターネットサービスの利用の仕方など、事前に利用の仕方やマナーなどを説明してから、個別にハローワークを訪問し就職活動を展開した。

3 取り組み

卒業年度生5名のうち就職希望の4名を個別にハローワークを訪問させ実際に求人票などを見ながら就職活動を展開する。

4 成果

A君の場合)

物静かな性格ではあるが、4年間、意欲的に学習を続け、常に成績上位の生徒であった。定通連生活体験発表でも代表になるほど、責任感をもって物事に取り組める人物である。食品関連の仕事がしたいという漠然とした希望であったが、学校に来ている求人から決定できず悩んでいたところ、県内の食品製造の企業から求人をいただくことができ、一気に内定まで進めることができた。

Bさんの場合)

希望する職種がなかなか決定できずにいたところ、車が好きだという本人の特性から、自動車関連の企業の求人をハローワークから紹介していただいた。ミスマッチが起きないように事前に職場見学を申し込み、採用試験、内定と進めていく事ができた。4年間かけて、多くの検定を受検し取得していたので、その点も大いに評価されたようである。

Cさんの場合)

12月まで、進学希望で就職の予定は全くなかったが、本人の希望が就職へと変化し、急遽就職活動を始めることになった。すぐにハローワークに連絡し、本人の希望する職種や就業場所を伝えて紹介していただいた。現在、内定を勝ち取るために面接

練習や履歴書作成に取り組んでいる。

大きな成果としては、本校の大きな課題であった「就職活動に消極的で今、勤めている会社（現場）にそのまま就職を考える」という生徒から、今のアルバイト経験を生かし、自らの適性を考えて、早い段階から就職活動に取り組むことができたことである。「とりあえず今のところで働く」という選択をせずにハローワークを訪問し求人票をしっかりとみて考える事ができた。

5 課題

来年度以降の活動としては、進学希望の生徒が多くいる学年ではあるが、しっかり就職について考えさせ就職を見据えた進路選択をサポートしていきたいと考えている。自己実現に向けて適切な進路をしっかりと考えさせその上で、卒業年次の4年生では、ハローワークの各種サービスを利用するため必要に応じたICTスキルを高めさせ、進路実現に向けた支援を行いたい。

○コミュニケーションスキル向上及び進学・就職活動における面接指導について

1 目的・ねらい

コミュニケーションスキル向上させ、生徒の進学・就職活動における面接能力等を向上させる。

2 内容

- 1) これまで購入した礼儀作法やマナー等の進学・就職活動に係る生徒用および教師用参考図書を使用した進学対策・就職活動指導・面接指導を行った。
- 2) オンライン面接にも対応できるように、ICTを用いた面接練習を行った。

3 取組

- 1) 礼儀作法やマナー等の進学対策・就職活動指導・面接指導
- 2) オンライン面接に向けた、ICTを用いた面接練習

4 成果

4年生5名の内、4名が就職希望。3名が希望する企業に就職が決定し、1名が採用試験に挑戦中である。

5 課題

生徒がこれからより豊かな人間関係を築き、自己の成長を促進させることができるよう、普段からの声かけや挨拶を継続していきたい。

②ソーシャルスキル向上指導

○ 校内研修等について

1 目的・ねらい

研修会や情報交換・情報共有を通して、教職員の教育的スキルや資質の向上を図り、生徒全員に対する理解ときめ細かな支援・指導の充実に繋げる。

2 内容

自尊感情・自己肯定感について正しく理解し自尊感情の育て方について考えることにより、生徒に対する理解ときめ細かな支援・指導の充実に繋げ、生徒のソーシャルスキル向上を図るための基盤となる自尊感情・自己肯定感の向上を図る。

3 取組

昨年度、本校で実施した自尊感情測定尺度アンケートを今年度も継続して取り組み、学校としての平均値を算出したり他校や他県と比較したりするのではなく、一人ひとりの変化に着目し生徒理解につなげ、教員間で共有していく。

- 1) 東京都教職員研修センター紀要「自尊感情測定尺度」を用いて、各生徒の自尊感情に関する自己評価を、毎学期（年3回）調査する。
- 2) 研修会を開き、調査結果を基に個々の生徒の傾向を分析し、指導方法を教職員間で確認する。

※「自尊感情測定尺度」アンケートについて

- ① 合計22問、5段階の評価（「あてはまる」5点～「あてはまらない」1点）
質問（抜粋）問1 私は今の自分に満足している。
問2 私は自分のことが好きである。
- ② 自尊感情を構成する3つの観点（下記）ごとに傾向把握ができるよう、回答結果が集計され、レーダーチャート（図1）が表示されるエクセルシートをダウンロードして使用する。

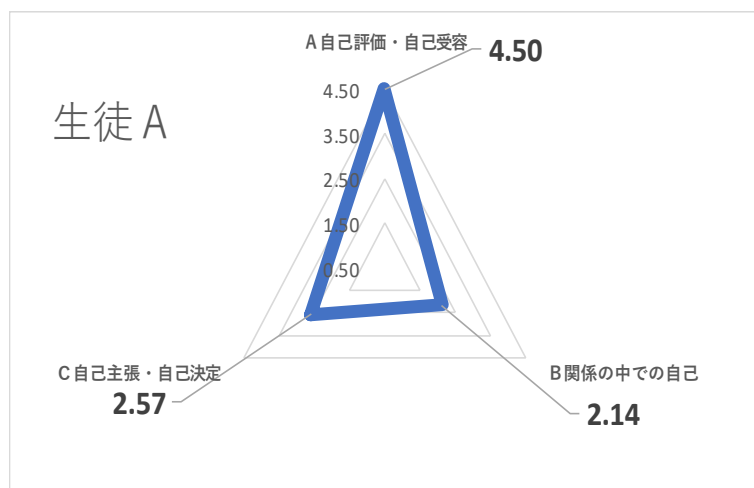
「A自己評価・自己受容」

「B関係の中での自己」

「C自己主張・自己決定」

図1：レーダーチャート

生徒Aの回答から
集計された結果値を
示した図



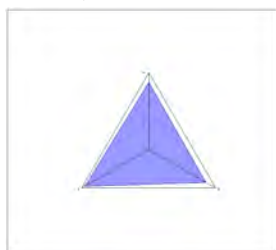
4 成果

生徒の一人一人の回答結果から得られたレーダーチャートを、全教職員が意識して、教科指導や生徒指導等にあたった。

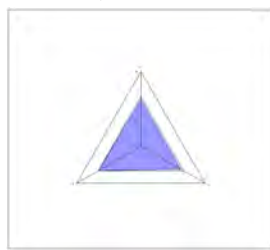
事例① 2年生女子Aさんの場合

入学前の中学校からの引き継ぎで、非常に学力が低く、記憶力も曖昧であるという情報が入っていた。しかし実際には、入学後は明るく活発で友人関係も良好な生徒であった。基本的には自己肯定感の高い生徒であったが、2学期以降、急に自己肯定感が低下した。

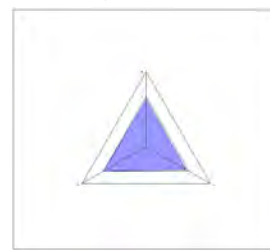
1学期



2学期



3学期



考えられる原因は、校外の友人とのトラブルではないかと推測される。仲の良い数名のグループの人間関係が変化したので精神的なショックは大きかったのではないだろうか。

事例② 1年生男子Bさんの場合

中学時は特別支援学級に在籍し、不登校傾向のある生徒であった。精神的な疾患を持っていて気持ちが不安定であると中学校からの情報があった。入学後は、ほとんど欠席をせず、意欲的に学習に取り組んでいる。

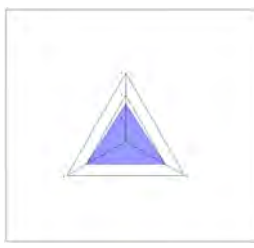
1学期



2学期



3学期



2学期からは、アルバイトを始めた。客の多い忙しい店舗にもかかわらず、落ち着いて笑顔で接客できている。アルバイトを頑張れているというのが大きな自信となって自己肯定感を高めているのではないだろうか。

5 課題

生徒一人ひとりについて、職員間で共有し対策など話し合う機会は今年度もほぼ毎日できた。19名の生徒の内、自己肯定感が1学期より高まった生徒は14名、下がった生徒は3名、同数は2名であった。大きな変化のある生徒はいなかったものの、少しの変化も見逃さず、声かけし、教職員間で共有していきたいと考えている。

③学力向上指導

○図書の継続利用について

1 目的・ねらい

1・2年生の「情報Ⅰ」の授業において、ICTを活用することで、効率的に文書作成ソフトや表計算ソフトに関する知識・技能を発展的な内容として習得させ、進学や就職に生かす。

2 内容

下記の図書を利用した。

- 1) 令和2年度版 全商ビジネス文書実務検定模擬試験問題集 3・4級（実教出版）
- 2) 令和2年度版 全商情報処理検定模擬試験問題集 3級（実教出版）

3 取組

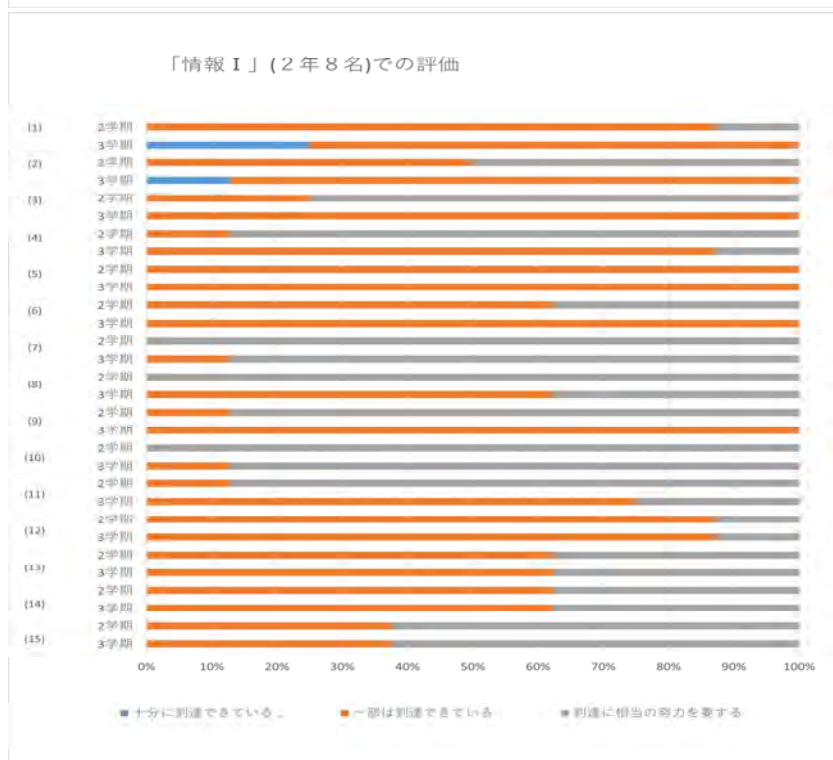
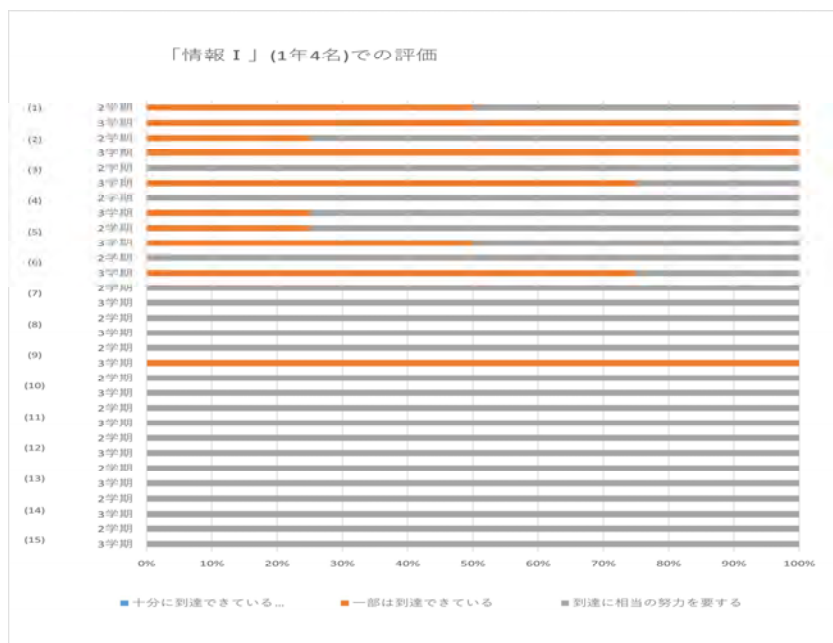
図書を1・2年生の情報の授業において活用し、参考図書として継続して活用した。
以下のルーブリック（表1）を使用し、成果を検証した。

到達目標	主な評価基準		
	十分に到達できている	一部は到達できている	到達に相当の努力を要する
1. Wordを活用することができる	(1)素早く文字を打つことができる	素早くはないが、文字を打つことができる	なかなか文字を打つことができない
	(2)ミスタイプなく文字を打つことができる	ミスタイプはあるが、正確に文字を打ち直すことができる	ミスタイプばかりで正確に打つことができない
	(3)フォント、文字の配置を自由に変化させることができる	フォント、文字の配置を変更することができる	フォント、文字の配置を変更することができない
	(4)表を挿入し、編集することができる	表を挿入はできるが、十分に編集できない	表を挿入できない
2. Excelを活用することができる	(5)表に罫線を引き、太さや線種を自由に変えることができる	罫線を引くことができるが、線の種類を十分に変えることができない	罫線を引くことができない
	(6)平均、最大値、最小値を自由に求めることができる	平均、最大値、最小値を決まった範囲では、求めることができる	平均、最大値、最小値を求めることができない
	(7)IF、LEFTの関数を自由に活用することができる	IF、LEFTの関数を、一部使うことができる	IF、LEFTの関数は使うことができない
	(8)COUNTなどの関数を自由に活用することができる	COUNTなどの関数を、一部使うことができる	COUNTなどの関数は使うことができない
	(9)フォント、文字の配置を自由に変化させることができる	フォント、文字の配置を変更することができる	フォント、文字の配置を変更することができない
	(10)どの列に関しても自由に並べ替えをすることができる	決まった列に関して並べ替えることができる	並べ替えることができない
	(11)グラフを挿入し、自由に編集することができる	グラフを挿入することができる	グラフを挿入することができない
3. Powerpointを活用することができる	(12)テーマに沿ったデザインを選ぶことができる	デザインを変更することができる	デザインを変更することができない
	(13)体系的なスライド構成ができる	スライドを入れ替えることができる	スライドを入れ替えることができない
	(14)適切な画像を挿入し、出典を明記できる	画像を挿入することができる	画像を挿入することができない
	(15)効果的なアニメーションを入れることができる	アニメーションを入れることができる	アニメーションを入れることができない

表1：1・2年生「情報」評価

4 成果

1、2年生ともにWordの基本操作のスキルが向上している。Excelの基本操作についても、「到達に相当の努力を要する」と答える生徒が減少し、すべての項目のスキルに向上が見られる。Powerpointは、直感的に分かりやすく生徒も楽しんで取り組む事ができるので、2年次ではスキルが大きく向上している。（1年生の評価時には授業で扱っていない）



5 課題

Excelの基本操作のスキルの向上のみならず、数式及び関数処理が可能となるように、やや高度な内容にもチャレンジする必要がある。また、教科「情報」で身につけた文書作成ソフトや表計算ソフトに関するICTスキルを生かして、「全商ビジネス文書

実務検定」と「全商情報処理検定」の受検を奨励し、学習意欲向上と就職・進学指導につなげたい。

Ⅱ 卒業生追跡調査について

多様性事業で学んだことが、自身の変革や現在どのように役立っているかについて、令和4年度卒業生2名から話を聞くことができた。

A君（就職先：自衛隊）

- ① 就労指導における講演では、JICA四国職員 杉本雅彦先生の「国際支援という仕事（海外青年協力隊）」が強く印象に残っている。この講演をきっかけとして海外に興味を持つようになった。自衛隊でも海外赴任を希望する機会があるかもしれないが、講演の内容はその時の参考になると思う。ハローワークの就職に関する講演では、個別に面接練習をする上でも役立つ内容であった。
- ③ 学力向上指導におけるICTの活用では、現在の仕事にも非常に役立っている。特にExcelとPowerPointをよく使うため、高校生の間に身につけたスキルをそのまま使えている。

B君（就職先：介護施設）

- ① 就労指導における講演では、藍染め職人 永原レキ先生の「藍染めと徳島の魅力～徳島・阿南の未来に向けて～」が印象に残っている。実物の藍染めされたサーフボードを見たが、言葉では表せないような感動を覚え、説得力を持って話を聞くことができた。世の中には、こんな仕事があるのかと視野が広がり、一つの仕事で挫折しても大丈夫だと人生に対する不安が和らいだ。ハローワークを利用して就職先を見つけたが、ハローワークの検索システムをうまく活用することで、自分だけで調べるより様々な職種を知ることができた。
- ③ 学力向上指導におけるICTの活用では、現在パソコンを使ってカルテの入力を行っているが、高校時代に習得したタイピングが非常に役立っている。先輩職員に操作を教えることもあり、仕事のやりがいにつながっている。

Ⅲ 本事業（3年間）のまとめについて

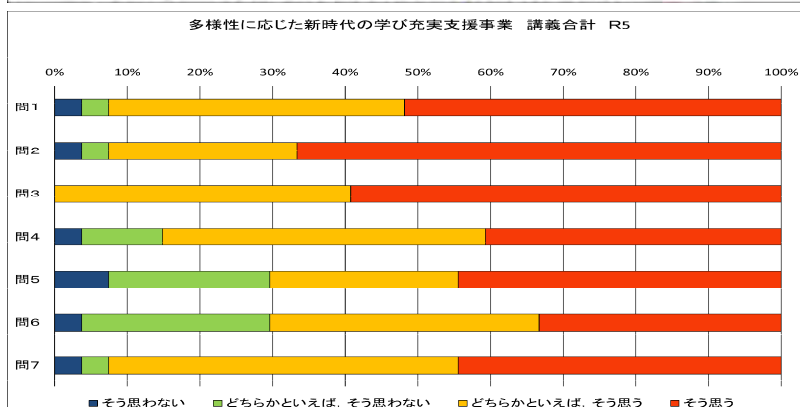
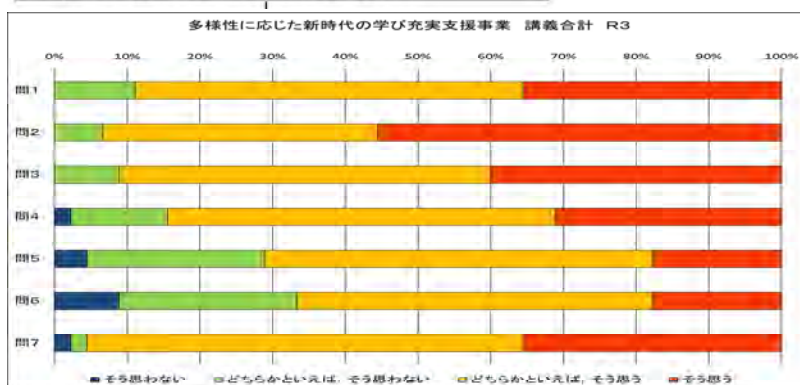
①就労指導（講演アンケート）

各年度を通してよく似た傾向となっはいるが、年度ごとに各設問の「そう思う」の割合が増えていることから、全体的に講演の内容に対しての理解する力が深まっていると分析できる。特に問3「今回の講義の内容は理解できましたか。」に対しては、令和5年度は全員が「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と答えている。

また、卒業生からの聞き取りからも分かるように、講演から数年経過してもしっかりと記憶に残っているようである。話をしているうちに思い出すことも多く、意識の

深いところで進路選択や生き方に影響を及ぼしているのではないだろうか。本校の生徒は不登校を経験している生徒が多く、その挫折感から将来に対して漠然とした不安を感じている生徒も多い。しかし、多岐に渡る様々な職業人の講演を聴くことで多様な生き方があることを知り、問5「仕事や就職に対しての興味関心が大きくなった」ことは、本事業の成果の一つである。

質問	質問項目
1	今回の講義の内容に興味は持てましたか。
2	今回の講義の内容はわかりやすかったですか。
3	今回の講義の内容は理解できましたか。
4	今回の講義全体を通じて、積極的に取り組みましたか。
5	今回の講義の結果、仕事や就職についての興味関心は大きくなりましたか。
6	地域貢献に役立つ活動(仕事)を行いたいという気持ちは大きくなりましたか。
7	今回の学び充実支援事業に対する満足度は高いですか。



①就労指導(ハローワークとの連携)

本事業を開始する以前は、現在のバイトをそのまま継続したり、知り合いの企業を頼ったりといった形態が多く見られたが、現在はほぼ全ての就職希望生がハローワークを通して正社員としての就職となっている。ハローワークを積極的に利用することにより、幅広い職種を知ることができ、視野の広い就職活動ができるようになっていく。

②ソーシャルスキル向上指導

「自尊感情測定尺度」アンケートを用いて、各年度で集団傾向を分析したところ変化はわずかなものであるが、観点により値が上がったものもあるが、下がったものもある。生徒の人数が少ないため、1人の変化が平均値に与える影響が大きく、平均をとることが妥当か議論の余地はあるが、急に大きく上昇したり下降したりといった変化は見られないため、集団としては比較的安定した数値を示していると分析できる。

3・4年生は本事業が開始された年度の1学期から、2・3年生は入学年度の1学期から、直近の調査までの差分をとったところ、全項目において+となった。これは、本事業の研究目的でもある「自己肯定・有用感の醸成」について、本事業における学習プログラムにより一定の成果があったと考えられる。

4年生

	2年時1学期(L1)	2年時3学期	3年時3学期	4年時3学期(L2)	$\Delta L = L_2 - L_1$
A 自己評価・自己受容	2.04	2.27	2.33	2.25	+0.21
B 関係の中での自己	2.71	2.67	2.77	3.00	+0.29
C 自己主張・自己決定	2.29	2.55	2.66	2.61	+0.32

3年生

	1年時1学期(L1)	1年時3学期	2年時3学期	3年時3学期(L2)	$\Delta L = L_2 - L_1$
A 自己評価・自己受容	2.88	3.00	3.00	3.13	+0.25
B 関係の中での自己	2.71	3.00	2.57	3.36	+0.65
C 自己主張・自己決定	2.86	3.00	3.14	3.29	+0.43

2年生

	1年時1学期(L1)	1年時3学期	2年時3学期(L2)	$\Delta L = L_2 - L_1$
A 自己評価・自己受容	2.40	2.63	2.70	+0.30
B 関係の中での自己	3.11	3.27	3.20	+0.09
C 自己主張・自己決定	2.67	3.18	3.23	+0.56

1年生

	1年時1学期(L1)	1年時3学期(L2)	$\Delta L = L_2 - L_1$
A 自己評価・自己受容	2.50	2.79	+0.29
B 関係の中での自己	3.14	3.38	+0.24
C 自己主張・自己決定	2.86	3.19	+0.33

③学力向上指導（ＩＣＴの活用について）

全商ビジネス文書実務検定の合格者についてまとめたところ、年々合格者数が増加している。さらに、令和５年度については速度・文書共に１級合格者がでている。これは本校において、本事業の学力向上指導の中心としてＩＣＴ活用能力の向上を位置づけた成果であり、来年度以降も、この指導のノウハウを教員間で引き継ぎ合格者を増やしたい。

全商ビジネス文書実務検定合格者数

	令和２年度	令和３年度	令和４年度	令和５年度
１級（速度）				１
１級（文書）				１
２級（速度）			３	２
２級（文書）			１	２
３級（速度）	２	１	１	２
３級（文書）	２	１	２	２

6) 徳島県立鳴門高等学校定時制課程

I 取組の内容

①就労指導

○進路開拓について

1 目的・ねらい

就職希望者の受験企業先の選択肢を増やすために、鳴門高等学校定時制単独求人票を確保する。

2 内容

進路指導担当教職員が進路先開拓のため、企業・事業場を訪問する。

3 取組

令和5年5月22日（月）から24日（水）に2泊3日で兵庫県・大阪府の企業12社を訪問し、本年度の求人票を依頼した。また、卒業生が働いている企業は、卒業生の動向調査を行った。

令和5年12月19日（火）から21日（木）に2泊3日で兵庫県・大阪府の企業12社を訪問し、次年度の求人票を依頼した。また、卒業生が働いている企業は、卒業生の動向調査を行った。

5月22日（月）

株式会社 ENEOS ウイング関西支店、株式会社にしけい大阪支社、
株式会社ハリアー研究所大阪支社、国際セーフティ株式会社大阪本社

5月23日（火）

株式会社ダイロック大阪本社、つるや株式会社大阪本社、
日本ビューホテル株式会社大阪支店、株式会社食道園大阪本社、
株式会社サカイ引越センター大阪本社

5月24日（水）

株式会社オンテックス大阪支社、株式会社マルハン北加賀屋店、
ケービックス株式会社兵庫支社

12月19日（火）

株式会社 ENEOS ウイング関西支店、株式会社にしけい大阪支社、
株式会社ハリアー研究所大阪支社

12月20日（水）

株式会社ダイロック大阪本社、つるや株式会社大阪本社、
ヒューリックホテルマネジメント株式会社大阪支店、
アンダーツリー株式会社大阪本社、株式会社食道園大阪本社、
国際セーフティ株式会社大阪本社

12月21日（木）

株式会社オンテックス大阪支社、株式会社マルハン北加賀屋店、
ケービックス株式会社兵庫支社

4 成果

積極的に進路先開拓をすることで、鳴門高等学校定時制単独求人数が昨年度より多くなった。県内求人票獲得のために大阪本社徳島支社の会社を訪問した。また、東京・大阪を希望する生徒が毎年1人はいるため、東京本社大阪支社の会社や大阪本社の会社を訪問した。本年度県内求人票は、35社48求人（昨年度30社37求人、一昨年度25社32求人）だった。就職希望者の企業選択肢の増加に繋がった。

5 課題

今後も生徒数や就職希望者数が増加する可能性があるために、企業開拓を積極的に行い、本校定時制単独求人票を増やす必要がある。

求人票をもらうだけでなく、働きやすい会社かどうか、ホワイト企業かどうかを見極めていかなければならない。新規の企業開拓をしているが、定時制や定時制の生徒に対して偏見や差別を持っている場合もある。それらの誤解を解きながら生徒には、よい企業を紹介したいと考えている。

○進路講演会について

1 目的・ねらい

本校生徒は就労意識が低く、卒業後入社した会社を3年以内に退社する者が毎年1、2名いる。外部講師を招き、講演を通して生徒の就労意識の向上を図る。

2 内容

会社の社長等を講師として招き、社会人として守らなければならないことや、社会人になるにあつたての心構えについての講演を実施する。

3 取組

令和5年11月14日（火）に講師として、有限会社工藤建設興業の専務取締役 工藤 伸二氏を招き、「働くうえでの心構え」をテーマにした、生徒用タブレット使用の講演を実施した。

4 成果

働くうえでの大切なことの説明は、「今後の自分に役だったか」という質問に対して、「役に立った」21名、「少し役に立った」7名で、合計生徒数は28名（87.4%）だった。「この進路講演会の印象はどうでしたか」という質問に対して、「満足している」26名、「少し満足している」3名で、合計生徒数は29名（90.6%）だった。「来年度も進路講演会を実施してほしいですか」という質問に対して、実施してほしい生徒数は28名（87.5%）だった。

多くの生徒が、今後の自分に役に立った進路講演会だったと感じている。

ループリック評価

資質・能力	行動目標	A	B	C	D
知識・理解	働くうえでの大切なことを答えられるか（発表できるか）	答えられる 3名 9.4（%）	ある程度答えられる 12名 37.4（%）	あまり答えられない 10名 31.3（%）	答えられない 7名 21.9（%）
計画力	働くうえでの心構えの説明は、今後の自分に役立ったか	役に立った 21名 65.5（%）	少し役に立った 7名 21.9（%）	あまり役に立たなかった 2名 6.3（%）	役に立たなかった 2名 6.3（%）
実行力	この進路講演会の印象はどうだったか	満足している 26名 81.2（%）	少し満足している 3名 9.4（%）	あまり満足していない 1名 3.1（%）	満足していない 2名 6.3（%）
主体性	来年度も進路講演会を実施してほしいか	実施してほしい 28名 87.5（%）			実施しなくてもよい 4名 12.5（%）

5 課題

働くうえでの大切なことを、答えられない生徒が約半数いた。メモ用紙を渡し、記入する指導が必要だった。社会人になったとき、口頭だけで説明される場面がある。人の話をよく聞き、話された内容の中で大事な部分を瞬時に分析し、理解する能力を身につけさせる指導がかなり必要だと感じた。



○オンライン進路ガイダンスについて

1 目的・ねらい

本校生徒は就労意識が低く、また企業の仕事内容とのミスマッチで、入社し3年以内で退社する卒業生がいる。進路ガイダンスを通して生徒の職業観の育成を図る。

2 内容

オンラインでの異なる業種の人事担当者を講師として招き、業種説明と仕事内容説明の進路ガイダンスを実施する。

3 取組

令和6年2月2日（金）に講師として、がんこフードサービス株式会社、株式会社ナニワ電装、株式会社ジェイアール西日本フードサービスネット、F-LINE 株式会社、株式会社フォービルを招き、オンラインでの進路ガイダンスを実施した。

4 成果

各業種の説明は、「今後の自分に役立ったか」という質問に対して、「役に立った」7名、「少し役に立った」7名で、合計生徒数は14名（73.6%）だった。「この進路ガイダンスの印象はどうでしたか」という質問に対して、「満足している」8名、「少し満足している」6名で、合計生徒数は14

名（73.7%）だった。「来年度も進路ガイダンスを実施してほしいですか」という質問に対して、「実施してほしい」は 12 名（63.2%）だった。半数以上の生徒が、知らなかったことを知る良い機会だったと感じている。



ループリック評価

資質・能力	行動目標	A	B	C	D
知識・理解	各業種の仕事内容を答えられるか (発表できるか)	答えられる 3 名 15.8 (%)	ある程度答えられる 6 名 31.6 (%)	あまり答えられない 5 名 26.3 (%)	答えられない 5 名 26.3 (%)
計画力	各業種の説明は、今後の自分に役立ったか	役に立った 7 名 36.8 (%)	少し役に立った 7 名 36.8 (%)	あまり役に立たなかった 3 名 15.8 (%)	役に立たなかった 2 名 10.5 (%)
実行力	この進路ガイダンスの印象はどうだったか	満足している 8 名 42.1 (%)	少し満足している 6 名 31.6 (%)	あまり満足していない 2 名 10.5 (%)	満足していない 3 名 15.8 (%)
	進路ガイダンスは今回のようなオンラインと 6 月に実施した対面とのどちらが良かったか	オンラインが良い 16 名 84.2 (%)			対面が良い 3 名 15.8 (%)
主体性	来年度も進路ガイダンスを実施してほしいか	実施してほしい 12 名 63.2 (%)			実施しなくてもよい 7 名 36.8 (%)

5 課題

「各業種の仕事内容を答えられるか」という質問に対して、答えられる 3 名、ある程度答えられる 6 名で合計生徒数 9 名（47.4%）と低かった。

また進路ガイダンスに対して否定的な意見も出ており、興味や関心を持っているものとそうでないものに対する意識の違いが顕著に現れた結果となった。アンケート結果を受けて、できるだけ多くの生徒が自分の将来に興味・関心を持てるよう次年度の進路ガイダンスの形態を考えていきたい。

Ⅱ 卒業生の追跡調査について

昨年度の卒業生が、一昨年度の２月に実施したオンライン進路ガイダンスで、サービス業に興味を持った。昨年度６月に実施した進路ガイダンスの参加企業の説明を聞き、受験し、内定した。その企業の人事担当から、６月に生徒の前で、現在の自分のことを発表させて欲しいという要望があった。働いて２ヶ月しか経過していないが、本年度の就職希望者の前で、自分ができるようになったことや、成長したことを発表した。オンライン進路ガイダンスが、今の職場に就職する契機となったと言っていた。

Ⅲ 本事業（３年間）のまとめ

進路開拓について、積極的に進路先開拓をすることで、鳴門高等学校定時制の県内求人数が多くなった。県内求人数は、一昨年度２５社３２求人、昨年度３０社３７求人、本年度は、３５社４８求人だった。年度が進むごとに、求人数が増え、就職希望者の企業選択肢の増加に繋がった。

進路講演会について、「働く上での心構えの説明は今後の自分に役立ったか」という質問に対して、「役に立った・少し役に立った」生徒の合計は、一昨年度 77.4%だった。本年度は 87.4%だった。「この進路講演会の印象はどうだったか」という質問に対して、「満足している・少し満足している」生徒の合計は、一昨年度 77.4%だった。本年度は 90.6%だった。年度が進むごとに、今後の自分に役立ち、多くの生徒が満足する進路講演会になったと考えている。

オンライン進路ガイダンスについて、「各業種の説明は今後の自分に役立ったか」という質問に対して、「役に立った・少し役に立った」生徒の合計は、一昨年度 74.1%、昨年度 84.6%、本年度 73.6%だった。「この進路ガイダンスの印象はどうだったか」という質問に対して、「満足している・少し満足している」生徒の合計は、一昨年度 80.4%、昨年度 92.3%、本年度 73.7%だった。年度によって数字の違いはあるが、大半の生徒が今後の自分に役立ち、満足できる進路ガイダンスになったと考えている。

7) 名西高等学校定時制課程

I 取組の内容

①就労指導

○藍染め体験について

1 目的・ねらい

本校は、スクール・ミッションを「少人数でのニーズに応じた学習や地元起業家を講師としたキャリア教育を通して、能力・可能性を伸ばし、これからの時代に求められる社会人としての力を育成する」としている。勤労と学業の両立を図り、社会で自立する能力や態度を育成することをあげている。

しかしながら、小・中学校時代に不登校であった生徒も多く、様々な物事に対し実体験が乏しく、アルバイトを推奨するもアルバイト等により就労している生徒の割合は約60%である。

地元徳島は、藍染めの伝統が古来より引き継がれ、阿波藍の魅力は人々を引きつけている。藍染め体験を通して、地元の伝統に触れるとともに天然藍の持つ美しさや風合いのよさを知り、日常生活を精神的に豊かなものとする。

本年度も種まきから藍の植え付け、収穫体験から最終的に藍染めで作品の完成までの体験を行うこととした。

2 内容

天然染料の阿波藍の魅力を学び、藍の化学（生葉染の化学）について講義を受けるとともに、ろうけつ染めや絞り染めなどの技法を学び、藍染め実習に全学年で取り組み作品を作成する。

3 取組

藍の育成 4月末に播種 6月に植え替え 8月・9月に刈り取り等



令和5年9月14日（木）18：10～20：00

講師 一般社団法人ジャパンプルー上板

理事長 瀬部昌秀 氏

i 講義

- ・世界の青色染料について
- ・天然染料藍の栽培とすくもづくり

ii 実習（藍染め体験（ろうけつ染め））

- ・エコバッグ染め（ろうけつ染め）



4 成果

藍の播種や植え替え、雑草の駆除や収穫・葉の選別と藍を育てる苦労を通し農作業の大変さや伝統工芸を守るための苦労について知ることができたと考える。

体験の後日、昨年度と同様に事後学習を実施した。電子黒板等のICTを活用し、体験を写真で振り返る中で、藍染めに関する自身の思いや考え、また作成した藍染めエコバッグについて自己評価するなどクラスメートの前で発表する時間を設けた。このことは、学びの質を向上させるために有効な授業方法であると考えている。自分の意見を発言することや自発的に動くことが苦手な生徒も多いが、上級生の発表に刺激を受けて人前で発言する度胸や人の意見を傾聴する姿勢が次第に身に付きつつあり、今後も指導を継続していく必要性は大いにあると感じている。

○エシカル教育について

1 目的・ねらい

藍染めと同様に植え付けから畑の管理、収穫と調理を通しての農作業の大変さや地産地消について考える機会をつくる。外部からの講師を招き、私たちを取り巻く食糧事情について考える。

2 内容

ジャガイモやタマネギ、サツマイモなどを四季を通じて栽培し、収穫

した野菜の調理を行い、畑や野菜の管理の難しさやを学び、自分たちで収穫した野菜で調理実習を行う。

株式会社グリラスから野地澄晴先生を講師として招き、地産地消や食品ロスなど世界の食糧事情への取組やタンパク質危機などについて学ぶ。

3 取組

学校菜園での野菜の植え付けや収穫と調理実習



エシカル講演会

令和5年11月28日（火） 18：10～19：50

講師 株式会社グリラス 野地澄晴



4 成果

植え付けや収穫だけでなく、畑の維持や管理についても行い、毎日消費している野菜の栽培に苦労があることを体験的に学ぶことができた。また、食品ロス問題や世界的な食糧事情についての講演、子ども食堂への参加などを通じて食べられることの大切さについて考えることができた。

③学力向上指導

○ICTを活用した効果的な授業・講演の実践

1 目的・ねらい

徳島県GIGAスクール構想による1人1台端末の積極的な活用を図り、多様性ある生徒達に、公正に個別最適化された学びを推進する。

2 内容

外部講師による講演のグループワークなどを活用し、学ぶ楽しさを実感し、学習意欲の向上を図る。コンテストへの出品に向け、データの解析・スライドを制作する。ICTを積極的に活用し作品の制作過程で思考の深化を図る。

3 取組

i 授業での実践事例

- ・タブレット端末で調べ学習を行い、プレゼンテーションを実施
- ・グループ学習でのデータの加工や意見の集約、発表原稿の作成。
- ・授業や行事におけるアンケートのデジタル化 (Forms)



＜外部講師によるグループワーク＞

＜調べ学習＞

ii コンテストへの挑戦

- ・高校生ビッグデータ活用コンテスト

「石井町にイノベーションを」～石井町の明るい未来を目指して～

- ・中学生・高校生データサイエンス コンテスト

「プロジェクト X ～X 駅前店のスーパー分析～」



4 成果

2 学期末の生徒アンケートにおける項目で「ICTを活用し自ら学ぶ面白さを感じる」100%、「ICTを活用し社会で役立つ能力が身につく」が90%と前向きに取り組む姿勢が見られた。

令和5年度高校生ビッグデータ活用コンテストにおいて優秀賞、神戸大学主催の中学生・高校生データサイエンスコンテストで優秀賞を受賞することができた。

Ⅱ 卒業生追跡調査について

令和4年度の卒業生は8名の生徒が卒業を迎えている。就職が4名、進学が2名、進路未定（アルバイト継続）が1名となっている。生活体験発表で自信を持ち、自分の意見が言えるようになった生徒や、生徒会活動や校外活動において頑張りを見せた生徒は就職活動でも努力し、卒業までに就職活動を終えている。就職してまだ1年に満たないが、担任へ近状報告に来校するなど離職の気配は見られず、社会人として頑張っている。

令和5年度の生徒においても、卒業までの就職内定を目指し、進学課長と会社見学に参加するなど積極的に活動しており、「とりあえず卒業」を目指す数年前の状況からは大きく変化している。

Ⅲ 本事業（3年間）のまとめ

令和5年度の1年生の1学期のアンケートでは「自分に自信を持っている」「自分は役立つ存在だと思う」では23.1%、「自分のことが好きである」「自分は大切な存在である」は38.5%と自己有用感や自己肯定感は低い数値となっている。また、他者と比べた自分で低い評価をしがちである。

このことから、なるべく未体験で生徒間の差が生じにくい農業や作業を通しての体験を中心とした取組を行った。未体験の作業に対し、積極的に参加できない生徒もいたが、形あるモノができることで次年度には参加する姿勢に変化が見られた。

また、自分の意見を発言することや他者とのコミュニケーションを苦手とする生徒が多く、発表やグループ協議などでは意見が出ないことも多かった。様々な機会においてなるべく生徒に発言を促し、発言内容に関しては肯定する雰囲気を作るなど授業や調べ学習で取組を行った。グループや個人での発表で発言することに慣れさせ、コンテストへの応募への道を開いた。昨年度のビッグデータコンテストでの上級生の入賞を機に自分たちでも頑張ればできるという生徒のやる気に繋がり、本年度は2つのコンテストで入賞を果たしている。

生徒の自己肯定感や自己有用感の向上を行う取組としてこれらの取組は有効であったと考える。本事業は終了ではあるが、入学する生徒の実態に即した形で継続して行いたいと考える。

8) 徳島県立池田高等学校定時制課程

I 取組の内容

①就労指導

○職場見学・ビジネスマナー講座について

1 目的・ねらい

I C Tを活用したキャリアガイダンスやビジネスマナー講座等を実施することにより、社会人・職業人として求められる資質・能力、社会の動向や労働者の権利等の理解を深める。また、職場見学を通して生徒が実際の仕事や職場の雰囲気と直接触れることにより、主体的な進路選択に繋げる。

2 内容

事業所訪問による職場見学、マナーアドバイザーによる I C Tを活用したビジネスマナー指導等を通して、社会において年齢や立場、性別、価値観等が違う人々と良好な人間関係を築き、組織の一員として考え行動するための基本的な知識や態度、社会人・職業人に求められる心構え、行動規範等について学ぶ。

3 取組

◇ 7月 ビジネスマナー教室(電子黒板)

「面接に役立つ、

好感度アップ・マナー講座」

講師： マナーアドバイザー

土居 珠見 氏

◇ 11月 キャリア教育講演会(電子黒板)

講師： 自衛隊徳島地方協力本部

三好出張所長 川村 直也 氏

三好出張所広報官 中津 光宏 氏

◇ 12月 ビジネスマナー教室(電子黒板)

「社会人としてのマナー講座」

講師： マナーアドバイザー 土居 珠見 氏

◇ 12月 職業体験・職場見学

国立研究開発法人

産業技術総合研究所四国センター

◇ 1月 キャリア教育講演会(電子黒板)

講師： 社会福祉法人

池田博愛会 箸蔵山荘

課長 木村 公明 氏

係長 山口 智隆 氏



4 成果

ビジネスマナー教室では「面接に役立つ、好感度アップ・マナー講座」「社会人としてのマナー講座」として実演を交えてのマナー講習であった。また、職場見学は、国立研究開発法人産業技術総合研究所四国センターにおいて生命工学領域・健康医工学等の研究についての説明や施設見学等を実施した。事業所を訪問し、実際の仕事に触れることにより、就労への動機付け、働く意義等について、意識させることができた。

※学校評価アンケート結果

質 問	肯定的評価%→	R5	R4	R3	R2
【生徒】キャリア教育HRや講演会を通して、進路決定や働くことについての意欲が高まりましたか。		85	87	83	90
【保護者】学校は、就労についての支援をしてくれている。		92	93	89	84
【保護者】子どもは家庭で、進路や将来のことについて話をするようになった。		75	80	72	84

5 課題

就労意欲が低い生徒もいるため、入学後の早い段階で進路ガイダンスや就職体験・職場見学等を積極的に実施し、早期に進路意識を芽生えさせ、自分自身で進路選択しようとする意欲や態度の育成、継続して就労できる忍耐力を育成する必要がある。また、生徒の適性に応じて、職業とのマッチングについて考える機会を設けたい。さらに、講師によりICT活用能力の差があるため、今後は講師へのICT活用サポートを手厚くし、より効果的な教育活動になるように改善していきたい。

②ソーシャルスキル向上指導

○自分や他人を大切にすることを意識した教育活動について

1 目的・ねらい

逞しく生きるための健康や体力を維持・増進できる能力や、社会生活で起こる情動やストレスに対処する能力を生徒に身に付け、豊かな情操や安定で健康な心身を養いながら、自尊感情・自己肯定感の醸成を目指すとともに、ICTの活用や協働的な活動によりコミュニケーション能力の育成を図る。

2 内容

ICTの活用や協働的な活動を多く取り入れ、対人関係を円滑に運ぶためのスキルの向上を図る。また、音楽に関する活動や体力増進講座等を通して、自分と向き合わせ豊かで強い心身や自尊感情の醸成に繋げる。

3 取組

◇11月 メンタルヘルス講習会（電子黒板）

「他者との上手な関わり方」

講師： スクールカウンセラー

井上 京子 氏

◇11月 いじめ防止リモート講座（電子黒板）

「SNSを使ったコミュニケーション」

講師： 情報モラル教育アドバイザー

宮木 愛 氏

◇12月 体力増進講座（スピーカーホン）

「体力増進エクササイズとストレッチ」

講師： Yutori

ピラティス・ヨガインストラクター

三好 藍華 氏

◇2月 スクールソングプロジェクト（電子黒板）

「卒業ソング制作」

講師： シンガーソングライター ゆりり



4 成果

メンタルヘルス講演会では、電子黒板を用いてイラストで説明したので、集中して聴き内容を把握した。ロールプレイングを通して、他者との関わり方や、適切な気持ちの伝え方等、グループになって協働的、主体的に学習を進めることができた。次にいじめ防止講座では、生徒用タブレット端末を活用して、SNSとの上手な付き合い方を実践的に学習し、感じ方に個人差があることをペアワークを通して発見できた。また、体力増進講座ではリラクゼーション音楽を聴きながら約1時間ストレッチや筋力トレーニング等を取り入れながらみっちり体を動かすことができ、ストレスを発散できた。最後にスクールソングプロジェクトでは、本年度は音響機器を活用してオリジナルの卒業ソングを制作し、卒業式を感動的なものにした。

※学校評価アンケート結果

質 問	肯定的評価%→	R5	R4	R3	R2
【生徒】学校生活は楽しいですか。	77	87	67	85	
【生徒】校則や交通ルールなどの決まりをきちんと守っていますか。	100	93	100	90	
【保護者】学校は、いじめのないホームルームづくりや、子どもに人権を尊重する意識を育てようとしている。	85	100	94	89	
【保護者】学校は、子どもに社会のモラルやマナーを教え、社会規範意識の育成に努めている。	92	100	89	100	
【保護者】子どもは、学校に行くのを楽しみにしている。	85	87	56	68	

5 課題

生徒は異なる背景、経験、性格を持っており、ソーシャルスキルの発達レベルも異なるため、一人ひとりのニーズを理解し、個別化されたアプローチを取ることが重要であると感じた。ソーシャルスキルは理論だけでなく、実践を通じて学ぶことが多いため、今回のようなロールプレイングやディスカッションなど、安全で支援的な環境での実践的な練習の機会を増やしていきたい。また、ソーシャルスキルの向上は一晩で達成されるものではなく、時間をかけて継続的に努力する必要があるため、一貫したサポートと指導の必要性を実感した。

③学力向上指導

○授業改善・学力向上講座等について

1 目的・ねらい

多様な子どもたちを誰一人取り残すことなく公正に個別最適化され、資質・能力が一層確実に育成できるGIGAスクール構想における1人1台端末を効果的に活用した教育活動を充実させるとともに、基礎的・基本的な学力や学ぶ意欲、問題解決等、社会で生き抜く力の基盤となる確かな学力を生徒に育成するために、教職員の授業力向上を図る。

2 内容

GIGAスクール構想の現状と将来の見通しについて理解を深めるとともに、これまでの教育実践の蓄積にICTを取り入れた、学習活動の一層の充実及び協働的・体験的な学び合い、主体的・対話的で深い学びの視点から、アクティブラーニングやICT機器、シンキングツールを活用した授業に関する校内教職員研修や授業参観週間を設けて授業改善に繋げた。漢字能力向上講座、計算能力向上講座では生徒の状況に応じてレベルを段階的に設定して実施した。毎日15分の読書の時間を設け、読書以外に認知力・思考力向上の時間にも活用した。さらに、時事問題に関する生徒自身の意見や考察を主張できるように生徒用タブレット端末を活用した。

3 取組

◇授業力向上（電子黒板・タブレット端末）

：ICT機器活用講座、シンキングツール活用講座
相互参観、研究授業

◇基礎学力向上（電子黒板）

：漢字能力・計算能力向上講座、読書の時間

◇認知機能向上（電子黒板）

：コグニティブ・トレーニング

◇思考力・表現力向上（電子黒板・タブレット端末）

：時事問題理解力トレーニング



4 成果

他の教員の授業の見学やシンキングツールに関する研修により授業の組み立ての幅が広がった。ICT 活用授業には生徒の多くが好意的で、授業に取り組む姿勢も向上した。学力向上講座では、漢字・計算テストを年4回実施した。読書に関するアンケート結果では今年度読んだ本の冊数（10冊以上：6%、5-9冊：6%、2-4冊：34%、1冊以下：54%）で昨年度より低下したが、貸出冊数は上回った。

※学校評価アンケート結果

質 問	肯定的評価%→	R5	R4	R3	R2
【生徒】授業はよくわかりますか。	62	73	67	70	
【生徒】授業を真剣に受けていますか。	92	87	72	80	
【生徒】授業に満足していますか。	92	80	78	75	
【生徒】学校は生徒の学力向上に向けて積極的に取り組んでいますか。	92	87	83	90	
【生徒】校内計算テスト・漢字テストには熱心に取り組めましたか。	62	73	44	90	
【生徒】「読書の時間」に満足していますか。	92	73	56	80	
【生徒】定時制読書室の本棚にある本には満足していますか。	85	73	78	70	

5 課題

学力の基礎・基本の定着は、社会生活に必要不可欠であり、今後も個々の能力や目標に応じた学習課題の設定等、きめ細やかな指導が重要である。社会で求められる学力の育成を目指して、協働的・体験的な学習、探求的な学習、言語活動の充実等を意識した授業改善が必要である。年々授業や特別活動等において、教職員のICT活用が進む中で、生徒用タブレット端末の活用が不十分であった。次年度については、生徒用タブレット端末の周辺機器を整備するとともに、活用法について、教職員の研修会や技能を伝え合う機会を増やし、ICTを活用したよりよい学びに繋げる。また、授業において教員から出題するだけでなく、生徒自ら興味関心を持って主体的・積極的に学習できるように取り組む。

④特別な支援を必要とする生徒への指導

○校内職員研修・学習環境づくり等について

1 目的・ねらい

研修会や情報交換・共有を通して、教職員の教育的スキルや資質の向上を図り、生徒一人一人の特別な教育的ニーズを把握し、適切にICTも活用しながら多様な生徒の実態に対応した適切できめ細やかな支援の充実に繋げる。

2 内容

生徒の個性や特性に応じたきめ細かな支援の充実に繋げるための、特別な支援を必要とする生徒への支援・指導と、その保護者への対応等について考えるとともに、

多様な生徒が授業に参加しやすい環境作りを行う。さらに、自尊感情・自己肯定感について正しく理解し自尊感情の育て方について考える。

3 取組

◇11月 特別な支援を必要とする生徒への指導に関する校内教職員研修会
スクールカウンセラー（電子黒板）

井上 京子 氏

◇12月 自尊感情アンケートの選別と実施
東京都教職員研修センター紀要
「自尊感情測定尺度」を用いて調査

◇通年 教育相談に関する個別会議
スクールカウンセラー

井上 京子 氏

◇生徒が授業に参加しやすくなるための掲示方法の工夫やICT活用による学習環境づくり



「自尊感情に関するアンケート」について

- 計22問
 - 5段階の自己評価「あてはまる」5点～「あてはまらない」1点
 - 結果
 - ・三角形のグラフで表示
 - ・養護教諭・スクールカウンセラーと分析
- ※アンケートと合わせて
日頃の生徒の観察が大切



アンケート内容

	設問
A 自己評価・自己受容	私は今の自分に満足している。
	私は自分のことが好きである。
	自分はダメな人間だと思ふことがある。 ※反転項目
	私は自分という存在を大切に思ふ。
	私は今の自分は嫌いだ。 ※反転項目
	自分には良いところがある。
	自分は誰の役に立っていないと思う。 ※反転項目
	私は人と同じくらい価値のある人間である。

アンケート結果（R3. 12月と R4. 12月比較）

項 目	R3(1・2・3年)12月平均	R4(2・3・4年)12月平均
A 自己評価・自己受容	2.92	3.36
B 関係の中での自己	3.66	3.95
C 自己主張・自己決定	3.40	3.83

アンケート結果（R4. 12月と R5. 12月比較）

項 目	R4(1・2・3年)12月平均	R5(2・3・4年)12月平均
A 自己評価・自己受容	3.16	3.07
B 関係の中での自己	3.94	3.90
C 自己主張・自己決定	3.77	3.64

4 成果

生徒全員のカウンセリングを実施した。心の不調に対する理解が深まり、生徒理解や教職員間での情報共有に繋がった。また、スクールカウンセラーや養護助教諭と連携した適宜情報交換や校内教職員研修会等の機会を設けることにより、生徒のトラブルや心の変化等への早期対応ができた。授業環境作りに関しては、タブレット端末の活用は学校生活において有効であり、電子黒板やホワイトボードの活用との併用で生

徒への指示が明確になり、より主体的な生徒の活動に繋がった。さらに、教育相談や授業に関するアンケートの結果ではすべての質問で肯定的な評価が8割を超えており、生徒と教職員との関係の良好さを実感できた。

5 課題

次年度については、特別支援についての知識や役割をしっかりと身につけた上で、生徒たちと関わることが重要である。そのためには本年度以上の研修や指導によって、教職員全体が様々な知識を習得し、経験を積むなど多くのことを研修していかなければならないと考える。本年度は不登校経験者が全体の8割を超えており、精神的に情緒不安定な状況に陥りやすい生徒も少なくない。今後もその傾向は続くと思われるため、中学校や関係機関とも連携し、入学前から生徒の実態把握に努めるとともに、学習面・行動面・対人関係等に悩みを持つ生徒に対して、個々に応じた支援ができるよう、教職員の資質・能力の向上も含めて総合的な準備が必要である。

※学校評価アンケート・授業評価アンケート 結果抜粋

④とてもそう思う ③そう思う ②あまり思わない ①全く思わない ④+③⇒肯定的評価

質 問	肯定的評価%→	R5	R4	R3	R2
【生徒】池田定時の先生はあなたの悩みや相談について、よく相談にのってくれますか。	92	93	89	80	
【生徒】あなたは池田高校に入学してよかったと思いますか。	100	87	94	85	
【保護者】教員は、三者面談で保護者の意見や相談を聴いてくれた。	85	100	94	100	
【保護者】教員は、子どもをよく理解し、子どもについての相談に適切に応じている。	92	93	94	95	

⑤多様な学習ニーズに対応できる体制の構築

○A I 学習ツールの活用について

1 目的・ねらい

パーソナライズされた学習を実現するため、A I を活用して生徒一人ひとりの学習スタイル、能力、進度に合わせたカスタマイズされた学習を実践する。また、学習効率の最大化を図るため、A I の分析能力を利用して生徒が理解しにくい部分を特定し、その部分を強化することで学習効率を高め、躓きの克服に繋げる。さらに、全ての生徒の学習機会を拡大するため、個々の生徒の学習スタイル、ペース、能力に合わせた学習を実践し、すべての生徒が等しく学習機会を得られるようにする。そして、生徒の自立した学習を促進するため、自分の強みや興味に基づいて学習できる環境を整え、生徒が自立した学習者になることを促す。

2 内容

パーソナライズされた学習はA I 機能を生かしてそれぞれの生徒の学習スタイル、能力、そして進度に合わせて課題を配信する。このアプローチとして、生徒一人ひとりのニーズに深く寄り添い、個別の学習経路をサポートする。また、A I の分析能力

を活用して、生徒が理解しにくい部分を特定し、その部分を強化することで、学習の障壁を取り除き、効率を最大限に高める。これにより、生徒は自分のペースで学習を進め、理解が深まると同時に、学習に対する自信に繋げる。そして、全ての生徒が等しく学習機会を得られるようにする。従来の一斉授業では見過ごされがちな個々の能力やペースを認識し、それに応じた指導を行うことで、すべての生徒が自分の可能性を最大限に引き出せるよう支援する。

3 取組

- ◇9月 AI 学習ツール活用ガイダンス
- ◇通年 各教科の授業におけるAI 学習ツールの活用
- ◇12月 課題テストの実施及び復習課題の配信
- ◇長期休業における課題の配信



4 成果

AI 活用により学習プロセスを自動化し、即時フィードバックすることにより、仕事と学校の両立で自由時間が少ない本校の生徒にとって、学習時間の効率化に一定の示唆を与えた。また、AI 活用により生徒の学習進捗と理解度を可視化することにより、教員の適切なサポートや教科授業へのフィードバックに繋がった。さらに、AI 活用により生徒の学習のつまづき箇所を可視化することにより、教員が生徒の弱点分野をピンポイントで学び直しさせることができた。

5 課題

生徒個人の学習スタイルと進捗に合わせて教材をカスタマイズすることで、より効果的な学習が可能になり、生徒一人ひとりの理解度を向上させることができると考えてAI 学習ツールを活用したが、生徒の課題が量が多すぎて取り組みへのモチベーションを低下させてしまったため、AI のみに任せず人的な確認も行いながら課題の配信量の細かな調節が必要となる。また、AI 教材を活用することにより生徒の自主的・主体的な学習習慣の形成に繋がると考えたが、学習を自己管理できたのは一部の生徒に留まったため、AI 教材の学習内容の精選や学習量を調整することが重要になると実感した。さらに、教師全体が技術スキルを向上し、ICT を効果的に活用できるように継続的な研修とサポートが必要になると考える。

II 卒業生追跡調査について

○卒業生からのフィードバックについて

- ◇ICT を活用した教育を受けたことで、就職してからのICT の利用に関して抵抗がなく、自信を持ち、デジタルスキルを習得していく意欲も高まっている。
- ◇就労指導、キャリアガイダンス、ビジネスマナー講座で学んだことが、新しい職場で

の日々の業務に生かされている。

◇ソーシャルスキルの強化を目指したことにより、卒業後の新しい環境でも対人関係や協働作業において効果的にコミュニケーションをとれるようになっている。

◇対話的、主体的、能動的な学習を行った経験は、社会に出てからの学習へのモチベーションの向上に繋がり、自らの学習プロセスをコントロールできる自信にも繋がっている。

◇実際の職場体験や企業見学を通じて、社会や仕事環境への理解が進んだことにより、就職先でも職場環境に順応しやすく、社会に適応する能力が向上している。

Ⅲ 本事業（３年間）のまとめ

就労指導では、社会人基礎力の育成を目的として、キャリアガイダンスやビジネスマナー講座を実施したことにより、生徒は社会人として求められる心構えやマナー、社会規範を学ぶことができた。また、実際の職場環境を体験するための企業見学や就業体験を通じて、勤労観や職業観の育成を促進することができた。

ソーシャルスキルの向上に関しては、芸術や文化を通じた学習を通して、生徒の問題解決能力やコミュニケーション能力の育成を目指すことができた。専門家による研修や講演会を実施し、適切な対人関係や集団行動の促進に繋がったと考える。さらに、豊かな運動習慣の確立と心身の健康維持のサポートにも繋げることができた。

学力向上指導では、ICTを活用した授業により、コミュニケーションツールを用いて議論を活性化し、対話的で能動的な学びを促すことができた。基礎的な学力の向上だけでなく、問題解決力や学ぶ意欲の育成にも繋げることができた。

特別な支援を必要とする生徒に対しては、ICTを活用した個別化された指導を提供できた。言語的・感覚的情報の可視化や、画像や映像を利用した学習を通じて、生徒一人一人のニーズに応じたサポートに繋げることができた。

以上のことから、生徒が学校生活と仕事を両立させることや、基本的な生活習慣の確立、自己中心的な態度や低い自尊感情等、多くの生徒が抱える様々な課題に対処することを目的としたICTを駆使した教育の実践は、生徒たちの進路実現や自己実現に向けた深い学びを促進し、個々の生徒に対するきめ細やかな支援に繋がったと考える。そして、生徒が変化の激しい社会を生き抜くために必要なスキルと知識を身に付けることを目的としたICTの効果的な活用により、教育のパーソナライゼーションを促進し、個人差はあるが生徒一人一人の潜在能力を引き出すことができたと考え、本事業が有益で有意義なものであったことを強く実感できた。

